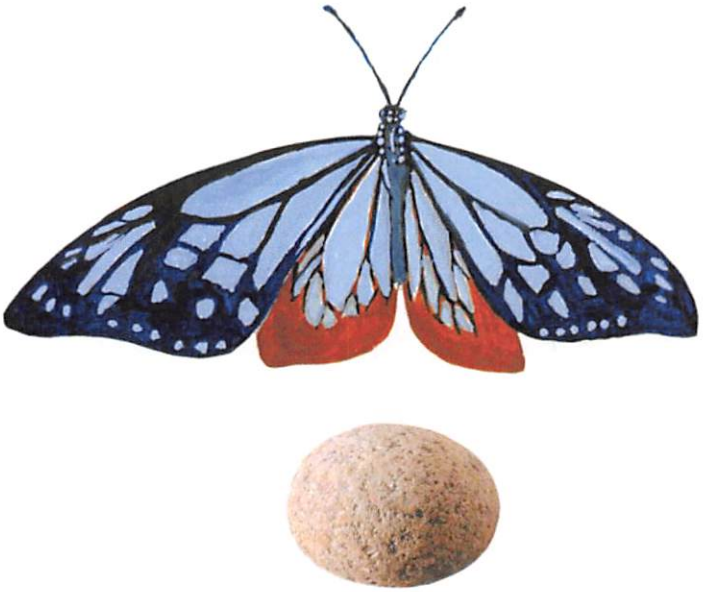
地中海

MARE MEDITERRANEUM

2020. 1



令和２年1月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第1号　No.740

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二〇年　一月号　（通巻七四〇号）

◇今月の二十首詠……窓　松永智子　2

■作品Ⓐ
A　白子れい・浜本芙美他　4
B　萩原嘉津子他　20
C　平尾はるみ他　54
A　浜名結衣他　68
C　関西正子他　82

■オリーブ集　岩里周英・植田和子他　44

◇今月の二人　石田安子・大久保麗子　16

香川進の生きものの歌　15　田土成彦　15

宮柊二と香川進（続）　久我田鶴子　38

私と短歌との出会い（209）　八橋千代子　19

◇シルクロード・カフェ――【責任編集】木村文子　50

■歌壇月旦――類想・自己模倣を越えんと　槍垣美保子　53

第一歌集の頃　萩　葉子　66

■遊覧寄港〈みち・今思うこと〉　藤森巳行　98

■十一月号作品批評――　定金崇恵　52
A……牧　雄彦・岩井久美子
近藤芳仙・千葉む津
B……八田暁美・根岸　亮
C……田口紀久子
オリーブ集……関根和美　74

今月の二人・作品評　久我田鶴子　18

会記・大久保閔子歌集『風をたずねて』を読む会　杉浦詩子　73

最近の歌誌より――　〔編集部〕　67

クリップ……99　神田通信……100

〈写真・歌合わせ〉作品募集……表3

（表紙デザイン）Tazuko Kuga

窓

松永　智子

昭和四年九月三日生まれ。青嵐グループ。
昭和四十二年第一歌集『黒ゆりの歌』
平成二十八年第六歌集『川の音』他。
平成十一年エッセイ集『ことばと出会う』

音絶えしままなるあかとき空高しいまだ衢にうごくかげなく

ものの音ことごとく果てしごとき朝鴉一羽鳴かず飛びゆく

不意なりぬ一羽の鴉声たてず窓ちかく飛び視界より去る

一羽なる鴉はいづくゆくならむうすくれなゐのあかときの空

とほくゆくひとのかげとも見て立てりこのあかときの空のくれなゐ

サングラスかければあたらし日を反すビルディングまた行く人のかげ

閉づるべく窓に立ちみる空高しとほしつひなるかなしみならぬに

うすれゆく喜怒哀楽のごとくにも雲仰ぎたりのち閉ざす窓

窓閉づる夜ごとに仰ぐ空の色かはりやすくしかはることなく

わらはべは夜の巷をしやくりあげしやくりあげつついづくまでゆく

風かわく衢の夜を発ちてゆきすでにしとほしエンジンの音

午前二時にんげんの声間遠なりかげあはあはとゆくらしき声

ライト浴びおどろき飛び出し駈けゆける犬の影はや遠くなりたり

月の出を待つにはあらず夜ふかくいづくまでゆくさりながらの声

にんげんのことばただよふ夜の闇徐々にかわくを照らす半月

外の音断つにはあらず窓を閉ぢ常なるごとく灯をともすなり

窓ごとにともる灯火見てあるに人の声きくこと稀にして

おやすみと誰にともなくつぶやけり夜ごとに閉づるこの細き窓

とどけたきことばのあらずこの夜を閉ざすべく蒼きカーテンを引く

無援なることばのひびきやはらかく東の空に十七夜の月

作品 A

白子れい　一本のみち　・洛

今年また茶道の講演無事終わる幾たびなすも緊張はしる
茶のこころ一期一会を解説す今後の生にいかされよとて
明日よりは一期一会に生きられよ未来あかるき若者たちよ
鶴亀のお干菓子懐紙にこりと茶道体験教室の生徒ら
振りかえりふり返りつつもひたすらにわが歩み来し一本のみち
喜びも悲しみもなき凡々の日々かさねゆく流るるごとく
本気ほん気本気で生きん残りいる日々の少なし本気で生きん

浜本芙美　ママ閉店　・夢

水仕終え安らぐひととき幼むけの朝のEテレキッズ楽しむ
子育ての途上において「ママ閉店」こんな言葉の生まるる時代
生命保険の電話勧誘ぴったりと絶えたることもさびしきひとつ
こんな時間も心のこやしになるかともぼおっと朝の映像の前
自堕落な格好して椅子に腰掛けてみてもああ落着かず
じわじわと寒さ寄せくる秋半ばわれの内耳に蝉を飼いおり
自転車に乗るのを止めて一年余足のおとろえとみにすすみぬ

ばばりょうこ　神の設計　・鹿

世界的にもまれなる病いとや聞き乍ら医学に貢献するもよしとす
五年間の生存計画を立てたれば悪友「あなた甘いわねェ」と
一、二年が限度でしょうと言い切りぬを妙にさらりと受けて聴きたり
歯に衣を着せぬ医療系の長き友のきっぱり言うをきっぱりと聞く
いずれにせよ当るあたらぬはさておきてわが人生は神の設計
病むというを恩恵として自浄への時間をたっぷりいただきました
わたくしの事だからもしや終の日は新たなる未来へときめき発とう

萩葉子　スナフキン　・銀

緑色の三角帽子　スナフキンが遠くを見ている
誰にも云えなかったことを小さな声でスナフキンに話す
ノコンギクゆれて淋しい神無月ふるさと遠いと話し合いたり
「ひらがなで話して下さい」と告げた人今どんな歌詠んでるだろう
縁側のひなたでギターひいてくれた兄に倣りすゴッホの絵ハガキ
A7の備忘録ノートにぎゅうぎゅうとこの秋予定の変更詰め込む
午前四時冷たくなった白湯含みやっと眠れる七首ができた

浜谷久子　産土　・地

原発の不穏を運ぶトラックが何台も行くトラックだけが
乗用車走らぬ国道人影のない道トラックが信号を待つ
原発に見えない未来真相を覆う力のどこからともなく
汚染というレッテル哀し産土の土に露ほど罪科のなく
封鎖される請戸小学校すぐまぢか運び込まれるフレコンバッグ
十三代続く窯元相馬焼き浪江の土の被災に離郷の
蕊白くそよがせる声穏やかに窯の当主の迎え給う夏

檜垣美保子　秋冷　・昴

ねむるまでここにいるよと母言いき雨の音して夜をいざなう
きんもくせいはげしく香りしよべの梅雨のむこうに消えてしまいぬ
自転車の前籠に一輪菊の花黄のいろ朝をあたらしくして
影踏みにおさなとあそぶ秋の午後踏みたがえたりくすのきのかげ
冷蔵庫の卵の横に五箇月を冷やされしまま春の眼薬
こおろぎの歌から逸れてかたつむり鳴くか鳴かぬか揺れてたのしむ
「本当の悪は笑顔のなかにある」キャッチコピーの「本当」は何

福田庸子　隠岐　・今

参道を進めば太き桜木の猛り越したる葉の色に会ふ
光凰の書に刻まれて上皇の無念ひたすら隠岐にとどまる
米野菜魚足るる島おほらかに後鳥羽上皇を迎へまゐらす
立ち寄れる北前船の富受けて隠岐西郷の妓楼の跡は
メチと呼ぶ日本海鰡と遊びしを語る古老の視線の先は
四十余里の近さにあると指し示す「竹島は日本」港内に建つ
船体の白きに真青の横線の実習船泊つ隠岐水産高校

藤田美智子　赤　・新

焼け落ちし首里城の瓦五万五千枚奥原崇典の生み出し赤
無著菩薩立像に長く向かひゐる君の横顔ひとり占めする
ウィンカーを出さずに右折してゆけり直前まで何を迷へる人か
〈自らをはづせ〉と声するたそがれに稔り田四枚暮れ残りたり
くもの巣にかかりて風に揺れてゐる散るはずだつた小さき花びら
水に流すといふ言の葉のたやすさよ為せざるままに二十年過ぐ
なくなるを待てずに飴を咽む癖の人を急かすことにも及ぶ

藤森巳行　不死身の男　・銀

友人が二人続いて霊前へ令和元年九月十月
志果たして帰らむふる里へ友との誓ひは来世に叶へむ
ふる里に飾る錦は無いけれど真面目に生きたと父母に伝へむ
地中海本物見ずに死ぬだらう地中海誌に歌は載れども
高い所も平気で登り八尺の梯子から落ち腰を強打す
八尺の梯子から落ち打撲のみ不死身の男と呼んで下さい
腰痛め妻の手縋り立ち上がるしばらくぶりに手を繋ぎたり

船田清子　花なき仲秋　・天

日の暮れは君帰り来やと今もなほ心急かるる夕餉の支度
昼までをひた鳴きめぐりしこほろぎの雷雨の後は絶えて声なく
みづからを雌に供せしならば幸雨に死するはあはれ無惨や
りんりんと注ぐ月光に誘はれ君や巡れる　昴八つ星
萩・すすき今年花なき仲秋を月天心ににこやかに笑む
大水害を置土産となす台風ののちおもむろに目覚む木犀
風に乗るかそけき香りは木犀か見回す頭上に盛る朱の花

牧雄彦　ありがたう　・大

「ありがたう」最後のメールのを送りたり姉との交信けさで終はりぬ
今ごろは彼岸に着きてたらちねと笑ひあひゐる姉かと思ふ
まなかひの大文字山秋のいろ姉の墓より見つむしばらく
海峡は波しづかなり秋の日をはじきて潮目をくつきりと見す
夕空を影曳きながら飛ぶ一羽われの思ひをとく告げにゆけ
みぞれ降る低き町並みいなづまが突如光りて雷とどろけり
いかづちのとよもす町に降るみぞれゆふべの道をゆく人はなし

松浦禎子　わたしのローマ　・羊

丈低く横ひろらなるローマの松日路あちこちに姿したしく
コロッセオ遠廻りして街角よりはるかに仰ぐローマの夜を
ピエタ像の前に立たせてカメラ向くる子のあればこそイタリアの旅
ピエタ像の前に記念の写真とるほほえんでいいのかわたしはここで
一枚の石を仕立てし職人の年月をふと踏みしめてゆく
ヴィア・ジュリアこの舗石を貫っすぐに今日・いま・ここにわたしのローマ
信仰の証しをひらく物語かたらずに逝きてしまいし敦子

松永智子　野火　・嵐

峡の空高くしとほし風のなくいづくにか水のしづくする音
待つとなく待つ水の音昼ふかく山のほとなる空高くして
かなしみて問ふことばなし　夏終り見上げ立ちたり山峡の空
風のやみ峡の音のふとも絶えふり仰ぎみる大き浮雲
野火もゆる闇はるかなりふりむけば記憶のなかなるかげまたとほし
くれなゐに染まる東天刻々と褪せゆく見たり立ちあがりたり
あかときの空よぎりたる鴉一羽とほくなりたりなにを見つらむ

三浦好博　停電　・銚

ローソクの明かりに食事す水害のラジオニュースを共に身に沁み
台風の被災地渡る鳥の目に青きシートの屋根屋根屋根ぞ
絵蝋燭はかたみに顔を浮かべたり停電もよし結婚記念日
大嵐過ぎて停電二日目に満月入れる我が五合庵
電気付きやつとテレビに接したり濁流濁流視覚恐ろし
停電の二日目オリオン流星の一、二遥かな電灯あかり
俯きて歩きスマホの若者よ見よこの高き秋の御空を

宮本靖彦　秋深む　・凌

コンテナー長く積みたる貨車がゆく天王山の秋を巻きゐて
知恩院の高き石段踏むごとに東山峰紅葉ふえゆく
知恩院の高き石段外つ人も途中ねをあげビニール傘揚ぐ
三門の丸き桂ゆ紅葉貰る寝たる姿の東山かな
ポツポツと雨のごと降るどんぐりに秋化粧の山いそがぬ私
玉手箱あけたるごとし十年ぶり法事に集ふいとこはとこ等
待つほどに薄雲を穿き満月は東の空に黄金顔見す

三好聖三　煙管　・伊

壁ぎわのにわか作りの椅子にいて草生に冴える鈴虫を聞く
とりあえず灯を消して闇を視るドラマ「チート」が始まるまでは
少年を強いる力はなんだろう線路にひとつ爆弾を置き
煙管にて煙草を吸えと義父が言う戸惑いながら一本を吸う
霜月のついたちにして義姉からはワンカートンの煙草が届く
奥方の名前だろうか泥酔の男がしきりに叫ぶ街路に
壁にあるジャン・ルー・シーフの写し絵の褪色グンとすすみつつある

御代田澄江　救急車　・茨

呼吸(いき)出来ぬ苦しさの中娘に電話救急車を案内しつつ娘到着
隊員に抱へられ乗る救急車に折良く帰宅の次男飛び乗る
ＩＣＵに運ばれ死線さ迷ひぬ圧迫骨折と心不全発作
夜の面会門限までの七分の間長男駆けつけ嫁も来たりぬ
退院の朝の夢は鬼に追はれ逃げ惑ひ亡母に助けらる覚めて午前四時
双手広げ吾を背に鬼に真向かふ母三十代ポニーテール一瞬きれいと思ひき
五十二歳(ごじふに)で逝きたる母は黒き髪パーマに着物われのあくがれ

茂木斌　御守り　・埼

石松の大洞院に受けきたる勝運御守あらたかなれよ
山行のザックの中に金毘羅の金運守り死ぬまでたのむ
槻川の彼岸花咲く遊歩道カメラスケッチ爺さんとなる
もつれ飛ぶ御羽黒とんぼその影を水面に映し四匹となる
玉すだれ咲き終へしころ段菊が見返草が秋を告げ咲く
セ・リーグの覇者原ジャイアンツあつけなし四連敗に秋の望望
前を行く車のナンバー「あ・6　74」うーんわかつた車線を変へる

もとむらしげと　スクラム　・そ

顳顬(こめかみ)に張りつく芝を手で払いスクラムを組む具智元(グジウォン)映る
組みあいて軋む音するスクラムの脚の林に球を入れたり
スクラムに押し勝ち吠ゆる映像を三度流しぬそのすぐ後に
ライン際に待つ仲間の手に届けキックの球は弧を描きゆく
後へと投げたる球の航跡のいのちある如しトライまでゆく
倒されんとして繋ぎゆく楕円球五人を経てもボールは死なず
トライせし選手が言いぬその前にタックル決めた仲間が凄い

八乙女由朗　台風十九号　・柴

気象予報正確にして宮城、福島外れず来たれり阿武隈川沿いに
真夜の風雨荒れしげくして出戻りのごときを謂いつつ娘は二階占む
道の上八十糎の水なればわれら動けず籠城となる
水深が上がりトイレが逆流す人間社会の混濁世界
コンバインが刻み捨てたる稲藁が浮遊し来たりて家取り巻けり
界隈に寄れる藁屑集めつつ自然に神あり怒り鋭し
怠惰なるわれらを拇ちてくるわざか人間全部に天誅おろす

山下雅子　語呂　・習

五輪の年二〇二〇九〇歳われに語呂よき令和を迎う
戦時経て平和の続く今があり七十四年の平和尊し
大粒の栗しずむ羊羹切らむとす姑と母の和む気配に
西を指す黒き影は点となるもしや朝空舞いし二羽かも
貼紙はなべてカタカナ文字の店馴染めぬままに通り過ぎたり
まわりいる観覧車のあかり点々と夜空の闇のそこのみ動く
貴重なる資料を破棄す紛失すと議員先生悪びれもせず

横田敏子　台風19号　・福

千曲川氾濫の様に声も出ずひと日テレビの前を動けず
台風は福島に来た　避難指示の携帯鳴り止まず真夜中までも
逢瀬川、阿武隈川から溢れたる濁流は襲う床下、床上
避難して連絡取れぬ歌友あり水引きて二週間やっと無事を知る
雪の来る前にわが家に戻れるをひたに祈れり　霜月に入る
図らずもわが家(うち)は無事ニュース観たと友よりの電話おちこちより受く
台風がうそのような今朝の空むらさきしきぶの珠実うつくし

吉永惟昭　訃報　・熊

秋長けてすくと花芽を伸び立てし皇帝ダリア訃報呼ばいぬ
難民のあふれし戦後原点か五フィートの巨人緒方貞子女史
青春の憧憬消えずたおやかに現役のまま八千草薫
訃聞きいし「青青を摘む」遺歌集の扉につまるお子様の声
「吾亦紅」の友また一人欠け給う病みいます師に何と伝えし
廃校のふるさと偲ぶ君が歌逝かれておしろい花のひとしお
死者あまた季節外れの水害に眠りなき夜の虫の音細し

朝井恭子　霜月　・森

夫や子と食卓囲む夢さめて霜月の夜の闇に包まる
朝なさな供えるコーヒーの味加減亡き夫に問う「今朝はどう?」
有田にて夫ともとめし湯飲み茶碗今朝は新茶のさみどり注ぐ
亡き夫の靴おりおりに下駄箱より出して磨く心鎮めに
父母よりの身体髪膚ほころびて今日は眼科に明日は外科へ
北斎も描きたるとう手古神社高き石段見上げ礼なす
母よりの絽の夏羽織に風通す年に一度の御目見得ならん

磯田ひさ子　グラジオラス　・森

三つ編みの少女立つごとさみどりのグラジオラスの花穂の長し
グラジオラスを育てる友は球根を太らせ市場に出すと言ひたり
蕾やや色づきたればバッサバサグラジオラスを根元より剪る
剪られたるグラジオラスの葉柄に埋もるる畑みどりの畑
浄まりしグラジオラスの畑中に倒れたる友こと切れてゐし
土に生きし親を継ぎたる誇り持ち土を褥に友は逝きたり
ふるさとに友は残りたり上京のわれは会ふたび後ろめたかりき

市原志郎　車椅子　・萬

オリンピック近づきし街と思えども車椅子にて寂しく居たり
車椅子の上より眺めるこの街の発展著しきを喜ぶ
台風に関係のなき街にして今日は光があふれて居たり
被害なき街に住み居てなんとなく申しわけなき心がありぬ
子と選びしこの街なれば台風の被害小さきことを喜ぶ
おやここにきれいな花が咲いている車椅子なれば景色は低く
車椅子ほんの少しの軋む音久し振りなる街に出で来ぬ

市原やよひ　即位の礼　・萬

文明はありがたきかな美しい即位の姿テレビの前
十二単の姫君並び置き物の如動かざりき即位の礼に
人形かと見紛う姿映し出す令和の御代の即位の礼は
春の花と思いし花が休耕田翌いつくして秋の陽を浴ぶ
休耕田ばかりが並ぶ道帰るどろぼうはぎをいっぱいつけて
暮れ早き道を小走りに行く少年ゆうやけ小やけの空に入り行く
ようやくに戻りし青き秋の空水禍の街にも広がりて行け

大浪美雪　また吹くど　・森

ひと口に風と言えども今日の奴幅広に重く吹き下ろしくる
吹きつける風に足元すくわれたり　よよよと縋る橋の欄干
肩に掛くる袋ごとぐいと引張られ風に負けじとしばし踏ん張る
砂嵐浴びしと思うも潮なり顔も頭も塩臭くして
椿の森銀白に染め潮風は今日で三日目やむ気配なし
「富士山がはっきり見えるはまた吹くど」風のやみたる夕浜に聞く
ひだをなす風紋のなか小枝もて捺したるごとき足跡つづく

奥田清和　一合の酒　・大

自助共助公助はしらず年を経て歌を忘れしカナリアの宿
しみじみと思ひ出すなり教へ子とちのわのめぐりせしはとほき日
逝きゆきし友らのわざを憶ひつつしみじみと飲む一合の酒
人類の進歩といふも何あらむ心失せずや宇宙開発
かくまでに極悪非道の記事もなく父母と語りし日の甦る
ひたすらに「富士山麓にオーム鳴く」などと覚えし中学校の窓
幕末の志士行き交ひし階段を踏みしめ上るをみなの素足

奥田陽子　遠景　・羊

池にちかく座りていたり噴水の飛沫にけぶり人の過ぎゆく
知らずして出でたる地上そらあおくニコライ堂の坂登りゆく
談笑の声も聞こえん白衣の人おおく行きかう交差点みゆ
雨脚の走り土の香たつ夕べ岸辺に寄りて鴨のうごかず
台風に揉まるる樹樹の明け方を電飾あかるきトラックの過ぐ
秋の川流るる音に添いゆきてさくら紅葉の堰に着きたり
重ねきて握りてくるる手のありぬもの言わぬ手のかくあたたかく

小野雅子　思ふ　・羊

朝五時のこほろぎのこゑ弱々し命をしむか夏を惜しむか
蝉の絵のはがき使はず夏ゆきぬふた月み月といへど短し
見張られてゐると思ひながら書く電話番号　郵便局にて
留守電の声のやさしさ気づかずにゐたる人柄　午後をゆくなり
会ふたびに背丈ちひさくなりてゆく人と思ひつつほほゑみ返す
待つ人のゐて買ふ物のある暮らし電車の中でわが身を思ふ
男の手も伸びてきうりを選びゐる夕べのスーパーマーケットかな

菊地栄子　擬宝珠　・湾

明らかにひとつ落ちいる無花果のその後に続くうつつをみつむ
聞き捨てし友の言葉の蘇る〈思い出だけで生きてゆける〉と
何と無く面影みえて三日月の鋭きかたち今宵は親し
インド人も来ている朝の食卓に噛み心地よき根曲り竹は
背後から夏鶯の声がする撮影会は朝より晴れて
届くばかり数なす青き梔の実も一期一会の草傾りなり
わが庭に咲き終わりゆく擬宝珠のうす紫は戯れに見ゆ

木村文子　散水車　・羊

朝まだき散水車が来てやわらかく道の片側ぬらしてゆけり
近ぢかとまなこ覗きて我に会うつややかな玻璃馬のまなこは
あの地震の跡と知らさるる地の深く深くの層に滑りはありて
山肌のくずれの奥に木々の根の〈まだ生きている〉香り放てり
仔ガラスの暗赤色の口の中に潜むモノから目を逸らしいる
会話なく一日を過ごし夜となる　ポツリポツリと雨降りはじむ
ひとすすりずつ飲むココアのみどから秋がわきたつ髪の先まで

菊岡栄子　ストレス　・漣

神無月入りたるばかりを三十度超ゆる暑さに喘ぎあえぎて
早々と生るる台風に怯えつつ進路の予報に釘付けとなる
何するとなく夕暮れを迎えたりヘルパーさんもひと日の終わり
介護なるケア・マネージャーの意に添わぬひと日のまたも暮れてしまいぬ
入れ替わりまたもヘルパー替わりたり思うにまかせぬ身のはがゆさよ
介護さるる身に辛きストレスは次々替わるヘルパーさんや

草刈十郎　新酒　・世

敬老の日に届きたる忘れ物あらため老いをわれ諾へり
堂々そびえ立ちゐる雲の峰詩魂大きくふくらますなり
ささやかなわれの願ひの一つだに叶へてくれぬ流れ星かな
現金を使はず決済ポイントの還元不思議な消費税とは
過疎の村豊かなるものなけれども澄む水豊かに流れゐるなり
秋深し老友集ひ新酒酌む話題は次第に薬となれり
目の前に止まりし目白意外にも怖き目野生の鋭さ持てり

國井節子　藤袴　・春

田の畦に忘れがたみの藤袴わすれずに来よアサギマダラよ
旅をするアサギマダラの好む花植ゑて静かに宿り待ちをり
稲刈りを終へし田んぼの清しさや蝗の跳ねとぶ姿の見えぬ
白布を敷きたるごときそば畑荒神様のお側ちかくに
三羽共くろぐろとした濡れ羽色黄色い声を張り上げてゐる
うそ寒き夕べジージー鳴る音の空耳なりや虫の鳴く音や
ま白なる秋明菊が咲きましたあなたの居ない荒れたる庭に

小泉泰清　病院にて　・う

わが左脳血液結滞せしゆゑに春の小川のおとひびかせよ
みはるかす干潟野今や直線に梅雨明け近くこころ晴れやか
うつたうしきくもり空はれ山並にくろずむほどに日影たたふる
遠く近く走る車の窓ガラス梅雨明けちかき日をはじきをり
梅雨間なく明くる青田におだやかに風流れくる小波立たせて
自動車のフロントガラス光りをり病院の駐車場飽食状態
丘上の電力風車回りをりかすむ雲間にあらしひそむらし

河野繁子　芙蓉　・雁

他国よりミサイル撃たれ何気なく種を蒔きいるこれなる平和
キセワタの種をもらいて庭に蒔くこの充実を誰にも分けず
低空を飛行機とべば夫の方「何かあったんかのう」と二人の会話
明日咲くつぼみに紅をふくらませ芙蓉のゆるる西側の窓
葉のすべて網目となせる虫を飼いそれでも花はやさしうす紅
枝にいる蛙の食事も窓に見え書きあぐねいる言葉の一つ
かの日には松永邸に咲きいたる芙蓉の季節幾めぐりせし

小西美智子　夏から秋へ　・大

右足より脱げし小さな赤い靴置かれしままに雨降りつづく
赤白の縞のユニホームのきわだてる熱き闘い芝生がひかる
人間と人間が闘う極限の力しぼれば吹きいずる汗
胸はりて歌う国歌にマンデラの精神を継ぐ南アフリカ
いつしかに口ずさみおり教え子の作曲したる校歌あかるく
廃校となれる学舎いまはただ卒業生のみ歌う校歌を
北国は初雪と聞く宵の窓上弦の月さやかに照れる

小林能子　本牧山妙香寺　・羊

三年ぶり立寄りし寺に今月の言葉「病によりて道心はおこり候か」
山門を望めば窪める石段が「君ヶ代由緒之地」へと誘ふ
「日本吹奏楽発祥之地」の物語り　薩英そして横浜の縁
フェントンの「初代君ヶ代」偲ばるる雫色のサツマバンド記念碑
薩摩琵琶「蓬莱山」には敵ふまじ「初代君が代」コラール風は
「世界平和　国家安穏　自然破壊のなきを祈ります」とふ妙法の寺
山門までの四十五段で今日の散歩二千九百六十八歩

近藤栄昭　菜園　・福

自らが育てたるごと喜びぬ収穫を聞く車椅子の母
二度芋と玉ねぎ作るな安いから経済ありたる母の農事に
母の口伝大根の後はサツマイモ肥料なくてもよく育つから
脇芽欠きトマトは七段支柱せよ五十年前の農法伝わる
モロヘイヤ母の知らない野菜あり十坪の菜園野菜はユニバース
思い切りカボチャは蔓を伸ばしゆくワンワンはびこる木のごと根太く
締まりたるキャベツを薄く織切りに塩一振りが今日の生野菜

近藤芳仙　熱海行　・信

ゼロ番の「湯遊バス」が売りといふ乗り降り自由を足場に選ぶ
坂おほくほそき道ぬふバスにゆる岬の城もひとつの目当て
七月のジャカランダにつく残り花むらさき映えて空にむきたつ
海にうく初島ことにあをければ航跡をおふいつかゆかなむ
起雲閣の波うつガラスにうつる庭「文豪の部屋」にもたらししは何
海風はかすかにあれど灼熱の伊豆の伊東の宿までの道
亡母と娘ときたる熱海も青かりき朝の干物をよろこびてゐき

坂上直美　秋の女人　・天

出会いなく老いて独りを暮らす女人己が一生を悔い給いけり
「つまらない人生だった」と八十の半ばを過ぎし女人は言いけり
紗燭の恋の思い出あらずとも仕事や旅の楽しからずや
誰ぞ言いし秋はさびしき季節よと華やぎ満つるコスモスの原
老いゆくと言うを止めよ熟れゆくと銀の髪輝く女人
ゆっくりときらめき落つるイチョウの葉わが死のときもかくありたきを
蔵われて長き色無地譲り受け着ればはんなりわが身にも添う

坂出裕子　送り火　・洛

台風の過ぎたる空に大文字しづかに燃ゆる祈るかたちに
祈りこめ人が灯せる送り火のあかあかと夜の空に炎え立つ
こころこめ作られたりし赤松の材が明るく照らす天空
さまざまの思ひを溶かし大空に燃えゆくほのほ闇に澄みたつ
仰ぎ見る炎の中に遠き日の思ひ出やどる盆の送り火
迷はずにあの世に還りゆくべしとかかげられたる盆の送り火
憂ひもつ現し身なれど送り火を仰ぎてをればしばしやすらふ

佐久間晟　日乗（二八）　・湾

豊かなるこの年であれ雪しまく初日の光に輝く見れば
この年も清く生きんと昏いたり信ずることなき神に向かいて
この後もわれの思いを守りくれんといくたりの同志がわれを囲める
友という有り難き人らに囲まれて卒寿を過ぎしことなど忘る
思おえばよくも生きたり卒寿越えそは傍らの妻あるゆえか
この後の命など思うこともなしただ今日を生き明日も生きん
誰か一人われの寿命を知らぬかないつまで生きても飽きることなき

佐久間すゑ子　指切り　・湾

花びらは御飯、葉っぱはサラダ。ままごとが終わって寝ている指のいとしさ
曾孫との指切りをほどいて、ふと、残された命の日々を思っている
幼い頃吹いたしゃぼん玉。光のつぶとなって弾けていった
夫の焼き魚をほぐしながら残りの歳月を思っている
「私はあなたのお母さんではありません」と言いたい。魚をほぐしながら
京鹿の子の花に逢うと今年も逢いたい人がしきりに思い出される
戦争は人を殺し合うのだ。誰に言ったら止められるのだろう

佐藤道子　猛暑　・甲

切りつめし木瓜より一本枝のびて一米にも及ぶこの夏
わが庭の狭きに蝉が住みをりし抜け殻二つ薔薇に残れる
見たことも無き程海千葉が茂りがぶりがぶりと空を見上ぐる
オリンピックパラリンピックと弾む日々動けぬ夫との長きこの夏
認知症と自ら言ひて暮らす夏かけ忘れし鍋またも焦がせる
認知症の治療は知的に暮すこと忘れし短歌をまた思ひ出す
使へるもの捨てるは恥の戦中派溜りし物に溺れつつ生く

鈴木結志　東天紅　・福

東天紅一つ告ぐれば掛け合いのごとく鳴き交う里の年明け
明星のまたたくひかりすがやかにお身ぬぐいさるる思いに仰ぐ
文学が好きと言いいし君なりき思い顕たせる初春の海
「日供詞（にくし）」を称え吉事をみちびくか花あふれ咲く鉢梅の花
美詞つくす祝詞に重ぬる万葉のうたより思う言霊信仰
もてなしの礼法三献（さんこん）の酒酌みてこころ豊かに初春を寿ぐ
皿の絵の料理を透かす調理師の相乗効果の刺身味わう

関根榮子　火の見櫓　・埼

終りゆくものを賞美しそのかみは「残菊の宴」の行事のありし
何かひとつ良きことあれと眺めいる左の薬指（くすし）に白星現る
夕焼けを眺めるのみに高速道の陸橋へ散歩の足をのばして
庭すみに今年の異変のまた一つ九月に入りて椿の咲き出す
日の暮れの釣瓶落としにつられゆき夫の晩酌早くなりたる
高々と咲くを待ちしが台風に皇帝ダリアもあえなく倒る
三叉路に火の見櫓のありしこと通れば思う見上げしはいつ

関根和美　中庭　・埼

北西の風ふせぎ来し樹々やがて伐られ道幅広げられゆく
物蔭に棲むものあらば消え果てん樹々に守られありし中庭
幹ふとく齢重ぬる樹々のため札を述べつつ御札はるべし
亡き義父の気配ただよう掘りごたつ田畑やハウス農機具のかげ
先祖代々誰よりも長命なる義父のさびしがらせず夢にも訪わず
幾たびも夢にたつ姑まだ若く無念の横顔笑むことのなく
よき年を迎えん願い大空にしあわせそうな白雲うかぶ

高尾恭子　彼岸を過ぎて　・大

たこ焼きを買（こ）うて帰ろか寄り道のふたりをてらす後の名月
奥津城の跫音たえて曼珠沙華ひとむれ赤し彼岸を過ぎて
思い草ひそと咲きおり明日香路を風にまかせて犬養節は
日曜はパスタ茹でたし雑草のようなバジルをたっぷり摘んで
ご破算にできぬ昨日をひきずって欅並木の錦にそまる
ほどほどの距離をとりつつ母と居る消費期限に目を光らせて
「初ものの松茸蕎麦にいたしましょう」ははそはの母は九十五歳

椎名恒治　煙突　・橋

西の空雲なき夕べ高々と煙はあがる直立のまま
林立の高層マンション夕早く終夜燈の連なり点る
高々と焼却炉の煙突二つ並び立つ東大和市上水町に
朝に夕に雪の富士を眺めつつ春よ来い桜よ早く咲け
伝統ある明法高校に今年より女子部創立校門明るし
青々と人口芝生の校庭に晴るれば朝より若き声あぐ

高津砂千子　弥山　・風

七十歳を四つ越えたる誕生日秋晴れのもと弥山に登る
ひとり旅馴れしと思うも山なれば一歩一歩と心引きしめ
大小の奇岩怪石くぐりゆき展望台まで油断はできぬ
山くだり尻もちつきしを支えくるるフランス人あり強き力ぞ
助けられ礼を言いなば別るると思いしはずが腕組みくるる
フランス人夫婦に頼りて無事下山別れにもらいしハンカチ美しき
わが脳アルファベットの飛び交いて礼状書くはなかなか難し

滝田靖子　喪失　・新

死の傍に暮らす毎日このへんで死んでもいいと思ふ朝あり
目を開けてゐるのか閉ぢてゐるのかもわからぬ闇の中に眠らむ
この闇は永遠の闇になるのかもしれない命の傷みてをれば
内省に自らを傷付ける日日の灯あなたが生きてゐること
台風の名残りの風の過ぎ行きて倒れしコスモス起き上がりくる
倒れてもコスモスはまた起き上がる命を諦めたりはしないで
踏まれゆく落ち葉を育みきし木木にかくも露はな喪失のあり

竹下妙子　災害　・霧

相次いで豪雨災害と肉親を火を吐く想ひの慟哭聞こゆ
人々の拠ならむ首里城の荘厳な朱も一瞬に燃ゆ
しづかなる秋の陽ありて佇めば秋の落葉の地に燃えわたる
川底に朽ちたる木の葉とどきゐて紛れもあらぬ秋ぞさびしき
ひとひらの枯葉に射しし夕茜たちまち闇の色に染まりぬ
われと吾が虚実のあはひ透かし視る切子グラスの澄みたる深み
惑ひつつ生まれし一首書き誌す己にあてし恋文ならむ

田土成彦　改元　・宙

令和改元五月にあれば天皇の誕生祝日今年はあらず
腰痛の出さうで出ない生半可三日ばかりをやり過ごしゐる
朝は三つ夕べは五つ惜しみ食む瀬戸ジャイアンツの終のひとつぶ
青空を引つ掻いてみればポタポタと血が流れ出る　事はなけれど
血圧計キリンの首に巻き付けて測る血圧の数値三百
キリンより更に血圧高からむブロントザウルスの老後やいかに
年老いたチラノが獲物に噛みついて欠けてしまつた奥歯かこれは

田土才恵　日の暮れ　・宙

日の暮れのいまだ遅きをよしとして練習に励むコンサートまで
ソプラノにはあらぬ響きの低音にこころ惹かれるたまゆらもある
じんじんと底より響くバスの声レッスンの間を潤してゆく
薄暗きホールにレッスン重ねつつ混声合唱メサイアは成る
こもごもにうたい重ねるハーモニーひとつとなれる喜びもあれ
練習の時間たちまち三時間すぎて家路を急げる夜道
繰り返し聴くCDに懲りもせず歌のレッスン朝より始む

玉井綾子　後悔　・羊

ベクトルが帰路に向かわず回り道　あの時なぜああ言えなかったか
鍋の中ぐるぐるかき混ぜ出来る渦　逆回転して秒針戻す
歯を磨く動きが一寸われよりも遅い鏡のインフルエンザ
インフルの熱でも抽出されぬ澱　あの時それを言えなかった悔い
上首尾に上書きされし妄想を事実の記憶につっぱねられる
知らぬ人にババァと罵られる朝に生まれし毒素はふくらむ黒子
公園に母は両手で子を叩く　包むがごとく潰すがごとく

虎谷信子　よき日　・伴

天皇様　古式ゆかしき御姿で、高御座にて　宣り給ふなり
皇后様　大垂髪（おすべらかし）に十二単を、貴なるお姿　しづしづ歩まる
「雅子さま　元気になられよかつたね」つつしみつつの会話弾める
秋雨のはたと止みしか　遥かなる虹かかるとぞ　この日この時
七彩の虹の幸ひ言祝がむ。「令和」ふたたびの新年迎ふ
高御座　つねは京都の御所にとや。　杳きしきたり　思ほゆるかな
永らへし齢を祝がむ　この佳き日。　めぐり逢ひたる　喜び験す

中島央子　九月　・森

一杯（つき）のワインの酸味しみわたる九十歳（きうじふ）むかへし長月八日
会席膳美しきゆふべの椿山荘はじける笑顔の孫子六人
いたはるる齢になりてすれちがふ人の風圧意識してゐる
中庸を込めしと聴きしわが名前小説のやうな恋のあらざり
カフェラテを前にひととき充たさるる歌を語れる友の在りたり
明日などはさらさら思はず水あそびクロール・バック週一泳ぐ
「幸せに死ねる」と言ひし手相見のしきり思へり　年あらたまる

中島義雄　首里城炎上　・岡

鳳仙花赤く散りゐる街上に首里城炎上のニュース轟く
炎揚ぐる首里城の天灼け尽きてうなだれし胸に思ひ出深し
首里城は眼底を焼き燃え落ちてポインセチアは街に売らるる
喪中欠礼早や届きくる霜月のまさかの友の一枚交じる
机の上の団栗に朝の日が乱れ思惟に遠ぞく今日が始まる
鶏頭はその一心を立て並べ寂しきものをわが記憶とす
たまさかの香りのごとく乙女らの振り袖五人街上を行く

永塚節子　ブランコ　・銀

花の名をうめばちそうと言いたれば塗師満面に笑みを浮かべる
黒漆の器にひと茎うめばちそう能登の丘より運び来しと言う
頂上へ向かうリフトの足元にうめばちそうの群れて咲きいし
赤青黄次に緑のブランコが校庭の隅雨に濡れおり
ストックはあれどまたも求めたり不思議なるものまっ赤なりんご
次次と新しき品種作り出され紅玉の赤今は少なし
思わずも手に取るりんごメルヘンに歌謡曲にも主役でありし

久我田鶴子　張り子の猫　・羊

雨音と湿り呼びこむ板の間のちやうどいい暗さ　歌を語りぬ
踏みこんでふはりと包みひきいだす言の葉越しにこころが覗く
触れ得ざる〈ほんたう〉のめぐりもどかしく紡ぐことばは優しさめける
入口の張り子の猫のたたずまひ曖昧にして確かといふも
じやうずにはならぬをこころにかけをらむ張り子の猫のこの傾ぎかた
蓮の葉に盛られしおはぎ取り分けてきなことあんこにさざめく会話
蜻蛉――蓮のつぼみに動かざるここがいちばんと決めたるごとく

香川進の生きものの歌　15　田土　成彦

・獣しつつ逃がしやりたるのちにしてわが掌がつつむ遠山のおと

『木曽川』より

この歌には直接「つぐみ」は出てこないが章名にそれが記されている。全体歌数も多くツグミに対する思い入れも強い。秋にシベリアから群を成して飛来するこの鳥の捕獲にかすみ網が使用されていた。現在では網の使用もツグミの捕獲も禁止されているが、当時は一般にかなり使われていたのだろう。網にかかった鳥を極度に痛めつけるので、この歌のように、逃がすことができるのは捕獲間もない羽をばたつかせている状態の鳥だったのだろう。絡んだ網を丁寧に外し両手に包んだツグミを空に向けて放りあげた後には鳥の体温がまだ掌に残っていたに違いない。鳥は遥かに見える山の彼方に飛び去った。山の音は聞こえるものではないが皮膚感覚に掌に包むことはできる。

多くの命を日々殺めて私たちの暮らしは成り立っている。そんな中でたった一つの命を助けたとしてもそれが何なのだという思いもある。しかし、「放生」という功徳を積むために生き物を逃がしてやる行為がある。海外の仏教国でもそうした行為を補助するため観光地などで放生用の魚や鳥が売られているという。香川進の施した放生が、この歌をなさしめたのであれば我々はこの歌を鑑賞できる功徳に浴したことになる。

地中海　香川　進

ギリシャローマの遺跡めぐりし多かれど地中海たづねし人少なかりかの海の潮騒かこれ紙のうへに落としひろぐる砂と石のおと
地中海の塩分か遠しかの磯の小石のひとつを口にふくめば
群れ飛べるなかの一羽が離れゆきつばさの下に島を置きたり
黄に映えて夕べはしぼむ萱草がしげれる丘よ湾をいだける
紋白蝶ひとつ見えしを記憶して地中海の空を見つつ去りたり
単純なることなりしかな地中海の浜なる蛤見ておどろきぬ
しづかなるホテルの庭の二羽の鳥首さしかはし昼を眠れる
法王の生くる島にし打ちあげられ皆死にゆきて腹しろき魚
ソクラテスが死刑となりしそのきはに見たりし海かこれの紺青
山よりも静かにひろきこの海が見てこしものを歴史と言へり

（「地中海」平成九年八月号より）

馬鈴薯の花咲くころか内海の果てにしひろがる耕地のみどり
しづかなる入海ここまで伸びきたり家並を写せば家畜もうつれり
はるかにし見えわかねどもガリレオの生まれし島は波の上なり
地中海の果ては知らざりぼんやりと岬につづくともしびが見ゆ
「地中海」の誌名を定め一学徒に還りし彼は間なくし逝きぬ

（「短歌往来」平成九年九月号より）

今月の二人

商いの景色

石田　安子

シャシャッシャ、シャシャッシャ　回れよ回れ焙煎機四十五年の深き味わい
ここぞとて釜より飛び出す珈琲(コーヒー)豆の色・艶・香りに鋭き目を放つ
「おいでやす」言いつつ吾も聞いている春を呼ぶかの四温の店に
店先の媼のふたりつまし気に「そうどすなあ…」の凪の語らい
迎え花の薔薇を見つめて客人は刺なきバラは虚しきと言う
外つ国の若きメンズの飲む仕草カフェと思いて訪いくるるも
耳遠き吾を気づかい青年のトラジャ二百瓦(にひゃく)と手より聴こゆる
バリ島の「神山(しんざん)」とう名の大き豆神がみを畏れふふみ味わう
ひと時を古き机に安らいて『瀬音』の御歌の余韻にひたる
打ち萎れ咽びつつも日々商いに癒され救われ今の吾ある
癌という病になるも守られて穏しく円く夫は励みぬ
老いゆける互いを思い思いやり絆とう文字心になぞる
哀しみも修羅も遥けし五十五年空気のごとく夫と吾のいる

賜わりし縁に

私に賜わりました短歌との縁は、六年程前。嵯峨広沢の池の平安郷のお茶会にて、生まれて初めて詠んだ短歌「清涼の魂のふる里佇めば竹と紅葉の双奏の妙」が入選し、びっくりした事から始まります。

選者の白子れい先生との御縁が許され、右も左も分からない私に短歌の基を教えて下さり、そして弥生会に入会させて頂き、と同時に何も分からないままおこがましくも地中海のお仲間に加えて頂くという御縁を賜わりました。五年になります。

今では、商いの合間、あい間に短歌を詠むことが至福の一刻であり、癒しとなっております。柔らかな、豊かな心を培い、もっともっと素適な短歌を詠めますよう、精進して参りたく思います。

今回のご依頼に「私なんかが、どうしよう!!」とパニックになりましたが、白子先生の「頂いたチャンスに、伸びて行きなさい」とのお言葉に心を決め、精いっぱい取り組ませて頂きました。拙い短歌ですが、どうかお笑い下さいませ。

耳も遠く商いで休みがちな私を、先生と皆さんがフォローして下さるお蔭で、学ばせて頂けております事、感謝で一杯です。

今月の二人

台風十九号

大久保麗子

超大型の台風来ると気象庁七日前より発表のあり
家裏の碓氷川の荒れに持病薬・身の廻り物詰めて休らふ
夜明け前雨風高きにひねもすを雨戸を閉ぢて籠もる家なか
ゴーゴーと波立ち跳(をど)る対岸の水位たしかむ二階にあがりて
黒黒と怒りのごとく昴りし疾風(はやち)のあとの碓氷の流れ
暁闇を雨風荒るるに裏の川碓氷の対岸の流れ伺ふ
裏の川中洲の柳並みゐしに濁流のなかになべて消え行く
雨戸叩く雨、風の音荒荒し心経唱ふ眠れぬままに
日すがらの野分すぎ去り芽の出でし葱の若根は白く浮きをり
台風に倒されしまま吾畑の隠元の花二つ三つ咲く
鴨どちはいづこに潜みゐしならむ水引く川辺に五羽の寄り添ふ
八つ頭の太茎あかあか夕つ日に揃ひ照りをり嵐の去りて
杲杲と照る満月の眩しかり大台風の去りし翌晩

遭遇

裏に碓氷川、表は旧中仙道の処に五十三年間住んでいる。家隣には三畝ほどの畑があり、自家消費ほどの野菜を作っている。裏の川は大台風の時に度度水害に遭遇している。旧中仙道の端に並んでいた桜並木は昭和十年の水害ですべて流されてしまった。

今回の台風十九号の接近で気象庁は早くから強く強く警報を知らせていた。十二日の朝より雨風が強く降り、避難場所は息子の家、地域の公民館と聞いていたが、この強い雨風のなか、川を何本も渡って行くには車で行くしかない。が、家の外へ出る方が強い雨風に足がすくんだ。二階に上がり裏の川の向こう岸の水位を目をこらし幾度も幾度も見に行った。そして台風は「どこ」と情報を探り、夕方六時頃日が暮れ、雨が少し弱まったか？　何事もなく過ぎるのを祈るばかりでした。そこへ横川のダムの放流の知らせです。まんじりともせず一夜を過ごした。翌朝川辺に近隣の人が集まり、ひとまず胸をなでおろしました。

今回は無事に済んで良かったが、もっと雨が続いたらと思い、避難は「もっと早く十二日の午前中に」が良かったと反省です。

◆今月の二人・石田安子品評◆

言いつつ吾も聞いている

京都市右京区にお住まいの石田さん。「商いの景色」の商いとは、珈琲のお店のようだ。

・シャシャッシャ、シャシャッシャ　回れよ回れ焙煎機四十五年の深き味わい

「観覧車回れよ回れ」と詠ったのは栗木京子だが、石田さんの「回れよ回れ」は焙煎機。四十五年という商いの歳月が「深き味わい」を醸し出しているのでもあろう。

・「おいでやす」言いつつ吾も聞いている春を呼ぶかの四温の店に

「三寒四温」は俳句では冬の季語。春も間近と感じられる温かな日の店で言う「おいでやす」。言いながら自分でも聞いているという、その春を呼ぶかのような響きを。そんなふうに普段使っている言葉を感じられた、この日の石田さん。こちらまで温かい気持ちになる。

・耳遠き吾を気づかい青年のトラジャ二百瓦と手より聴こゆる

「手より聴こゆる」はちょっと分かりにくいが、この表現がこの歌のポイントだろう。青年は「トラジャ二百グラム」ということを手を使って、つまりは指差したり、指を立てたりして伝えてくれたのかもしれない。それを耳の遠い自分への「気づかい」と受け止めているところにも作者の人柄が滲む。

・哀しみも修羅も遥けし五十五年空気のごとく夫と吾のいる

五十五年（焙煎機との付き合いより十年古い！）、夫との長い歳月は、互いに自然体でいられるような関係に落ち着いている。二句、三句で切り、ゆったりした下の句にしたのも効果的。

◆今月の二人・大久保麗子作品評◆

隠元の花二つ三つ咲く

評者・久我田鶴子

群馬県安中市の旧中山道沿いにお住まいの大久保さん。台風十九号に襲われた際には、不安な一夜を過ごされたようだ。

・ゴーゴーと波立ち跳る対岸の水位たしかむ二階にあがりて

家の裏を流れる碓氷川の増水。ゴーゴーという音にも、波立つ様子にも、恐怖は増すばかりだったことだろう。じっとしていられない思いが、下の句によく表れている。

・黒黒と怒りのごとく昂ぶりし疾風のあとの碓氷の流れ

「黒黒」「怒り」「昂ぶり」「疾風」と、なんとか切羽詰まった状態を伝えようとしている。その気持ちは解らないではない。だが、一首に立ち返って、「黒黒と」はどこにかかるのか、上の句すべてが「疾風」にかかるのか。思いに言葉の方が追いつかない感じ、まさにそんな気持ちだったのだろう。

・台風に倒されしまま吾畑の隠元の花二つ三つ咲く

こちらは、台風が去った後の畑の様子。台風の猛威に圧倒されつつも、落ち着きが戻っている。倒れたままでも、隠元の花は咲いている、と。「二つ三つ」という数詞も活きている。

・鴨どちはいづこに潜みゐしならむ水引く川辺に五羽の寄り添ふ

ここにもホッとした思いがある。台風の最中にはどこに身を潜めていたのだろうと、鴨たちを思いやる余裕も出てきている。「鴨どち」には親しみが。ここでの「五羽」も活きている。

・八つ頭の太茎あかあか夕つ日に揃ひ照りをり嵐の去りて

嵐の後の八つ頭の茎に夕日が当たり、あかあかと照っている。その命の色と輝きに災害を越えて感動している作者がいる。

私と短歌との出会い 209

八橋千代子

風に木の葉が舞う少し肌寒い日の昭和五十三年十一月川崎市産業文化会館で行れたセミナーの黒板に「紫の匂たつまでうすき刃を研ぎつつゐたり風とほき日よ」と書かれた前に、凛として美しい久方壽滿子先生が立っておられた。短歌に於ける日本語、女言葉の美しさに魅了されわたしは瞬時に囚われてしまった。ちょうど勤めていた役所をやめ、夫もアメリカ銀行を退職し二人して脱サラをし立ち上げたホテル事業を軌道に乗せ、二人の息子も十六歳と十三歳を私学にあげ少し時間のゆとりが出来た頃だったので翌五十四年に海炎グループに入れていただき、はじめての「地中海」の集会に出席をした。ホテルの会場は華やかな雰囲気の中に大勢の歌人が集い談笑の輪の中に地中海創刊者の香川進先生がおられ、久方壽滿子先生に連れられご挨拶をした。その時にわたしの首からぶらさげている手作りの小さなポシェットに目を留められ「その袋の中に何が入っているの」と尋ねられた。わたしは「笑い袋」いや、「堪忍袋」と言おうと思っていた矢先あろう事か咄嗟に、「短歌の袋」と答えた。すると、「ほう短歌の袋ねえ」とやさしい眼をされた。恐れを知らぬとはこの事かと、言ってしまって調子づいた自分のドジさが悔まれ帰りの電車の窓に映って揺れている袋が恨めしかった。しばらくして五十四年、悲劇は突然に訪れた。十六歳の息子が此の世を去った。新しいお墓を建て、夫の勧めもあり墓石に短歌を刻んだ。

・目をつむればかすか潮騒の聞こえくる墓誌のはじめに子の名刻めり

わたしは何かにすがる思いで確かな成果を求め、より仕事に邁進した。そうだ「心に太陽を唇に歌を」だ。人生はいろいろあるが捨てたものではない。

平成十八年十二月三日

・とりたてて何もなき人生(ひとよ)澄み渡る褒章の日に二人並びぬ　千代子

夫が紺綬褒章を受章し、プログラムを作成する折に、短歌を飾る事が出来た。

シェラトンホテル&タワーズの日輪の間で大勢の人の祝福を受けた。

折にふれわたしを燃焼させる短歌の指針があった。胸から下げている小さな袋（ポシェット）にはわたしの伴侶として零れる言葉を拾い集めて入れましょう。

日本文学の伝統にたち短歌の定型の中にこまやかな人情、風土の繊細さを表現できたらいいなと思う。残り少ないわたしの余生をこれからも歌友はより豊かに温かく支えてくださる事でしょう。

思えば今までのわたしの人生、第二次世界大戦の終結を迎える戦中戦後、集団学童疎開からはじまり、千年に一度と言われる平成二十三年三月の東日本大震災、原発事故、激動の時代を生きて来た。

十月に入り、プールの水が心地よく感じられる。みなとみらいの高層のプールに毎日千メートル泳いだ後は、赫赫と燃焼して彼方に消えてゆく落暉をじっと見ている。晴れていれば、大山連峰を従えて富士山はコバルトブルーからやがて残像となり消えてゆく。今し陽は彼方へ沈む。香川進先生、久方壽滿子先生、親交のあった歌友、そして息子も夫も、みんなどこへ行った。しかし、陽は明日も昇りそして、日没をむかえる。

作品A

（ハ行～）

萩原嘉津子　姉と兄　・宙

青々と繁る柿の葉静かなり小鳥隠して知らんふりする
柿の実を数えてにっこりするわれを見下ろしカラスが笑うように鳴く
一本の管で繋がれ横たわるすくっと立てば天を衝く兄
呼び掛くれど微動だにせぬ兄のあり何処さ迷いいずこで遊ぶ
姉もまた息子の元で暮すのと思い惑いて東京へ行く
頑張って私は此処で生きて行く姉に手を振り笑って言えり
真夜中に冷蔵庫がしゃべり出す整理整頓お願いしますと

白子友侑子　十月の空　・洛

さし芽より育つドラセナ姿良く新芽の色は西瓜の赤み
丈高く秋明菊の並び咲き嵐のあとの姿気高き
ぬげそうなピンクのソックス三つきの子笑みを浮かべて福頬ちいる
ほんのりと紅さす山茶花二つ三つ生け垣伝う琴の調べの
十月の空広々とあお青と色濃き衣服の似合わぬ様な
厚き背にうこんのリュックはちんまりと母に代わりて息子と町へ行く
たぷたぷと湖の水音風の音ミシガン船に心預けて

長谷川瞳　立冬　・森

リゾート地の季節外れを歩きたり悄々として風渡るのみ
立冬の頬に冷たき朝の風背筋をぴんと伸ばして歩く
白秋忌すぎて立冬八一忌の近づきたれば吾が誕生日
露天湯に空を仰げば近ぢかと金砂銀砂の山の星々
十二月サンタの衣裳着せられて浜松町ホームのせうべん小僧
シクラメンひと鉢買ひて胸に抱き暮の巷を帰り来にけり
ひと鉢の日々を咲き継ぐシクラメン冬の窓辺を豊かに飾る

浜脇景子　鮮やかな　・夢

鮮やかなネイルアートの細き指スマホ操作の説明をする
ためらわずスマホの上をすべる指ネイルアートにくぎづけになる
雨あがり気温の下がる寒き部屋わが猫くるむ膝掛け探す
家事を終え安らぐ時の虫の音を部屋の灯りを消して聞きおり
朝夕の気温ようやく下がりたり窓より入りくる軽い秋風
色の褪せ布の傷みに破れたる母の手作り携帯ケース
少しずつ母の縫い目を追いながら縫い目をほどく携帯ケース

林　清江　リハビリ　・朱

秋たちぬ夏の名残りの蔓花色を深めて路地裏に這う
彼岸過ぎも夏日続けば枝伸ばすブーゲンビリアの朱鮮やかに
夏花火リハビリ棟の屋上に集いし人らの車椅子押す
六ヵ月のリハビリ終えれば在宅か施設入所か決断せまる
この夏は心沈みし日々多くようやく仰ぐ秋晴れの空
介護5の妻を残して逝く人の息子か語る無念の最期を
金木犀台風一過の公園に花散りばめて秋の長けゆけり

日吉　睦子　白鷺　・伊

台風の去りし草むら毬栗を拾う夕暮茜に染まる
美しく老いてゆきたい現実を皺見逃さず鏡は笑う
うなだれたススキを揺らす鋭き風に心乱れる憂き事ある日
満月の澄みわたる空どこからか笛の聞こえて祭り近づく
時を知り明日は咲くよと告げるごと雨に首ふる曼珠沙華笑む
墓原をピンクに染めて酔芙蓉雨に艶めく彼岸となる日
頭上には白鷺の舞う優雅さに見とれつついるコバルトの空

深山　嘉代子　乙女椿　・昴

台風のすぎしのちなる風のゆくえ風船かずらのゆれにゆれたり
椿の木ははの植えたるその頃とさほど変わらぬ高さ　五十年
仮植えの鉢に耐えたる乙女椿もう一度地に帰さんこの冬
妹に送る宅配コンビニに届けて帰る半月おぼろ
上弦の月みておもう妹の骨折手術リハビリいかに
連結をはずされ列車のバックするその奇妙なるゆれの感覚
秋晴れの北アルプスを中央に望めば白き乗鞍の稜

福岡　和子　令和　・洛

老いし身に暑き日射しのままならずされど巡りて名月煌煌
台風の被災地同じ月照るも停電続く暗き夜過ごさる
粛粛と令和の御代の開かれて万歳三唱平安祈る
野の草も即位宣言寿ぎて赤のまんまの径ににこにこ
この林檎台風被災か傷もてり育てし人の悲しみおもふ
天災は忘れた頃に　さにあらず同じ道くる台風豪雨
再々の水禍を受けし被災地に今日も大雨テレビの画面

福光　敬子　インドより　・伴

千八百の異なる言語もつ国より　我を訪なふ　長き名の人
インドでは　異なる、知らぬ、わからぬより　受け容るるこそ尊まれたり
お隣りはミャンマーといふマニプールびと　悲しき名インパールは州都なり
玄奘の苦難を語る「聖教序」　をりをり触れども　天竺知らず
インディアを英語の国と思ひこみ　何知らぬまま書を伝へむとせり
西洋人に束ねられしも　マハーラージャは　言葉と文字を守り伝へぬ
学食の　はうれん草やにくじやがに　ガラムマサラをふりかけて召す

ふじとよひこ　災害　・そ

濁流に浮かぶごとくに家々の屋根のみ見えてテレビ映しぬ
水迫り「世話になったね」と妻に言い沈みしという八十六歳
「上善は水の如し」の故事あれど荒れ狂う水人々危む
かかるときワールドカップ始まりて外つ国の選手黙祷ささぐ
「天災は忘れた頃にやってくる」寺田寅彦の警告思う
「まずまずの被害でよかった」などという人の感覚尋常にあらず
雨男台風三つ連れてきた自慢の話世人拒みぬ

藤井満江　青色　・昴

青空に大きくひびく鳥の声ききつつ歩く昼の公園
立ち止まり空を仰ぎぬ青一色飲まれそうなり身体がゆるる
大空はどこまでも青ふいにして入りくる白き二条の航跡
頂きに雪を被らぬ富士を見き輝きやまぬ真青なる富士
思い出せば涙は袋に溜まりゆく柔らかくぬくし涙袋は
夜を通し我のマフラー編みくるるこの娘にいまは報いるものなし
失いしものの何かを知らずして今朝も二人分コーヒー豆挽く

藤川淳子　秋の虫それぞれ　・習

八月にこの時とばかり鳴く蝉をうるさきものとゆめ思うまじ
集く音の幽けき今宵はこおろぎか湯に浸りつつありがたく聞く
人ごみの中縺れ舞う揚羽にも我を忘れる時のあるらし
台風をのがれし庭の青虫とふと目のあうは気のせいならん
一日も早く蛹になりなされ秋の日差しに惑わされぬよう
にらみ合う青虫とバッタに出っ会す思わず忘るる息をすること
吹きすさびゲリラと呼べる雨と風令和の夏は苦しく果てぬ

藤澤元子　台風　・鳩

幼き日泳ぎし川は氾濫し母生れし家も水漬く台風
わが裡の母なる川は豹変し濁流となり鉄橋落とす
決壊し一面茶色の景と化す新聞写真にルーペとり出す
ああ友よよはひ八十寒きなか泥土にまみれ片付けせむか
秋天は雲ひとつなし亡き友に会ひたき思ひしきりに湧けり
秋の夜半ゆで栗食めば縄文の栗林(りつりん)わたる風の音する
目の合ひて立ち上がりたるアラヒ熊母子六匹手を合はせたり

藤野喜美子　狩衣　・湾

柿の実の熟れを先取り啄みてまぶしき朝光に飛び立つ椋鳥
倒れたる一樹は水面に秋雨の昏き水面を広げつづける
岸の辺の樹骸は池に沈みゆき甦りくる四季の彩り
水に地に自然のままに還りゆく巡るいのちの力を思う
笙の音と共に入り来る狩衣姿、幻なるや現の夕べ
「ただ今」の声をかけつつ暗き部屋に点す明かりに亡き夫の影
朝あさに事なきを祈り夕べには無事のひと日に安らぎの礼

筆谷幸子　ゆきあいの空　・習

次々と洪水による禍に惑う命の水を少しずつ飲み
台風の近づく箱根のすすきの群れ自在に靡く術知るごとく
生垣の銀木犀のやさしき香行きつ戻りつ身の裡に受く
パンの醗酵待つように我が思い君に届けと願いし日々よ
オリーブの香るアレッポの石鹸を泡立て想う戦下のシリア
強弱を綯い交ぜ長き指おどる「月光」の調べ身の内揺らす
暑き夏きずあと残し過ぎゆきぬうろこ雲多きゆきあいの空

本元由美子　誕生日　・岡

嫁よりの誕生日祝ふマカロンを咽みしめながら七十四歳となる
朝六時スマホの音に目覚めれば東京の孫の「ハッピーバースデイ」
これよりの静かな暮らし願ひつつ薔薇の芽を挿す誕生日の午後
膵臓癌と告げくる友の明るけれど聞きゐる吾が動顚をする
擬態捨て素のままの吾で居むものと瞬時思へど忽ち忘る
首里城が紅蓮の炎に焼け落つるあるまじきなりあの首里城が
山なべて紅葉とならむ故郷を鵠の声する窓辺に憶ふ

本多キミ子　台風　・沖

台風の必然なれば術もなく過ぎゆくを待ち息を詰めゐる
大気ふるへ電線しなる台風の厨に立ちて炊ぐは私
戸締りに見回る窓に掌を当てて嵐迎ふる覚悟は良きか
自家製の玉ねぎ苗をすんすんと白根真直にこの星に植う
活動は並べて遊びかグラウンドゴルフクラブを振り抜きながら
三種計十四回を注せといふ生活リズムの狂ふ目薬
視力検査に「Cが丸に見えます」言ひつつ瞬く眼のあはれ

本田良一　枕詞　・熊

さねさしの朝の散歩の清しさよ今日一日は是好日か
天離る日韓絆恨日で歴史の悪夢文呼び起し
はだれ散るブーゲンビリア大自然深紅鮮やか夏の恋色
たまきわる生命愛しい幼子のノートに記した言葉が消えず
あきつかみ枕詞は神出ずる願かけ詠み秋の山神
あきつかみあまたの神が秋の日に出まし下りて祭大和路
あきつかみ山陰上に中秋の満月添えて東雲散歩

牧野君代　橋　・習

築地への路は混み合い知らぬ間にバスは開かぬ橋を渡れり
夕焼けを背にくろぐろと空に開く勝閧橋の勇姿を偲ぶ
網に焼く魚の匂いなつかしく雨の築地に食べ歩きせり
渡らざりし橋を思えり故郷の祖谷に煙りしあのかずらばし
いくたびの帰省を応援してくれし瀬戸大橋の青き島影
鉄橋を渡れば車窓に見え初むる夫と走りし江戸川辺り
地下駅を出ずればすでに日の暮れて家路を急ぐわが影長し

増田美千子　カタログ　・夢

待ちかねし宅急便なりはて軽し夫の友よりカタログの鎌
農作業・草刈作業に最適と刃に赤袋長き柄に黒
おろかさも極みなるかな失いしことさえ忘る時計出てくる
名月に虫の楽団惜しむなく地より賛美を送り続くる
念願の春日大社を訪れぬ太古の森に憩い抱かる
はじめての奈良に一日遊びたりコスモス寺にいにしえの息
ススキ・シダアザミの花の鴛陵若草山に風吹きわたる

町田龍子　亡夫　・湾

来し方の五十年をば如何にせんどんどの炎に託しましょうか
しみじみと「ふろふき大根食べたいなぁ」と耳朶を離れぬ亡夫の一言
わびしもよ日々の続くは詮方なし今より更に何を望むや
食細る夫にしあれば車椅子押して行きしは老舗の魚屋
日日の喜怒哀楽を掬いつつ一首を詠まんにも望むべくもなし
土用には鰻と決めていし亡夫よ黄泉の国にても食べしか鰻
老ゆるとは何、知らぬ間に傘寿とうに何を望むや独りの日々に

松井春枝　流れる月日　・伴

甲高い鳥の知らせを聞きつけた数羽の鳥が答えて鳴いた
新年は未来を示したカレンダー現実になった最後の一枚
骨折で不自由だった期間から解き放されて戻った日常
過ぎ去った月日の出来事昨日か一昨年か不確かな記憶
日中は汗ばむ日々を過ごす内桜の木の葉は色付き始めた
飼主にワンとも云わぬ犬なれど我と犬とは以心伝心
懐かしい香りを放つ木犀の季節が去って晩秋がくる

松井みね　馬込の宿　・伴

しみじみと　硝子窓より雨滲む、霜夜の眠り覚めて旅宿
人ごとのあわただしさよ。燈の消えぬコンビニの店棚温みを覚ゆ
コンビニの燈もくもる雨　ひややかに。直なる雨は舗道に沈む
燈の下をゆるぎ歩ける犬のよさ。歩道濡ればむコンビニの前
人の波途絶ゆることのない品川駅。人と別れ来て寒き雨降る
品川のとよみの中に現実なる。別れし人は、雨中に紛る
右左揺蕩ふ心慎まる。車窓にて見る初雪の富士山

松本多摩子　捜索　・桜

幼児は森の何処にと捜索を広げて十日まだ見つからず
出身の国は違えどワンチーム君が代誰もが高らかに歌う
海外を共に旅せし幼友癌の告知がラインに届く
米寿なる義姉を訪ねて安堵するやさしき娘が寄り添いて住む
沿線は実りの季節迎えしに被災地すべてのみこまれしと
両親の熱き愛情中一の孫に届きて成績あがる
子らに会う二週つづきの遠出なりこの幸せがいつまでもあれ

真庭郁子　秋茄子　・朱

絵手紙の秋茄子紫紺に染め終へて母の茄子漬遠き記憶の
朝刊におせちの広告きらびやかまだまだ九月　いやもう九月
夏萩の陰なる小さき巣守るらし足長蜂の世界を眺む
存在の見えねど我を拘束す時といふもの今日もあたふた
夏雲の果てを見てをりみんなみの台風状況聞き流しつつ
「令和」明けて水害、火災と続きたり穏しき日々は祈るのみとぞ
台風に中止となりし夏祭り来る年には「五輪」で中止

丸尾悦子　鞆の浦　・岡

しっとりと小雨に昏るる鞆の浦建ち並む蔵の扉はみな鎖す
花提灯の明かりほんのり居酒屋は祭りに酔ひし男を吸ひ込む
鞆の浦の祭りに来たり居酒屋の媼の旨きおばんざい食ぶ
眠き目にカーテン開けばフロックス清やかに咲き眼覚めを誘ふ
君に給びし花の模様のパラソルを忘れ来し山ただ花ばかり
歳を問へば二十八ですと澄まし顔認知症の媼をふと羨しめり
矢車草今日買ひ来れば八重咲きなり好みを言へば一重が良きを

水本セツヨ　看護師　・沖

半年に一度の清掃久し振り町内の人と触れ合う日なり
虐めして職失う教師の英才教育負を招きおり
教師が動画で流す苛め像おもしろいと言う三つ児にも劣る
髪の毛を嗅ぎて臭いとクレームす入院時のかび忘れしの娘ら
抑制を許可する姉しない妹手に負えぬ老母知りつくすは姉
毎日を理不尽な老人看ておれば我が老ゆるが怖く眠れぬ日のあり
熨斗つけて帰したき呆母来る度に苦情吐きしモンスタッ娘に

三田享子　よろこび　・福

台風十九号の厳しさを逐一放送する若きアナウンサーの声はきはきと
台風を歌に詠むのは残酷なり県内各地濁流に飲まる
プロ野球日本一が決まりたり「ソフトバンク」の三連勝に
御即位の儀式とどこおりなく終了しお二人の笑顔に心ひかれる
式を終えし天皇皇后両陛下洋装姿にて夜の食事会に
海外からの数多のメッセージ温かく新天皇の御代を祝えり
卒寿にて新天皇の御即位を映像に拝受し幸せに浸る

光岡詔子　旅　・羊

あまたなる渦がポカポカ輪を描くこの海峡を乗り越えしとは
玉藻刈る海人娘子と詠はれしこの海峡の闇に佇む
ますますを短歌に炎ゆる友ならむ「室屋」の屋敷にメモとりまくる
たなばたのごとき出合ひに昨日の続きのやうな話にはづむ
歌仲間五人の旅の夜の酒の勢ひ少しおちたるを知る
看板の「かみゆい処」字のかすれ誰にも会はない盤過る道
シルバーの席はあの辺駅員の指差す方をわれのみが見る

光広祥子　人　・昴

ビーズのひかるネイルの朱のいろに促されつつ署名はつづく
問いかけにそつなく応うる若き人まつげのカールもしっかりきめて
母の知る母を知る人つぎつぎに浮かび町並みを自転車にゆく
訪ねられ訪ねし日ありき人も家も失せて建ちゆくマンション一棟
一心に母の塗りたる花の絵をはがす一瞬日日よみがえる
施設の部屋明け渡し帰りゆく道に行き合うケアマネージャー
幼子を追いかけてゆく道の辺に萩の花さき舞うしじみちょう

箕浦勤　同年輩　・蓑

職去りし同年輩の人ならむ座せるまま逝く隣の椅子に
大丈夫ですかと問はれ返事せぬ男は机に突つ伏せるままに
横たへむと椅子より降ろし仰向けにせる人の顔尋常ならず
関係の糸を消さむとずる顔の遠まきにする重篤の人を
分別を持つ筈ならむ齢なれど三十人が一人を救へず
人びとは見知らぬ人の死に疎く係り持たぬを賢しとする
ひろがらぬ翅に生まれし青条揚羽(あをすぢあげは)細き肢もて土の上進む

宮﨑りつ子　台風　・う

たおやかさ奪われたるもコスモスの彩り冴ゆる休耕田に
いく日もつづく停電に疲れしを点滴打たん医院通えり
停電に名月までも雲の上明かり乏しき夜はつづけり
赤き実の一つ残らずこぼれ落ち小鳥は何を探すだろうか
氾濫の映像見ては身がすくむ人災なるか天災なるか
朝空に水害知らず冴ゆる月　こんな時にはかくれて欲しい
またも来た当地めがけて台風が準備整うも停電ならず

宮西千代子　庭の萩　・夢

庭の萩伸びる細枝の先々に花の咲きたり一夜さの間に
目覚むれば戸をあけ朝の空気吸う今朝の冷気に秋のかおれる
朝毎に眺むる庭の萩の花冷えのまされば花いろ深まる
いく日を眺め楽しむ庭の萩いろおぼおぼと薄れて来たる
萩叢の根方に散りぼう花々に手ふるればわずか土のぬくもり
青空の広がる日中コンバインの音高らかに収穫すすむ
刈田後集う雀らもくもくと只もくもくと啄うごかす

村石けさ子　二〇一九年十月　・埼

吉野氏のノーベル賞の笑顔満つリチウムひとすじ苦難の末に
幸福な夫妻の会見見つめいる何やら面差し似ているような
千曲川の決壊を知るふるさとの川の無残よため息深し
はらからの須坂は難を逃れしも泥のりんごの胸えぐり来る
ひんぱんに大き災害襲い来る気候になりしかわれらの国は
ママ見ていてよ秋晴れの住宅街に子の声の吸いこまれゆく
稲穂垂れ匂い流れ来しこの道も家建ち並び彼の頃遠し

村上旭　亜鉛　・銚

風回る雨戸の裏のブツブツは見捨ててておけぬ錆の始まり
次次と錆びゆく物の悔しけれ亜鉛塗装を用ゐ始めぬ
錆止めの辿りつきたる正解を海幕色の亜鉛に託す
眼の奥に対の模様の消え去りて白内障の手術の終る
十代の視力に戻る術により一・二を得て眼鏡を捨つる
術により視力のあがりもう食べぬキムチの色のどぎつく見えて
鎌倉の半増坊に当てられてこれより登る天園コース

室家洋子　体育祭　・洛

りいりいとこおろぎの音は改札の朝の流れに途切れながらも
運休の文字くりかえす発着標脳波の波形たどるごとくに
ペン先の戸惑う文字のアール・ワンを書類に記す初めての今日
青組の一糸乱れぬ応援のうねりいる波令和が動く
長身の男子生徒ら脚かろく宙にえがける弧は曲にのる
強烈な十六ビートのダンス終え瞬の静けさ　拍手の起る
グランドにいま風なけれど青春のひかり散らせり疾走の子ら

桃原佳子　家事　・沖

秋の七草と言えば我が家の庭の藤袴競い咲きおり
廃棄料支払いピアノ処分する家の片付けに明け暮れる日々
三時間待ってようやく受診せり結果を聞きて安堵する二人
麦味噌を仕込み廃油石鹸を作り十月の仕事を終える
家事のことしか短歌に詠めなくて狭くなってゆく私の視界
立て続けに台風襲来し田も町も呑み込みし川のニュースを見る朝
全焼せし那覇の首里城は我の心の拠所涙溢れて止まず

森ヒロノ　血管　・福

血管をさがして幾度も針をさす点滴よ無事に通れと祈る
血管も筋肉ですと言いながら「私じゃ無理」と行ってしまいぬ
かすかなる点滴の音かぞえつつ会いたき人へ思いめぐらす
左目を雨雲のごとく被い来て何にも見えぬ不自由さ知る
わずかずつ眼のくもり小さくなり「よくぞここまで恢復したな」と
鴨の群れ我が杖の音に目をさまし池にとび込む「逃げなくていいよ」
台風のまだ来ぬ静かな公園に恋を求めて鳥鳴きわたる

森川淑子　併合の草分け（日韓）　・大

東京市牛込区より京城に渡りし祖父の足どりを追ふ
艀にて桟橋に上陸運搬人の子ら競ひて駅まで荷を運びたり
京城への車窓から見渡す野山の景ほとんど木の無き低き禿山
山の木は伐りつくされて燃料に根まで掘られて木灰となる
田畑見れば作物に交じり雑草の手入れもされず打ち捨ててあり
都会には華僑の根強く勢ひて繊維と雑貨、酒類を一手に
京城は官庁、学校整へり日本人と鮮人賑はふ街なり

両角徳子　蟋蟀　・信

秋が来る秋が来るとぞ虫の声テレビを見てゐる我を急かせる
玄関に何時より住まふや蟋蟀の声堂堂と夏を押しやる
右・左と力を入れて自転車を漕ぎ行く先に稲穂が垂るる
この薄右利きなるや槍ヶ岳に懸る白雲しきりに払ふ
陽の光月の光も受け入れて薄は高だか冬なびきをり
黒黒と吾が八十五歳の短歌を書く夕べに昇る宵待ちの月
何を待つ何を待ちゐるこの生を保ちて満ちくる時を待つなり

山合邦子　六稜（りくりょう）の星　・天

発見す高校卒業アルバムに吉野彰君髪もゆたかに
ノーベル賞受賞の栄のおすそわけ高校同期の縁につながれ
前身は旧制中学蛮カラの遺風に染まる男子も女子も
改めてリチウム電池ありがたし使ひこなせぬスマホなれど
変革は成しとげられてノーベル賞団塊世代の試行錯誤に
学帽の六稜の星燦爛と輝きわたるみづから燃えて
思想ゆゑエリートコースに乗りながらドロップアウトせし者は今

山岸時子　秋長けゆく　・朱

秋の日に一羽の黄蝶よろよろと枝垂れる萩にたわむれている
乱れ咲く白萩に舞う黄蝶二つ高く低くに縺れて秋は
秋明菊の可憐な花のさゆらぎを眺めておれば陽のうつりゆく
彼岸花三筋すっくと立ちあがる残暑の庭に秋風幽か
校庭の紅白帽子のコビトたち　♪森の木陰でドンジャラホイ
壊されし巣をたちまちに修繕す働きものの蜘蛛のお父さん
六十余年のうつろい思う東京北区田端中学校クラス会

矢口さた　折折　・習

子や孫に娑婆と呼ばれて久しかりインドの言の葉堪忍土と知る
不意の訃に人のはかなさ身に沁みぬ一人暮しの日常にして
デジタルの補聴器に日々助けらる今日の学習は手話のコーラス
注射針いつ刺されても緊張す献血するも馴るることなし
雨にぬれ破れはためくポスターの落選候補の顔はにこやか
足もとの濺めるビル街キックしてシースルーエレベーターぐんぐん昇る
活気なき我孫子の街をゆるがしてスターマインの炸裂つづく

八橋千代子　百パーセント　・森

放牧の牛にナンバーつけるよに飼いならされる妻になりたり
「喰うだけは何とかする」と言う牛のじゃじゃ馬ならしの寝言にのりし
喪失の100パーセントの悲しみを分ける子や夫なき世の秋ぞ
子を亡くし50パーセントずつ支え合いしもう夫は亡き0（ゼロ）に戻りぬ
失いしもの何もなきシューベルトのあふるる涙ラジオに流るる
じじは抜けばばに寄りそう死に神がこん夜あたりはいかがでしょうか
年月の重みを思う子を亡くし夫を看取りて紫雲英花野（げんげ）に

山﨑昭子　風船唐綿（ふうせんとうわた）　・大

眠りから目覚めし白寿の一声は「新庄へ連れていってほしい」
遠き日の母の薮入りについてゆく奈良の新庄には商店並ぶ
両親もはらからもいぬ実家へと白寿になりても帰りたしという
点滴がぽつりぽつりと落ちてゆく小さくなりし母のかいなに
初に咲く風船唐綿その花がいかに実になる風船になる
風船は萌黄色なりおもしろく日々の観察日課となれり
庭に咲く藤袴など抱え込み友の玄関に秋を届ける

山崎三千代　末の子　・湾

子の茶髪をつよく叱りし日も遠くパソコン教わる夫の背小さし
若き日には茶髪にあこがるる時もありしに夫には今も分からずにいる
冷蔵庫に頭を突っ込み涼しいとおどけいし子も二人子のパパに
末の子はゲームは三十分と躾けられうつむく幼をなぐさめしわれは
己が家をすっきりさせんと末の子が家に持ち込みしダンボールいくつ
リハビリに通う道すじ車窓より娘の住む家に朝の挨拶
落栗をあそばせながら帰る道やり残しがあるよと風がささやく

山崎休美　分譲地　・信

一等地と父祖ほこり来し水田が分譲宅地となりて旗たつ
分譲地に積木がごとく家たちてたちまち明るき子等のこゑする
廃品となりゆく遺品類々が烟となりても亡き父母の顕つ
明治生まれ亡父(ちち)の記せる出入帳まこと克明和紙の字にじむ
郭公がなけば豆蒔く季なりと言ひをりし亡父(ちち)憶ひ豆まく
年長けてもつとも穏しき時かとも想ひみてをり曽孫を抱きて
わが齢重ねておもほゆ杳つ世のたらざる過ぎこし父母のこと

山下和子　蛇　・洛

隣家のガレージに蛇の迷い込み夫も駆り出し掃討作戦
ガレージに積み上げし物一つ一つ除く恐怖に震える手足
植木鉢の底にとぐろを巻く蛇のひそむを知りてんやわんやに
蛇騒動逃げ惑う蛇におののきてすってんころりん足首捻挫
さわやかな二百二十日をおとな五人二尺余の蛇に翻弄さるる
スルスルと敷地の外へ消えし蛇安堵の胸をなでおろす五人
恐きものいろいろあれどさして問わば蛇が一番ゴキブリ二番と

山角和子　石蕗　・う

給水車のしらせ流れる暑き日に木々をゆらしてぬるむ風吹く
クーラーや扇風機の音止まる三日目の日ぐれさみしく山鳩の鳴く
十三夜の月に浮かれていっせいに虫鳴きいだす夕べ安らぐ
夕日背にそうめんすする台風の去りて停電つづく夕餉時
「大丈夫」と意地張りいるも雨戸打つ風雨におびえる夜の長し
キーキーと熟れ柿仲間に知らすのか百舌高鳴ける日ぐれの空に
荒れ狂う風雨去り行き木下かげ黄の色ひっそり石蕗咲けり

山田香代子　三方五湖　・洛

はるか見る越前岬みぎ左レインボーラインを登りゆくバス
見のかぎり五色の湖のひろがりて澱くまたうすく秋の靄おぶ
天空のテラスにしばし娘ときける五木ひろしの「ふるさと」の歌
楓もみじ朱に未だしき瓜割の滝に紅藻の石を染めいる
台風の被害ますます甚大に憂いもちつつ友の画展へ
夜の雨と紛るる葉ずれは更けゆく秋いたみ震いし樺の黄葉
台風の余波になべて散り敷ける金木犀の薫るじゅうたん

山野幸司　被爆　・沖

浦上の天主の御堂ほの暗き微笑見する被爆マリヤが
浦上の御堂は暗くひっそりと被爆マリヤの眼黒かり
浦上の御堂飾りしマリヤ像原爆に合い頭を残す
被爆せし浦上天主ガレキよりマリヤ木像よみがえりたる
浦上の天主の隅に仰ぎ見るマリヤの像にキラリ涙が
今もなお悲しみ果てぬマリヤ像世界に止まぬいくさの音が
被爆せし浦上天主マリヤ像沈黙破れ世界へ向けて

山村睦子　即位礼正殿の儀　・葦

合言葉ワンチームで勝ち続け快進撃に強さが増して
ワンチーム桜の戦士勇敢に強豪破りベストエイトに
ラグビーの歴史塗りかえベストエイト夢と感動感謝で一杯
台風で川の決壊、氾濫で日常生活一瞬で奪う
映像で水の恐怖まざまざと川を挟んで明暗分ける
おごそかに平安絵巻さながらに古式にのっとり世界に宣明す
高御座、御帳台のお姿に祝砲轟き虹もかかりて

山本　孟　　冬日影　・大

冬日影目の高さまで沈みきて窓いっぱいに照りて暮れゆく
汝(な)の病ひ思ひゐる時六甲の峰へをりしも日の沈みゆく
不機嫌の少年塾を休むといふ自立反抗のボール蹴る音
光太郎智恵子は吾児を抱きしむる幸い知らず芸術無心
生涯を太宰研究に尽くす友訊きたきことのあれども逝きぬ
自転する地球じわじわずれてゆくプレートわが家の地中深くに
雷雲は成長しつつ昼の陽を閉ざし風巻きどしや降りの雨

湯田恒子　　御即位　・岡

天皇の即位の大礼に引き込まれテレビの前に脆くなり
連綿と百二十五代続きたる日本ならではの儀式尊し
澄み渡る月を乗せたる薄穂が今日の夜空を静かに払ふ
一すぢに生活良かれと励み来し夫の横顔に積もる歳月
芋の葉に結びし露の危ふさよ風吹く勿れ幼ころぶな
渡り来る風嫋やけし休耕田に綾なすコスモス今盛りなり
青葉透くうしろにありて白滝の苔むす岩をくぐる寂けさ

養学登志子　　秋深む　・凌

夏ならばかんかん照りの五時なのに他所のあかりがぽつぽつともる
重いからのいてといって夢のさめよい猫だったしばししのびぬ
錆色の石榴の下がる雨あがり明日は笑える日かもしれない
たねは丹波尾道そだち友の声大きな粒の枝豆とどく
ふじばかまよめなの咲いてほととぎすわが家の秋はうすむらさきよ
紺色の茄子の漬りをめでながら朝の糠床ざっくりまぜる
今日のおわり新米一合弱を研ぐ朝のくることうたがわずして

横田美穂子　　玄真　・宙

弟に「退院おめでとう」と家族の絵五歳の姉の夏の思い出
弟の重い病を救いて後祖母の他界と五歳児の我慢
人生の関所のうちの闘病に姪の子「玄真(げんしん)」二歳で打ち勝つ
ぬいぐるみお守りのごとだきしめて風邪治そうと頑張る幼
「赤とんぼ」とう季節の菓子を頂きぬつと口ずさむ夕焼け小焼け
あちこちにテーピングしたアスリート「テニス」で故障の十代を思えり
一気一作と師のたまえるをかみしめて紙面に向かい深呼吸ひとつ

吉田加寿子　　十五号の停電　・渚

幾たびかつき消えしたるも真夜三時台風さなかに停電なりき
二日目も停電つづき飯(めし)炊けず苛立つ暑さに情報もなし
停電の長きに疲れ熱出すも冷たき水を喉に通せず
十五号の傷痕(あと)を眼にとめ庭や道ふさぐ枝葉に一日過ごす
停電の恢復したる従姉妹らは炊き立て飯(めし)を差し入れくるる
早ばやととりし夕餉に電気つきブルーシートのつづく街見す
停電に冷蔵庫の品全部捨て夫は掃除に溜息をつく

吉野ふじ子　　故郷　・朱

彼岸ごと会いし兄姉の皺増して立ち居振る舞い父母に似る
墓に立つ古き柿の木たわわなり実を烏らに施している
強風をハンドル固くひた走る霞ヶ浦の波立つを見て
十月の酷暑の中を故郷の田畑ひたすら作物を生む
薔薇の花宅急便で届きたる今日から我は後期高齢者
大雨の過ぎ去りし肖御堂にてメサイアの曲歌い重ねる
屋根までも泥に浸かりし施設より逃げきし友の訴えを聴く

若林美知恵　唐突に　・羊

太く名を書きこみしよりシャツ、パンツ、タオルことごと父の貌持つ
ちぢみ地の白き肌着に書き記す父の名ふにふに笑いてゆがむ
「旨いケーキごちそうするよ」の約束は果たさるるなし唐突に逝く
文字の向こうにほつほつ打てる指見え背中の見えて遠ざかりゆく
その奥に異界隠してゆらげるやダム湖一面おおう朝霧
全身で重き硝子戸あけくるる幼稚園児よキミは騎士だ
まぼろしに警報音また響き来て父を死なせし踏切わたる

若松喜子　全線再開　・昴

災害のごみ処理に二年かかるとう目を覆いたし耳を塞ぎたし
鬼役の子供らの声ハイヤメヤーハイヤメヤーと御輿あらわる
子鬼らの囃す声して若き鬼潮をかけあい海に飛びこむ
厳かに随兵さんの舞いおわり御輿も鬼も御旅所を出ず
一年三か月ぶりの芸備線横断幕うれし　おかえりなさい
二人で仲良くけんかとう投稿欄また読みかえす秋をしずかに
風の午後ひとり居の部屋に歌ノート展げて一人記憶を紡ぐ

渡辺徳子　21世紀　・岡

菠薐草の種播く九月末の日に汗凛凛と気温三十度
「地球は滅ぶ」十六歳の少女の言葉消せぬ気温ぞ今年の残暑
豚コレラにワクチン打つとニュースありぬ食材すべて薬漬けなり
携帯をスマホに換へるか決めかねて打つ秋畑の鍬を休めぬ
コンバイン一日使へば足腰の痛み訴へる夫も齢か
「毛穴より皺が多いねばあちやんは」男孫の指摘に鏡を覗く
「ぢいちやんの何処が好きや」と問ふ孫の六年生の疑問に答へず

青田不二子　静けさ　・湾

岩陰に小さく白く咲いている大文字草はただに可憐に
雨あがり刈田に佇む白鷺はぽつねんと一羽の淋しさを見せ
猛暑去り秋風の夕べを安らぎて金木犀の咲く道を帰る
三日月の一瞬見えしが雲流れかくれし後のひそかな名残り
身のまわり整理せねばと思えども全く進まず一年過ぎぬ
品物を買わない溜めない生活を元気な時から努力するのみ
平凡にひと日を過ごすわれなれば今宵の静けさは時計の音のみ

赤堀敦子　台風　・岡

見えぬ眼華奢な身をもて立木早絵キリマンジャロの登山を語る
食事会を約して友を待ちをりぬ斯かるが若き日にもありたり
手を出せばぽろりと落ちて死んだふり「ダイコンサルハムシ」憎さも憎し
歪なれど友と作りし苦玉のみなそれぞれに趣のあり
台風は海の彼方に迫りゐて白菜の覆ひ掛けに一日暮れたり
夜の床をゆるがす如き広戸風明けても去らずおろおろ坐る
台風の後とは思へぬ静けさに満月昇り裸木照らす

秋山裕子　小松菜　・茨

黒き土に蒔いた小松菜点点と小さな芽の列銀河のごとし
生垣に覆い被さるゴーヤの葉日毎緑葉黄色に染まる
朝取りのゴーヤをバナナとジュースにし今日も夫と笑顔の一杯
日々の喧騒離れ硫黄の湯「ふぅーっ」と大き息湯けむりが舞ふ
茅葺きの湧き湯に肩寄せ韓国人と共に浸れば優しき雨降る
鬼が城秋の祭りか軽トラック鳥居を囲み列をなしおり
カサコソと友の手製の風鈴よ幽かな音色寝間にも聞こゆ

阿尻みさを　台風に　・海

轟々と風雨ふきあれ川あふれ家々こわされ人の死ぬ
恐ろしき自然災害まのあたり身動き出来ぬ無念かみしむ
無惨なる余りにむごき災害に第二次大戦の目の前にうかびく
政治経済利欲第一の世界観がかくも恐ろし災害生むのか
心から地球の平和祈る日々正しき哲学もとに生きなむ
幼より二酸化炭素は木が吸ひて酸素放出と学び実行す我は
亡き人の冥福祈り正しき複興地球の平和を!!吾は祈らむ

阿部洋子　人の情け　・湾

研修生の本場仕込みの水餃子日中親善の湯気立つ大鍋
大鍋に白菜白葱の具沢山湯気立ちはじめわたしの出番
調理室に言葉は要らず空気読みそろそろ仕上げの水場の始末
水餃子思えば懐かし父の味周りを和ます食の文化に
何気ない餃子作りは箸一本の見事な手捌きの極意に出会う
A女史の「心ばかりのお礼に」と思い出深き朝鮮人参
朝鮮人参見るたび風土変われども変わらぬ人の情けを知りぬ

荒川信明　耳癒い　・湾

紫のリラの花房さ揺れつつそよろの風に香りが遊ぶ
里山の鮮らしき息吹を吸いながら静かに聴きたし小鳥の囀り
幕開けの令和の朝餉は質素なり山の恵みを美味しくいただく
令和なる齢を重ねて老い急ぐ反比例するは孫らの背丈
春盛り疫病神が怒り出し心の折れた五月尽日
この人生耳癒いなるとは想定外耳借りる妻に感謝あるのみ
耳遠く落語の落ちも聞けずして悔しいくらいに笑いの欠ける

潮田千代　綿の実　・地

ふわふわの綿の実十八収穫にあの人この人あげたい顔が
採ってきた甘唐の中時折にとびきり辛い一本潜む
秋晴れの動物園の昼下がり猛獣たちはお昼寝タイム
まだ青い美男葛の実葛動物園のペンギン舎横
一升餅背負いテーブル一周しにっこり笑顔晴は一歳
いないいないばあパチパチ拍手いい顔に三拍遅れのバイバイ出来る
貴船菊山杜鵑水引草壺の傍らハロウィーンかぼちゃ

生田節子　台風十九号　・洛

温暖化にすごい威力で襲来す台風十九号に心の痛む
大雨の特別警報十三都県決壊河川ふえ被害も甚大
泥水は濁流となり襲いくる今までになき猛烈な雨
泥まみれのりんごもいちごも痛痛しお米もだめと肩おとす人
死者の数ニュースのたびに増えゆきて高齢者多くひと事ならず
前庭に見なれぬ窪みがあちこちに不気味さおぼゆ猪と聞き
猪がみみずを探し掘ったあとと身近に獣の気配は恐怖

石澤利夫　白寿を目指す　・萬

春秋のめぐりは早くはや九十歳この命いかにして生きなん
われ独り欲しがるままに生きて居る今日の一日も生涯として
人の智は宇宙の果ても極むるに極めがたきは人の心ぞ
大臣の資産公開どうなるや肚立つばかりの吾何もなし
ラグビーもバレーも勝った日本の列島沸かす肉弾戦なり
浮き雲のたなびく中に白く照る月をば見たり令和の朝に
十年先の白寿を目指し生きようかお前と俺の夏の終りに

泉　嘉穂子　恐竜博　・森

八月の日差しに列なす恐竜博ミスト浴びつつ入場を待つ
ばらばらの恐竜の骨はつながりて魂のなき器立ちたり
恐竜が波しぶきあげ逃げまどう海辺のCGしんと見つめる
幾万年の地底に眠りし恐竜の果てなき黙のくろがねの骨
まなうらに恐竜残りて帰るさに上野の森はみどりさやげり
恐竜博出でて立ち寄る精養軒木苺のケーキに時空をもどす
土産にはリアルは嫌とふわふわのステゴザウルスを孫は選べり

伊東ミイ子　歌友の水害　・福

台風時けたたましくなる警報音阿武隈川の氾濫知らす
川沿いに住む友のおり逃げて！逃げて！届かぬ携帯握りあらげる
ようやくに辿りつきたる友の家床はがされて物何もなし
神棚の位置まで水はあがりしと息子はしばらく母には見せずとう
三十五畳のたたみ一枚姿なく家財道具の山と積まれたり
昨日まで普通にありし家具道具ふやけて壊れゴミという名に
なにもかも失いし友の手に渡す第一歌集『母の子守唄』

犬塚幸子　オルゴール　・世

アルバムは昭和のはじめか鳥打ち帽の若き日の父オートバイ姿
知らぬ間に撮られるし写真晩年の母に似たれば暫し息のむ
戦ひに青春なしと思へどもモンペの写真なつかしく繰る
ふる里の家に帰れば里びとの亡母の名呼びてわれに寄り来る
オルゴール鳴り止むまでの静かなる間をわれに笑む人形の瞳は
厳しさも優しさもありて世の常を教へ給ひし亡母偲ぶ夕
秋の雲寄りて離るる窓にゐて手術への思ひ照りかげりする

今村叶子　本崩る　・大

本棚が本の重さに崩れしは二回目それぞれ異なる部屋で
このたびは二重にたてし重みにて棚板割るる五十年耐え
本棚をなだれ落ちにし本のなか夫しゃがみこみ本読み耽る
一冊もわが本のなき本棚の崩るるは夫の集癖にして
思おえば新婚旅行の大バッグ一つは本が満杯だった
幼なより神経質なわが性は夫の本積む故に払拭さる
雑然は年ふるごとに増してゆく三部屋手つかず見やるばかりに

色井静代　心酔　・埼

たちまちに道路を濁流覆いたり憤怒のごとく悪魔のごとく
山ほどに言いたき事の湧き来るか夜来の雨音激情増せり
なにごとも無かったようなたたずまい台風去りし桔梗の紫色
怨念がムクリと顔を見せる夕慎み深くききょうは咲けり
英国の明るき海辺のカレンダー心に灯る孫のみやげは
イギリスの友との語らいハッピーと孫は日に日に心酔英語に
玄関まで柿のかおりが浸しゆく目眩きほどに朱色にたわむ

岩﨑洋子　敬老の宴　・朱

ビイオリラを奏でる女の艶やかなルージュまぶしき敬老の宴
なだ万の仕出し弁当届きおりちょっとうれしき老人の集い
稲妻と雷鳴バリバリ一瞬に電気びしゃりと消えて二時間
二時間の停電ありて暗やみになすすべもなくおろかさ知らさるる
丈高く萩の穂先の出そろいぬ夕陽を浴びて茜に輝く
萩の穂は向かい風受けあおらるる自転車こぎゆくはては青空
手の平に注射針刺し麻酔かけ瞬時にばね指治療しおり

宇井秀雄　セイゴ夜釣り　・う

澄みきつた空に短きうす茜飛行機雲がくつきり浮きぬ
となりやの奥さんわれの落語会写真に添へて最中くれたり
二階にて愛犬吠えるなぜかしら女孫の登校あと追ふらしき
手作りの浮子をスーッと消し込みぬ　すかさず合はす竿しめ込まる
浮子沈む矢庭に合はす軟らかき竿半月を描きて耐へぬ
夜の海ウキを消し込み道糸をヒューと鳴らして重く引き込む
軟らかき竿にかかりし大セイゴ尺に余れり釣りの醍醐味

植月弘子　窓越しに　・岡

ベランダに見下ろして羨まし日傘さしいづこへ行くや若きいくたり
とりどりの日傘かざしてゆく人をベランダに見下ろす老の貧しさ
窓を訪ふ鳩も来ずなり「諦めよ」と娘に諌められ痛む脚さする
蝉のこゑ聴きしと躙り寄る窓にはや姿なしただ蒼き空
空を翔ぶすべは恋はねどこの宙を気儘にい行くもののあるなり
夜の巷に出づるは叶はぬわが耳に「うらじや」踊りの熱気届きぬ
踊り衣裳汗にぬらして踊りゐむ若者の熱気五階に届く

上野久子　用水路は　・信

用水路は溢れんばかりの激流なり波が光りて蛇うねるごとし
雨止まず危険が迫る用水路夕暮れなるも為すすべもなし
森の家は倒木おそれ避難する用水路近きわが家どうする
避難をと呼びかけられるも大丈夫と夫は言いおり動こうとせぬ
歳かさね思考力おとり決められぬどうでも良くなり吾も動かぬ
一夜明け水害おこらずほっとする上流の堤くずれたという
雨上がり庭のイチジクに熊蜂むれ急がしそうに乳汁運ぶ

内田泰子　米寿　・漣

集いたる親族と共に米寿祝う来し方思う吾の歴史を
いちじるしき成長見する曾孫たち会話のかなう将貴四歳
目まぐるしきネット社会に身を置きて米寿を祝うこれより余命
定まらぬ荒れたる気温に虫の音の絶えたり未だ長月半ば
吾の身をいつ襲いくるか天災にそこはかとなき恐れを抱く
停電に暮しのすべてを奪わるる被災を己が身に重ねみる
台風の爪跡しるき惨状のニュースに買い足すランタン一つ

鵜之沢通子　秋晴れ　・習

秋晴れの日差しを浴びて深呼吸さあがんばろう今日の草取り
お祭りの子供みこしのにぎやかさここ何年もわが孫は来ぬ
新緑の葉が好物か毛虫どもは椿の葉裏にびっしり並ぶ
難聴のつらさ、さびしさ歌に詠む心安まるわれのひととき
難聴のわが片腕の補聴器をお疲れさんと夜には外す
おしゃれなどせぬわれなれど今日だけは化粧をしよう孫に会うため
久しぶりに孫に会いたり背丈伸びたくましき少年となりぬ

大島真清　月かげ　・大

おぼつかなく歩める我に吹きよせる風よ草の香はらみて吹けよ
洪水のニュースに明け暮れゆきし夜しぐれて雨は地にしみゆく
ぎっくり腰またも歩みを止めたれば此は人生と思い定めぬ
ただ忘我の境地になれるもの欲しと日を繰るわれに誰が寄り来たる
音もなくしぐるる雨は夜の孤独しずめてわれの胸にも降れり
あさの陽に曇りガラスの凹凸はきらめき渡るこころ捕えて
月かげのさやかに照れるうれしさよ絶えて久しく見ずに居たれば

太田和昭子　霜月　・渚

天皇の即位の礼儀おごそかに胸あつく拝す平和祈りつ
カーテンを開ける朝(あした)の風匂う、ああ「木せいの」秋の香りや
金色にめぐりを染めて「木せい」のゆかしき香り友しのばせて
十五号十九号に唸りあげ豪雨の竹林滝のいきおい
空晴れて背戸の山茶花咲き盛り早や霜月迎う風さわやかに
誘われて行きしドライブ求め来し玉葱の苗植える晴れし今日
妹よりの電話に温み「よたよた」と出る草取りに身の性を知る

大久保徳子　ドライブ　・北

秩父路の花を見んとぞ高齢の女四人の日帰りドライブ
秩父八景華厳の滝の飛沫うけ掬う清水に身の締まりゆく
中腹に老婆の商う菜まんじゅう手作りの味山人(やまびと)の知恵
白き花爽やかなるを韮と聞きいきなり一人が摘みはじめたり
ひと茎に二色(ふたいろ)に咲くダリアあり「うわき心」と名付けられしよ
両神の麓に広がるダリア園日蔭なき炎昼ようよう巡る
道の駅三ヶ所めぐりひとときを薬師の湯船に汗を流しぬ

大倉美與子　初秋　・岡

車椅子で透析室に入りてゆくわれよりはるかに若きこの人
巣立せし子らを率ゐて野に遊びまた舞ひ戻る燕賑はし
海近き夫の故郷山裾の吾の故郷今日日本晴れ
包丁研ぎは夫の仕事にありしなり片減りし砥石に懸命に研ぐ
硝子窓の汚れ気になる昨日今日夏の終りの雨の続きぬ
涼しくなれば張り替へせむと思ひゐる障子二枚が視野を黄ばめぬ
聞く人も居らぬに声ひそめゐる愚痴の独語を己れ憐れむ

大槻知子　嵐　・朱

ひねもすを一羽の鳶は電線に夕べの影となりぬ凪に向かいて
台風一過転がる柿の実堅きまま朝光受けて鋭く返す
嵐過ぎ蜩の声呪文のごとし土砂につぶされし家居の跡
巨大台風の跡放置されたる棚田の熟穂山峡に倒れ伏しまま
雨上がりひこばえ広がる田の原につっつきめぐらす鷺の細首
長梅雨に伸び呆けし萩の枝白花蝶と飛びはじけたり
高校生に文学いらぬらし契約書の書き方のる教科書は

大野木淑子　台風それて　・洛

紅梅の枝にキウイの蔓は伸びゴールドやみどりの実の生るがまま
蜂に礼を以前には授粉綿棒を竹の先に付け梯子にのぼり
たっぷりと浴びし木洩れ日夏はすぎ収穫まで鳥寄りつかないで
雨か烏地に落ちているゴールドキウイ熟れてやわらか仕方がないね
柿も色付き仏前に盛り月参りの僧侶の土産に柿のななつを
モナ・リザの左手未完なりと知る真でしょうか絵を今一度
台風は逸れて下さい二十号大切な家財ゴミの山となる

岡島公子　台風十九号　・眉

なんといふ酷さと言はむ台風の被害は東日本各地に
このたびは発生から上陸まできはめて早く猛威振ひき
「かつてない規模」と繰り返す警報もただ虚ろに聞きしのみなる
明くる朝ニュースで惨状目にしたり広域に渡るとも知り唖然とす
千曲川決壊の一瞬息のみぬ家を倒しどつと氾濫
今後海水温度上昇に台風巨大化とふいかがすべきぞ
逝きし人復興に力尽くす人われは祈りに手を合はせをり

尾形悦子　少女の涙　・湾

「私たちは絶滅の始まりにいる」十六歳の少女の涙
曇りなく時代を感じる若きらがとらえる未来は暗く危うき
すさぶ風たたく雨音警報音少女の声が重なる嵐夜
美しき国土いっしゅんに泥の海巨大台風の無慈悲な爪あと
台風は更に巨大化してゆくらし未来おもえば背筋の寒き
この星を痛め続けてきた我ら青いままに残せるだろうか
世界中の総力あつめ取り戻さん美しい自然、穏やかな気候

小川節子　小さな旅　・茨

野を山を奥へと進む道すがら滝のしぶける水辺に娘等と
滝つぼのしぶき浴びつつ涼をとる老いたる二人仲睦まじく
聳え立つ樹木のみどり仰ぎ見る刹那眼に沁む山百合の白
見の限り青田続けるその彼方目指すは出湯今宵の宿り
昼の空俄かに暗く稲妻がはしりて雷鳴轟きわたる
ひと頻り降る雨激し早ばやと雲の切れ間に光射し初む
みんみんと鳴き急ぐ蝉に魂をゆさぶられつつ今朝は目覚むる

沖田誠子　月下美人　・葦

月下美人二十二個の花芽つき半分落ちて半分が咲く
香りたち開花を告ぐる月下美人今宵かぎりの白き大輪
咲き終えし花はボンボリのごと垂りて月下美人のおのがとむらい
川の辺の草や灌木倒されて濁流凄き昨日を見たり
川澄みし雨の二日後鯉十匹何事も無きがに悠々泳ぐ
秋の日の避難訓練高台へ災害はいつかこの地も襲わん
しぶき声バンドのリズムに友乗りて八十二歳の華をふるまう

奥まさみ　吾亦紅　・鳩

貴人のなお立ちますかと振りかえるかげろうのたつあすか野すぎて
握り来し指をほどけば吾亦紅茎それぞれの折れ線をなす
一握り壷に投げ込むわれもこう各が曲がりのままにおさまる
ガラス窓うちからくもる台風月つつしみつつも籠るやすけさ
眼疾の検査にくれて帰路に見る通天閣あわく灯りてしずか
鈴生りの柿がそこにと促され病む眼にさぐるまぼろしの青
渡り行く小鳥の群の休むらし呼び交う声は葉のしげみより

小田淑子　風　・昴

冷蔵庫の夜中に発する「開いてます」「わかった」と言い扉を閉じる
色褪せて西瓜のつるの伸びる道かぶと虫隠れ不器用にもがき
竹林の葉は揺れている台風の近づく夕べ椋鳥は空へ
群雀ひろがり集まり竹林へしぼみ隠れる強風の暮れ
吹く風の一瞬はたとやむ時の静寂のなか金木犀の香
藤村の詩を口ずさみ悲しめば千曲川の濁流と茅
若きらはスニーカーはく旅人歌碑の前に立ちて自撮り始める

小野節子　忘れる　・夢

忘れること苦にしていても始まらぬ大事なことはカレンダーにメモ
忘れゆくしあわせもあり友に会い腹立ち憎しみ薄れ懐かし
親が子を子供が親をいたわりて助け合うことうすれゆく今
名月の照らす稲穂は頭垂れ災害少なき地形に感謝す
高視聴率の「ぽつんと一軒家」何かにひかれて我も観ている
山奥の「ぽつんと一軒家」ほとんどが高齢者なり気になるその後
年毎に災害の度合ひどくなる想定外とは便利な言葉

海保奈良繁　なぞ解き　・春

「実相とは」そのまま端坐黙然す深夜寂寂扇風機の音
ふと気付く事に始まるわが祈り何がしかに押さるる思ひ
この機会のがしてならぬと発願す習ふより慣れろわれのなぞ解き
私たちの影はいつも黒だが違う歌合せのかげは真実のかげ
その影はなぞ解きのごと夢(ユメ)なきも幸せの力あり余る現実
人は愛お造りになつた神様は知らないものを知られたものに
現し世は光が影を造り出す実相と現象こころを尽くす

角田玲子　実りゆく　・夢

右に揺れ左に揺れてまた右に風にたわむれ稲穂実りゆく
百日紅われに何かを告げるごと土に花びら落しておりぬ
墓の雑草ブルーシートを突き抜けてまたも一面青き山つくる
街なかの商店街の店わびし坂出イオンの明かりも減りゆく
秋風のわたりゆく午後波の音聞きつつ夫と美術館めぐる
別々の部屋で見ている「笑点」の笑う声する同じところで
巨人勝ったただそれだけで夫と吾機嫌よくなり会話のはずむ

片倉ひろみ　台風　・湾

空暗く雨もしとしと風も無く嵐の前触れか漂う不気味さ
雨の中を庭の鉢など家の中に遅しく思う孫の働き
台風の進路を伝えるニュースに東京の女孫を案じてのメールを
台風の日々のニュースの痛ましく未だ水退かぬ水没の町並
ある言葉に心も凍るわれになる今を受けとめ成るように成るさ
台風に会社は休みの知らせ来ぬと食べ物水はと孫とのライン
台風も去り空は青々と澄みたれど心は痛む吉田川の決壊

片山幸子　九月九日　・岡

病院よりの帰宅望みし亡き夫を乗せ霊柩車深夜を走る
「病院より即斎場には行きたくなし」生前の願ひに先づはわが家へ
入室と共に運ばれし病院食わが手を添へて僅か食ましむ
「友引」を幸ひとして二日長くもの言はぬままの夫に寄り添ふ
人去りて静まる家に二日間生けりと思ひ亡き夫に添ふ
月澄みて風の鎮まる九月九日長く短き妻を終りぬ
「これは美味」と夫の言ひたるたべものをもう一度とは思ふのみに逝く

金尾秀美　山陽道　・宙

山の木は夏の疲れを癒すごとわずかな風に葉先をゆらす
この夏は猛暑の日々の多かりき山の紅葉の未だに待たる
台風の害も少なき山陽道見下ろす里は黄金の田畑
東北の台風被害を案じつつ日本列島長しと思う
里近く柿の実たわわに稔りたり少し秋めく農家の庭に
道端の泡立ち草は黄の色を秋満足と今盛りあがる
山々を繋ぎて走る山陽道トンネル幾つも串だんごなり

金澤孝一　秋の羽蝶蘭　・湾

あと少しと思いの丈を緑葉に太り続ける秋の球根
満開は文月ならんや羽蝶蘭あなどり難き五寸の誘惑
秋の日に彼の華やぎは影もなしいま羽蝶蘭は次代を宿る
二十年経ちしか家族を見送りてわがまま娘に巡り遭いたり
ご機嫌を問いつつ与える水加減かいがいしさはわれに新し
消費税の便乗値上げに乗らざらん春に遠くも用土求むる
冬越しは球根ひと世の大勝負凍らせまいぞ朽ちらせまいぞ

金光昭子　音　・朱

郵便のバイクの音が待ち遠しダイレクトメール二つなれども
幽風の過ぎたる空にみどり濃き楕円のれもん確りつきぬ
ベランダに汗をかきかき立ちたれば鋸南町から海風とどく
太股の筋肉かたく膨らませ組むスクラムの力を退かず
黒髭のラガーマンらは青芝に突込み走り力ぶつける
盆踊り音うるさいと町内の公園ひそと早じまいする
七匹の子鴨引き連れ母鳥は狙う鴉に足蹴くらわす

金近敦子　からつぽ　・昴

からつぽの袋のやうな寂しさを抱き留めかねて転寝をする
うたた寝の時間はふしぎ脳内の「記憶と感情」整理するらし
レム睡眠ノンレム睡眠の端境に再生果たす「わたくし」がゐて
駆け出して答を探して見る夢の夢のまた夢よむ伊呂波歌
奥山に置き忘れたる黄金の銀杏のかんざし見事なつくり
はるかなる鯉城のぞみて桜木立けぶれる朝を走りぬけたり
日曜の芝生にボール蹴る君のちひさな自由を護る公園

蒲原清美　数独　・洛

数独を今日は解けずと詠う人吾も折みて試みてみん
八十一の枡目に対かう数独とは単純に見え単純ならず
詰めに来て気付ける8の重複に愕然とせり数独手強し
カンニングなさず解けたる数独に一息つきぬまぐれに非ず
思考なす注意忍耐人生に重ねていたり数独にはまり
こんなことしてはおれない数独にかかる時間の短縮目指す
中級は吾の脳には手におえず数独難解新聞を閉ず

川﨑富美子　いも蔓　・渚

痛いのは自分もちなり尻もちを又つきましたと日記一行
次に来る台風まえに大工ひとり日がな一日屋根を往き来す
鶏頭の深紅に見惚れ庭畑に立ちたる人に今朝も出合いぬ
いも蔓を佃煮にもせし戦時中思いもはるかに皮をむきおり
珍しくちまきの文化を頂きぬきなこの香り甘さほどよし
南天の落ち葉掃くほどたまりたりうずくまりて拾う時かけ楽し
あん蜜を六人で囲む座をもちぬ詩吟大会終わり安らぐ

川崎百合枝　従弟くる　・昴

山にまだブルーシートの残る墓地小さな白い蝶がとび立つ
「避難した人らの帰るを信じます」残った十軒の田植が始まる
土砂災害危険度高いの報道はレベッカの住む宮崎をいう
「避難せよ」の放送つづいた三ヵ月今日は一回五時のお知らせ
六十年前の動画をいただいた少しスリムな指揮するわたし
8と5のローソク頼むにケーキには58と立つと子はおかしがる
手紙交わすたった一人の従弟くる九州へ向かう三時間だけ

川辺京子　高野山　・大

杉木立天にそびえる高野山九十九折道バスは登りぬ
降りたてば清しい空気に包まれる山上盆地の聖地は広し
早朝の勤行が良いと五十二の宿坊寺院に泊りたき一夜
昼時の精進膳はごまどうふこうやどうふに十の野菜なり
透明な四角の菜は氷かな、冬瓜一切味付け辛い
苔むした有名人の墓あまた供養塔に知る日本の歴史
夫の乗る車椅子押すは大仕事下りの道は後ろ向き進む

宮柊二と香川進（続）

久我田鶴子

宮柊二が「孤独派宣言」を発表したのは、昭和二十四年六月号の「短歌雑誌」においてであった。

それに先立つ、昭和二十三年一月、香川進は「新日光」に「宮柊二小論—孤独について」を書いている。『群鶏』から作品を挙げて、「これはまつたく孤独だ。」と書き、その孤独の正体を見極めようとしている。宮柊二に対する北原白秋の生前の言葉、「なぜ君は孤独なのだ」。佐藤佐太郎の『群鶏』批評号（「多磨」昭和二十二年四月）における「作者が孤独感に住してゐるといふことは詩人の一つの資性であるが、ここから清純な観照も悲哀の色調も生まれてゐるので……」。こうした言葉を引きながら、香川進は書く。

かれは、激しく内に蓄へられた芸術精神を持ちつつ、まづへりくだる。へりくだることによつて距離をうる。距離の上にこころを沈めて観照する。すでにへりくだるゆゑに清純であり、そのやうにしてなされる清純な観照は、やがてみづからの心を洗ひ清めるのではないか。そこに悲しみがある。しかし、それは愛を失つた冷たいものではない。むしろ温い誠実さに満ちたものである。「わたくしは、作品は精神であつて芸を媒体として表現に客観の場を置くものだと考へてゐる」とかれは言つてゐるが、右に述べたやうな意味を持つ孤独の精神がかれの歌の背後にあるのであらう。

そして、「こういう歌人は稀有である。」「憑かれたもののように孤独に徹しきることによって、はじめて孤独の魂は光り輝くのではあるまいか。」とも書いている。

香川進が「愛」などという言葉を使っていることにちょっと驚くが、宮柊二の孤独の底に愛がたたえられていることを挙げ、宮に対する香川の信頼感もまたそこにあるということがうかがえる。

篠弘の『現代短歌史Ⅰ　戦後短歌の運動』には、この頃の宮柊二と香川進との関わりについて、次のように書かれている。

香川進は「戦後短歌への反省」（「短歌研究」昭23・6）のなかで、オリジナリティをもった戦後派の一人として、はっきりと宮を位置づけていた。「近藤芳美、大野誠夫などに比べて、相当古いものを持ってゐながら、しかも宮柊二は彼等とおなじ基盤に立つて新しいものを追求してきた少数のオリジナリティを持つ歌人の一人である」とした。この論文は、近藤・大野という二本柱から、宮を加えた戦後派の三本柱が確認されたものなのである。

この時点では、まだ『小紺珠』が発行されていなかったが、昭和二二年の後半ごろから、宮に大いなる関心が深まっていた。香川は「新日光」第四集（昭23・1）に「宮柊二小論—孤独について」を執筆するとともに、積極的な宮の信奉者となっていた。

近藤芳美・大野誠夫が戦後派歌人の二本柱と見られていたところに、宮柊二を加え、近藤・大野・宮を戦後派歌人の三本柱と決定づけた論として、香川進を評価したものとみえる。ここに引用されている「戦後短歌への反省」の続きには、宮作品六首（「小現実集」五十首から抄出）が挙げられ、宮柊二の「古さを持ちながら新しい」点が述べられている。

寂しくもあるか、といふ風な表現は古いし、そんな表現はどうあるにしろ宮柊二には、どこか私小説的な古さが影さしてゐる。その反面に底のところで短歌の源流に繋がってゐたりして、単純に見えてそのじつ複雑なものを持ってゐる。古さを持ちながら新しい。どこが新しいのか。三十代といふのは、人生の一番大切な十数年間のあひだに、二つも、三つもものから次々にこづきまはされ、その結果、宮柊二のやうに孤独なものを持つに到ってゐるのではないか。それは既に、過去の日本人の孤独とは、余程ちがったものだ。何としても複雑な、いはば根底において愛につながり、しかも一途に愛することが出来ない冷たさを持つ孤独の精神。これがやはり、戦後人間の新しい実相なのではなからうか。さうでなかったら、あのけんらんたりし白秋の流れが、いまさら今の世に、迎へられるはづがない。

ここでも孤独を言うが、宮柊二における孤独は、これまで日本人が持っていた概念とは違った「複雑な、いはば根底において愛につながり、しかも一途に愛することが出来ない冷たさを持つ孤独の精神」であり、そこに新しさがあるというのである。

昭和二十三年一月と六月の、宮柊二の孤独について述べた香川の論は、当時の宮を強く後押ししたことだろう。

「宮柊二小論—孤独について」を読んだ宮柊二からは、さっそく批評された者としての感慨を述べた丁寧な手紙が届いたという。その中には、孤独を通じて、いまさらに、自己を凝視したいという言葉もあったらしい。そうして、昭和二十四年六月の「孤独派宣言」にいたる。「短歌雑誌」に発表するのに先立ち、香川進は宮柊二にその原稿を見せられたときのことを、後になって次のように書いている。

いつもの宮柊二らしくなく、やや気負いこみ、いささか自負に満ちた態度で、わたくしの前に突き出された原稿を一瞥した私は、少なくとも素直な気持ではなく、やや暗然としていた。かれは「孤独派宣言」という。しかし、いったい、孤独というものは「派」をなすであろうか。むしろ、孤独は、それ自体の持つ重みを、みずからささえていればよいのであり、およそ「派」というようなものを否定する場においてはじめて、光りを増すのではなかろうか。（略）

だから、わたくしは、宮の「孤独派宣言」なるものを読まなかった。

昭和三十二年六月の「灰皿」に掲載された文章である。そして、この続きに、自分が「孤独について」などという余計な文章を書き、罪なことをしてしまったという「自責の念に近いもの」を感じたことも書いている。宮柊二の孤独については、香川進よりも前に言ったり書いたりした人はいるし、自分の論が「孤独派宣言」を書かしめたと立証することはできないと承知

しながらもなお、自分が書いたことが全くの無関係とは思えなかったようだ。

およそ、孤独とは何だろう。だいいち、まったくもってあたりまえのことであり、取り立ててあげつらうほどのものではないのではないか。孤独というもの自体、解釈の仕方と態度とにより、ずいぶん意味が異なってくるのであるが、ある種の角度からみれば、およそ、孤独でない作家はない。さらに、人間は、また、自然、宇宙ですら、それが存在するということは、すなわち孤独であるということを意味しまいか。ことさら、なにを、あげつらおうとするのか。

こんなふうに香川進の孤独についての考察は続き、さらに、こんなことも述べている。

わたくしの論は、声調というところから、その根底にあるものとしての、意味内容に進み、和田正洲のいわゆる「暗さの論」まで来た。さらに進めるならば、そうしたものより、もっと本源的には、生命として、一秒の何億分の一にしても、それがゼロ秒でないかぎり、有として捕捉されるそうしたあえかな強いものの持続、——近代の哲学が、いちはやく捕捉しようとしたもの、——それを、惜しみかつ惜しみ、「大事にして」ゆくところに、宮柊二のすべてがあるのではなかろうか。

孤独などというものではなく、「生命としての、あえかな強いものの持続」を、惜しみつつ大事にしてゆくところにこそ、宮柊二の本源的なものがあるとしているのである。「孤独派宣言」なんてするまでもない、しない方が良かったのだと言いたげである。「生命としての、あえかな強いものの持続」を、惜しみつつ大事にしてゆくところ、——それは、「神秘な、生の根源的なものを求めている」ということでもあろう。だとするならば、香川進がくりかえし言い、求めたものでもあった。

「短歌研究」昭和二十四年四月号には、「源流論への一措定——短歌性の問題など——」の掲載がある。そこで、香川進は源流について「短歌形式の確立以来、さらに降って短歌がその発生時代に持ってゐた実用性から解放せられ、文学として独立の生命を持つにいたって以来、かはることなく短歌の奥ぞこを流れつづけてきたもの」とし、「源流をふまへてそこから再出発すべき」と戦後短歌の混乱からの進むべき方向を示している。ここで言っている「源流をふまへた新しさ」という点でも、宮柊二に期待していたわけだが、それゆえに注文をつけてもいた。

新人は、新人であるがゆゑに、源流をふまへつつ、なほ未来を夢みてゐなければならない。この意味で私は、源流派と目される宮柊二君のゆきかたをそのままのすがたにおいて是認することができない。彼等には、極端にいへば、世界観の広さといふか高さといふか——それが欠けてゐはしないであらうか。仮にも、自ら勤労者である彼等が、勤労者のうごきに眼を背けて作歌するといふやうなことがあるとすれば、もはやわれわれは望みを絶たなくてはならないであらう。あのまづい「人民短歌」の、さらにまづい詠草欄のなかに、みがかれない珠のやうに光ってゐるサンセリテ——それは、あへてまたどんなつまらない歌誌の詠草欄

にも、一首か二首は光つてゐる素人のサンセリテ——それと、源流と、たかい広い世界観とが合流するところ、それ以外に短歌の未来はない。

「サンセリテ」とは、フランス語で「真心」のことである。それは、宮柊二の孤独の底にあるものとして言った「愛」とは異なるものと考えたほうがいいのか。よくわからないところがあるが、短歌の未来を言うときに香川進は、サンセリテと源流と、高くて広い世界観を挙げていた。

昭和二十六年四月、戦後派歌人で活躍したメンバーによる合著歌集『新選五人』が出版された。そのメンバーは、大野誠夫・近藤芳美・中野菊夫・宮柊二・山本友一の五名で、それぞれの自選一八〇首が収められた。

後に、新歌人集団、いわゆる戦後派の歌人の歌集で、ぜひ読んでおかなくてはならないものはと石本隆一と小野茂樹に聞かれたときに、香川進は『新選五人』を精読し、各人五首〜十首くらいを記憶しておくんだねと答えたという。(『体験的昭和短歌史』「戦後派歌人と『新選五人』　附　或る日の対話　昭60・11)すると、五人の中になぜ香川進の名が無いのかと問われ、その答えとして、ほぼ時を同じくして定型第一歌集『氷原』が出ることになったこと、それは「新選短歌叢書」という名のシリーズになるはずだったこと、『新選五人』に引き続き『現代短歌十講』の上梓の話があったが立ち消えになったことなどを挙げている。当時の歌壇事情とはいかなるものであったのか。

この附記の終わりには、こんなことも書かれている。

『新選五人』が出たころの或る日、そのころ頂上をのぼりつめつつあった宮柊二がわたしを振りかえるような目をして言った。「ボタンのかけ違いとまではいわない、現に君の『氷原』はぼくが事前に素稿を通読したくらいだから。それにしても君、何していたんだ」わたしは素直に「力がなかったんだろうね」とひとこと。

これを読むと、宮柊二が香川進の『氷原』を素稿段階で通読し、評価もしていたらしいことがうかがえる。また、歌壇の中で日の当たらない側に入りこんでしまったかに見えた香川を気遣っていたらしい様子もうかがえる。このあたり、実際のところはどうだったのか。歌壇における明暗の境がくっきりと二人の間に見えた瞬間があったのかもしれない。

ここで、昭和二十年代の宮柊二の年譜を見てみよう。

昭和二十一年十一月　『群鶏』刊
昭和二十二年　一月　新歌人集団に加わる
「多磨」の選者になる
昭和二十三年　十月　『小紺珠』刊
昭和二十四年　四月　『山西省』刊
十月　香川進と超結社の新鋭の集まり「泥の会」を作り、支援する
十一月　「神奈川新聞」歌壇の選者になる
昭和二十五年　三月　編者の一人として参加した日本製鉄の職場歌集『鉄をつくるものの歌』刊
昭和二十六年　四月　合同歌集『新選五人』に加わる
六月　『晩夏』刊
「多磨」廃刊決定
昭和二十七年十一月

昭和二十八年　三月　コスモス短歌会創設
「コスモス」創刊
四月　角川文庫『宮柊二歌集』刊
十月　『日本挽歌』刊

戦後の混乱期にあって、立て続けに歌集を五冊も出版できたのは、時代からも求められていたということだろう。新聞歌壇の選者の依頼や、いち早い歌集の文庫化なども、その証であろう。勤務先の職場歌集の刊行は、勤労者のうごきに眼を背けてはならないと言った香川進に応えたものだったか。「多磨」廃刊の決定から、「コスモス」創刊に至るまで、戦後の宮柊二の、歌人としての着実な歩みに目を瞠らざるを得ない。

これに対して、香川進はどうであったか。

昭和二十年　『構築』を編む（未刊）
昭和二十二年　前田透・伊能秀記らと「詩歌」を編集
新歌人集団に参加
昭和二十四年　十月　寓居に釈迢空・前田夕暮を招き、宮柊二『山西省』の会を開く
昭和二十五年　「詩歌」の存続について、透が継ぐべきと結論
昭和二十六年　四月　前田夕暮、死去
昭和二十七年　一月　『氷原』刊
昭和二十八年　五月　「地中海」創刊

「短歌研究」等にさかんに論を書き、歌人たちとの交流を積極的にし、「詩歌」存続のために奔走したが、歌集は『氷原』一冊のみ（『構築』は未刊）。私生活では、財閥解体、新会社創立、倒産、更生をはかるも解散。戦後の香川進の活躍ぶりにも目を瞠るものがあるが、それは歌人としてよりも実業家としての方が上回っていたのかもしれない。それに、口語自由律から出発し、夕暮の定型復帰を受け容れ、戦中を一から文語定型を学び直すことに費やしてきた香川進である。戦後になっても、自らの短歌を確立するための試行錯誤は続いていた。さかんに論を書いたのも、書くことによって自らの短歌の方向を探っていたのではないか。歌人としての香川進の戦後の出発は、遅れざるを得なかった。戦中も「多磨力作賞」を得るなど、自らの短歌を持続して作ってきた宮柊二とは、おのずから大きく差が開きもしたのだろう。

昭和二十四年四月号「短歌研究」の論、「源流論への一措定―短歌性の問題など―」の終わりには、「源流をふまへた新しさ」「体験より実存へ」「直観より普遍へ」と並べてきて、最後のひと言は「むつかしいことだけれど」である。難しいことだと承知しながらも、現代短歌が生きかえり、円寂することなく生命をつなぎうる方途は、それよりほかにないと述べている。昭和二十七年刊の『氷原』は、昭和二十年代に出版した香川進の唯一の歌集だが、歌人としても、ひとりの人間としても、苦難に満ちた戦後の集大成となる一冊であった。

「それにしても君、何していたんだ」と言った宮柊二に対する、香川の「力がなかったんだろうね」には、口惜しさもあったかもしれないが、存外それは、言葉どおりの素直な気持ちだったのかもしれない。

昭和二十四年十月、宮柊二の年譜には「香川進と超結社の新鋭の集まり『泥の会』を作り、支援する」があり、香川進の年

譜には「寓居に釈迢空・前田夕暮を招き、宮柊二『山西省』の会を開く」があることが、二人の繋がりのあり方を思わせる。

＊　＊　＊　＊　＊

宮柊二が香川進の『氷原』を素稿段階で目を通してくれたことは、「コスモス」創刊30周年第一記念号（昭和58年3月号）に寄せた香川進の「宮柊二の言葉補遺」にも書かれていた。

歌集『氷原』が出ることになったとき、柊二は事前に僕が目を通しておこう、と丹念に読んでくれた。」ただし歌をなおしたりはしないよ、と思想上の一貫性に欠けているところ二、三を指摘してくれた。

というのである。歌集の素稿どころか、そのまえ毎月香川が発表する歌は全部読んでくれていたこと、宮が言ってくれた言葉も大切なものとして記録している。宮柊二の言葉、「この『蔵王山の歌』ここで香川はようやく自己のゆるぎない本質に到達した。ただそのごの『北海道の歌』このようなところに溺れないでくれ。終戦前後の作品から君がどこに展開してゆくか注意ぶかく見守ってきた。」。

十年近く文語定型歌の修練を続けてきた香川にとって、この宮の言葉はどんなに大きな励ましとなったことだろう。その当時、「詩歌」の異色歌人ということで、外に向いても積極的に発言していた香川は、格好の攻撃目標とされ、東京歌話会でも歌集『氷原』の批評会でも集団的批判を受けたらしい。だが、そうした中にあっても宮柊二の激励があったことを、「後進指導の典型となるとおもうので、私事ながら書かせていただく。」と香川は書いている。

もう一つ、宮柊二について書いている文章を紹介しておきたい。『人間放浪記』の中の「106　歌人c」より。

宮柊二を歌人として畏敬するのは、かれの才能についての論は別として、ともかく夫婦して、歌に生活のすべてを投入していることに頭を下げるからである。「君は、歌と生活と背反したとき、かならずといっていいほど、生活のほうを重んじるではないか。」と、柊二はよくわたしをなじった。十幾年もまえのことであったが、そんなとき、わたしはみじめな気持で、体重五十キロぜんごの宮柊二のまえに、こうべを垂れたのであった。

「歌は業余のすさび」などとは思ってもいないらしい宮の歌人としての姿勢、さらにそれが「夫婦して」であること。宮への畏敬の念は、その才能のみならずであったことを明かしている。『人間放浪記』は昭和五十七年七月の発行だが、この文章の初出はもっと前であるようだ。

オリーブ集

岩里周英　銃後の小五　・地

芋飯の凍りて箸も立たぬ畑小五二人の勤労奉仕
藁草履手袋もなく泥稲田勤労奉仕よ銃後の小五
ひ弱さを自覚しつつも吾もまた予科練志願を口にする日々
ラッパ手の同級生を羨みて隊列正す号令かける
乾パンの小さき包みは貴重品勤労奉仕の稀のご褒美
非農家の子供の非力を嘲笑れつ出征農家の稲刈り奉仕
肉刺つくり稲刈鎌で苦闘せし疎開児童の彼今如何に

植田和子　遠き歓声　・大

神幸祭の神輿・山笠・屋台の匂い石炭景気に沸きしは遠き
男らに担がれ神輿は川を渡る遠き歓声聴く風の町
石油へと時代は変わり筑豊の空に二本の煙突残る
近代化遺産と銘打ち煙突はかつての賑わい静かに伝う
石炭を満載貨車の駆け抜けし戦後復興を担いたる駅
黒々とボタ山ありき半世紀の時は流るる車窓の町に
青春とつぶやいてみるこの町にふたたび降り立つ事もなからん

梅本武義　うり坊　・羊

道の辺を掘る猪に残されて彼岸花咲く限界集落
人よりも猪多く里道をうり坊連れ立ち昼もうろつく
棒を持つ老いの気魄にうり坊の逃げる速さよ三歩ほど追う
古稀はまだ若者扱い産土の清掃しつつ山鳩を聞く
秋ジャガを植え終えたれば一息に妻は麦茶を我は麦酒を
病院に行かず臥す妻自動車無き昭和の浮かぶ置き薬飲む
腰伸びず歩くが猿に似ておれどまだ十年は生きねばならず

片岡邦子　時を待つ　・夢

過ぎ去った時間を思うこの時も過ぎ去ってゆく二人の時も
同時代に巡り会いたるだけのこと空は大海いわし雲くる
右手より少しやわらか掌の気になる生命線ながながとあり
良きことのみ話せと遺す姑のノート開けば又も恥ずかしくなる
どんな花咲かせるのかな身を屈め時を待つという球根埋める
海からの吹き抜ける風に立ち竦む駅前交差点信号は青
待望のフジコ・ヘミング演奏の旋律うかぶチケット届く

金澤敦子　十五夜　・湾

三十キロの玄米贖い安堵する震災以来の備蓄のおもい
穏やかに今日のひと日を終えんとす未知なる明日へと米を研ぎつつ
言問えば曖昧にする気まぐれも楽しみゆかん母との会話
ひたすらに「そうね」と頷く事もよし老いゆく母の笑顔に会いて
低き枝より蝉はひっそり発ちゆけり七日の世界を見んと声あげ
十五夜のすすきに小菊を添えながら予報どおりの雨雲見上ぐ
私にもありし日ありと少女らのはずめる声の造語聞きいる

河上悦子　秋　・昴

引出しの奥に見つけたリコーダー指あててみる秋の昼下がり
リコーダーの裏に彫られた次男の名三十年を経て新品のよう
次男の名の楷書で彫られたリコーダー母が吹きます「少年時代」
見上げれば雲ひとつない今朝の空柘榴の実の赤　父母の頑固
柘榴の種ひと粒ひと粒が光っている父母の頑固いよいよに増し
いよいよに弾けてきた柘榴の実父母の頑固　わたくしの頑固
我が親の愚痴をこぼしたい秋の日　リコーダーを吹いています

国原喜美子　隼人瓜(一)　・昴

生る姿知らず求めしハヤトウリ春夏秋とつる伸び葉繁らす
「今だ」とばかりハヤトウリ小さく白き花あまた咲かす十月なかば
すずめばち一匹のみが次々とハヤトウリの花おとなひゆける
小さく白き実ぶらりぶらり　ハヤトウリ果柄細くて心許無し
実るころ育て方食べ方調べをりハヤトウリの実おかずにせむと
夕闇に白き瓜の実浮かびゐるを見届け畑の囲ひを閉づ
透明の手まりに描きし模様のごと花満開のつはぶきの黄

窪嶋次江　初冠雪　・相

秋天に初冠雪の富士の見え即位の礼の翌日の朝
自宅から初冠雪の富士に向け平和を願う令和の時代
八十年航海終えてドック入り数分刻みの検査案内
即位礼報道特集くり返す画面に見入る呼名待つ間に
道の駅五種の塩辛味見して実家の姉に中辛決める
若き日の細めのスーツ捨てられず仕立ての良さを夫と語る
仕立屋の従弟の逝きて二十年夫のメッシュ未だ健在

甲田啓子　炎夏　・天

「手は動く」言いて我が句を短冊にしたためくれぬ胃瘻(いろう)の友は
待ちかねし初秋の風の吹き来たり長病む友の快気をいのる
不具合をかこつ師よりの夏見舞どうぞ無事でと拝礼したり
百歳(ひゃく)ちかき師の鍛練を聞くにつけ為せば成るとの真実おもう
この辺の土手のススキは姿消し今を盛るやセイバンモロコシ
夏づつみカラムシ風にあおられて葉裏の白の花群あるる
羽黒とんぼひらりひらひら小川とぶかくも身近き幽玄世界

小宮山玉江　栗の笑み　・羊

栗の毬笑みの形に開きたり弾けむばかりのその実抱きて
抱き合ふごときの栗の実笑みて落つ明日は拾はむ朝露踏みて
風に落つる栗に背中を打たれたり意外に固し背打つ栗は
恒例の栗こは飯をつくらむと皮をむくなり夜なべをかけて
当然のごとくに孫子ら集まりて「来年もまた」　老いの気をただす
言葉なくテレビに見入る千曲川声なく息のみすべなき祈りを
石段を登りて眺むる千曲川魔の濁流は夢のごとしよ

設楽まゆみ　・羊

訣れ

玄米もフコイダンも効なさず巣食いたる癌一枚上手（うわて）
新薬を最期の希いに縋りおり君の生命のはかなくなりぬ
この秋の紅葉を見ずに逝く君か十月三日の真夜のさ中に
我ちかく帰り来し君の亡骸はホールに鎮まり通夜の香薫（た）く
憂いなく旅立つ君のかんばせの視線の先に我独り居る
忘れえぬ思い出に顕つ面影のあまた溢れてまぶたを瞑る
遠雷はかすかに響き物影に終いの言の葉「さろうなら」と

柴田登志恵　・天

あかときのほのかに白き酔芙蓉今し海面へ月沈まむとす
おそらくは終の入院と伝へ聞き残暑の真昼一気に弱る
ほんのりとうすくれなゐの酔芙蓉遠くから聞こゆ正午のチャイム
夕暮れに帰り来たらば酔芙蓉くれなゐ重く花傾ぎをり
酔芙蓉紅深きころ電話あり病みをりし女逝きたりと言ふ
誰そ彼に色褪たけく閉ぢゆける酔芙蓉なり一世を生きぬ
花を閉ぢ濃き桃色の酔芙蓉天心の月照らしゆくなり

庄野ひろ子　・習

失せし秋

アルバムより秋の写真の失せたるは紅葉愛ずる人失せたれば
冷蔵庫に貼られそのまま色褪せし母のレシピを作る人なし
今更に親の仕掛けしトラップに気づけどデリートする術もなく
ほのほのと湯上がりの肌より立ち上る薔薇の香りをしばし愛しむ
わが愛は行き着く先を知らぬがに甘くおぼろに虚ろに囁く
ともがらの仔ヤモリ一匹秋冷えの朝に果てており仏壇のもと
秋の陽を背に受け微笑む人のありコスモス揺るる写真の中に

杉原令子　・春

彼岸花

彼岸きて彼岸花咲く律儀さよ土手のあちこち赤赤そまりぬ
用水路ぞいに咲いてた彼岸花つきるところまで行って見ようか
この年は彼岸の花もちらほらと真赤に咲いたあの頃が最後
彼岸花ポキポキ手折り首飾り作りてたのし　昔　むかしよ
いつまでも花を咲きつぐ朝顔に今朝も少しの水そそぎやる
街路樹の桜古木がざわざわと思わぬ強風に散りはててゆく
紅色の夕日はまわりいちめんを染めゆきて今日の終りを告げんとすなり

鈴木文子　・萬

即位礼

街中に金木犀の香り満ち天皇即位の礼始まりぬ
高御座に即位宣言する陛下凛と御声の透き通りたり
来賓を陛下のかたへに出迎へる皇后さまの美しき笑み
暮れゆける空に三日月ひかり初め街つつみゆく秋の夕焼け
宅配の青年コロンの香をまとひ泥つき里芋届けてくれぬ
ゆく秋の朝のニュースに息をのむ首里城炎に崩れゆくさま
ああ夫の術後の眼に秋の星とほく静かにきらめき見ゆと

高原桐　・森

令和はじまる

わが人生晩期のけふの暑さにも親しみこめて庭に水打つ
枝ごとの紫蘇の実かかへ帰り来し彼の日の母がしばしば浮かぶ
金木犀・びは種（だね）・しそ葉焼酎に漬けしが瓶に黄金色なす
つる草の名を知らぬまま瓶に差し名のなきままに瓶に枯らしぬ
日々のこと世間の動きよく見える慎ましく又無欲にあればこそ
ことぶれの穏やかならず令和元年の超大型なる台風の雨
暮れぐれにいよよ寂しき秋の庭小さき椿の花芽数ふも

中川冨美子　堂の灯　・浜

ゆらめきの無き堂の灯は電球と本堂の中にも時は流れて
三十戸あまりの門徒に守られる二百有余年本堂は立つ
複雑に組み込まれいる本堂の天井の木組みにしばし見蕩れる
離れたる勤務先より週末を帰り寺守る住職労し
亡き祖父の植えたるポポーの青き実は丸々ふとり秋を待ちいる
かつてなき暑さといわれるこの年もポポーはぷくりと丸き実あまた
珍しい果物らしいポポーの実青き葉かげに守られ熟れゆく

中島彰代　人生の鞍部　・春

いくすぢも遥かの森へ誘ふ道車窓は暮れて闇に消えゆく
道と見れば歩きたくなり止みがたく途中下車して歩きし日あり
ハンドルにケンケン乗り禁止の札さげてわが自転車の修理済みたり
自転車にゆらりゆけば左右の田に挙り飛び込むキチキチバッタ
鬼やんま往き戻りするこの径に吾木香一株盗りしはわたし
ラグビーの日本代表異邦の人も声揃へ歌ふ「千代に八千代に」
人生の鞍部と見ゆれ病院の待合室に人ら黙して

中須賀美佐子　道　・昴

小首かしげ畑の土をつつき出す一羽のからすをベランダから見る
正面に夕日を見ながらあるく道五年ぶりにかえる道なり
損か得か考えかんがえ歩きいてふっとつまずくマンホールの蓋
かたわらに眠る夫のせわしなき息がしだいにいびきと変わる
息子が住む街へとつながるこの線路上りのホームに秋風が吹く
ビルの間をうなる風の音虫が鳴くどこかしんとめざめいる夜
処方されし薬のちからに助けられちぐはぐになる自分を見守る

永田進一　洛南散策　・凌

御香宮名水巡りの道たどる戊辰の戦しのぶ弾痕
桃山の地に明治天皇陵あり近づき難き威容のなかに
行き行けば御陵の間垣下草の薄紫の花の繁れる
小雨降る伏見稲荷へ外国の修学旅行生らスマホ翳し行く
寺田屋に野風呂の句碑立つこの夕べ植え込みのなか蝶の安らう
酒蔵を改造したる酒舗ならむ大き卓上に銘酒サンプル
荒れ果てし城の敷地に盗人萩蔓延りおりぬ天下無敵に

中村恭子　月下美人　・洛

漆黒に大輪浮かぶ写メ届く月下美人が咲きましたよと
亡くなったお母様から引き継いで十五年ぶりの開花とう花
満開の月下美人の妖しくてスマホ画面に芳香放つ
スマホに咲く月下美人の白い花誰彼となく見せ悦に入る
闘病や父の介護のあれこれと併走しつつ二年を超える
なんとかなると想い暮らせば本当になんとかなって閑かな時間
電気消し自然光のなか気に入りの珈琲たてる穏やかな午後

中村博子　大塚国際美術館　・漣

秋晴れに弾むさやかな京都駅悠里に誘われ集うバスツアー
紺碧の明石海峡一跨ぎ　淡路島から鳴門の美術館へ
美術館地下三階の玄関へ吸われて長きエスカレーター
システィーナ礼拝堂を描き終えしミケランジェロは仰向きしまま
天井画間近くせまるバルコニーにミケランジェロの絵筆の動きや
火山にて埋没したる古代都市ポンペイ壁画のあざやかな赤
七つ並ぶゴッホの「ひまわり」焼失せし陶板画を悠里土産に選ぶ

西田江美子　桜梅　・宙

仕舞い囃し夜の静寂を風にのり名残かなしきわが街の秋
別れのごと季節はずれの花咲かせ桜梅ひと本末枯れゆきたり
庭一面香りはなてる金木犀しばし憩えとつぶやきかける
功労賞、受けたき程に衰えし足裏を時かけ丁寧に揉む
夢のような月夜の庭に熟れそめし柚子の実ほのかに香りを放つ
整理するタンスの中に鯨尺、私の袖丈一尺三寸
ひさびさに茶粥を炊きて仏前に喜ぶ夫の顔なつかしむ

根岸亮　群れる　・湾

霧しとど満ちればミルクの海に佇める君かと想う朝の岸辺
「さあ鰹、鰹いらんか」朝焼けの潮に紧まれる声は触れ合い
俊足の鰹の血の気を想おえば向こう見ずなる群れの目玉よ
他になければ群れて生くるを選びたる人間もまた習性を持ち
読むにさえ細胞にやさしく満ちるべし。歌の酸素を知らずに私は
人の死と散りゆく桜に立ち合うは同じと言えば何かあらんか
大泣きののちに静けさが少しずつ戻って来たのか妻の昼過ぎ

八田暁美　時は今　・羊

歌会の続きとなりて友と吾宇治金時の氷は水に
咲き納めとなるを知らんや百日紅はなまりふくふくふくらみゆける
檜扇の種袋はじけ射干玉の粒つぶ瞳庭を見張らん
一本の早咲き桜のも早やさくそば辺のさくらまだ紅葉せず
舎利殿の擬宝珠に烏のとまりおりもしやもしやの三本足かも
「もう投了」覚悟の終盤見つけたるどんでん返しの一手に震う
時は今　望める事はすぐ為すべし残る時間はそう持ちおらず

濵田みや子　執念　・海

悔いのなき一世なりしか声果てて余光の土にまろびゐる蟬
繰かれたる毛虫の汁の乾きゐて悲しむ者を持たぬしあはせ
大粒の種無し葡萄が喉とほる核なき時代が来るかもしれず
冷蔵庫の鳴りつづく夜も独り頬が吸ふ涙だけを流さう
散歩の道に拾ひ蒐めてポケットに入れたる詩語の行方は知れず
言ふべきを言はず饒舌の人去れば庭の木犀匂ひはじめぬ
やはらかに空気震はす雨の夜半執念のごとく歌筆をにぎる

深井喜久代　雨　・信

しとしとと雨ふりあを実ふとりゆく豊後梅はも梅雨のめぐみか
くれなゐの華やぎみせし庭のバラ萎えてかろがろ風にふかるる
水無月の風うすみどりアナベルの大き花珠なでてすきゆく
なつつばき一樹はな満つしづけさに枝をはなれて散る花のあり
夕立のしとどなる雨廃屋の樋なき軒を垂直に落つ
友の死をなげきゐたりし友逝けり雲のゆくへを眼に追ひぬ
日毎咲きしごと散りゆく夏椿いまあまた実に一樹しづまる

松瀬トヨ子　昼下がり　・沖

照りもせず降りもせぬ夏の昼下がり芙蓉の花の色変りゆく
子がいてもいなくとも寂し老人の呟く声が密かに聞こゆ
消費税・物価の値上がりに戸惑いぬ窓に見つむる朝やけゆうやけ
家々の垣に溢るるありあけ蔓てだこ浦添の花黄金
厨より香り立たせて子の作る今日の夕餉のサイコロステーキ
普天間基地・嘉手納基地・辺野古の基地移転さながら癌の移転の如し
陽だまりに散り敷くピンクの百日紅踏まずにおりぬ掃かずにおりぬ

餅井辰視　もうすぐ冬だ　・羊

食い残しは冷蔵庫に入れるなと妻の悲しき顔に向きて言う
来たよう!と末の娘はやって来るこの子よい子お小遣いも呉れる
たまに来てあれこれ指図する長女この子怖いよ食えと迫り来
われの居を確かむる妻の声細しひっそりとわれは外に出で行く
体調の今日は良き日起き上がり髪梳く妻は手鏡持ちて
帰り来る鴨の親子を妻と待つ町川の堰遠く聞こゆる
眠らざる妻の一夜を知る故に今朝は柔らかな梅がゆ作る

安部律助っ人　・湾

雨上がりわれの散歩のみちづれか青葉の陰に囀る小鳥
浜の子の遊びでありし天草採り残像するりと心太を食む
夏休み子らと遊びし泉ヶ岳秋あかねそっと麦わら帽子に
暮れなずむ秋空描くはオーロラかもうす紅色の雲を刷きつつ
明日よりは十パーセントの消費税にささやかなれどティッシュ買い置く
ついにかと回転寿司に聞きおりぬAIベッパー君の「イラッシャイマセ」
やがて来る老いの暮しの助っ人ならん人工知能のロボット達よ

有馬さと子　「帰りたい」　・大

車椅子に力なく背を丸めいる特養施設の老いたる人ら
「帰りたい」家族に言い得ず諦めもとうに過ぎゆき「今がしあわせ」
入居後は外出はなく歩行せず老人の脚みな萎えてゆく
父母やふるさとのこと話す時パッと明るく童となれり
聞けず見えず話せず百歳もういいと菩薩のようなおもざしになる
認知症の人を詠みたる歌はなし馬場あき子にも俵万智にも
われもこうなるのだろうか一抹の不安抱えて傾聴ボランティアする

石塚貴美恵　干し柿　・地

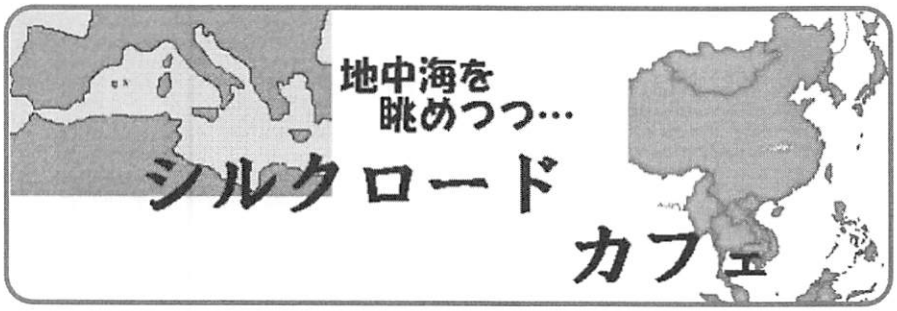
後戻りするのもよしと思うとき金木犀の返り咲くとき
軒下に吊す干し柿八十個日の暮れ時の空気が包む
小さめの秋刀魚の値段に躊躇して棚の辺りを行ったり来たり
暖房のほんわりとした診療所待合室で舟こぎ始める
令和元年の残された日は消えてゆく紅葉は赤く染まり始める
暗闇の静寂を裂き雄鹿の絞った声の淋しく響く
ひとりきり秋の夜長もまた楽しい栗柿蜜柑かたわらに置き

岩井久美子　秋の朝　・昴

後ろより猫走りくる朝の庭金木犀に鳥の鳴く声
雨上がり肌寒き風さっと吹く秋の朝日の明るき庭に
はらはらと朝露落とし真白なる秋明菊はすらりと立てり
雨上がり光さしくる朝の道名を知らぬ虫わっと鳴き立つ
鉄の柵大きくゆがむ事故の跡峠の道におみなえし咲く
秋の昼郵便受けに若き日の友より届く葉書一枚
三色の灯をともしつつ飛行機は月なき空を西へと進む

三木まり　半月　・昴

からすうり化咲く闇の深々と魂ひとつが入りて還らず
くっきりと半月の銀耀けば北北西の風の一陣



メールの投稿で作っていくページです。このQRコード（四角いバーコード）を携帯電話のカメラで読み取ると、携帯電話から投稿できます。専用メールアドレスは、silkcafe715@yahoo.co.jp　です。お葉書でのご参加も大歓迎です。木村自宅へお送り下さいませ。

月の沙漠の銀のくら

地中海十月号からです。梅雨時のお歌が多くみられました。

C欄　～好奇心旺盛に～

昨日今日に葉を食み尽くし山椒の木に育ちいる虫に驚く　芦田　房子

託児所と介護施設の事務所増えわが街も少しずつ変りゆく　安藤　清子

肩先にたんぽぽの綿毛ふうわりとそっとつまみて息を吹きやる　石田　安子

報道であなたの百歳知りました共に滑った蔵王のざんげ坂　大塚　幸子

どんど焼き焙りし繭玉もち帰り健康祈りて家族で食す　唐澤美恵子

たっぷりと雨を含んだ梅雨の間青葉をぬけるさわやかな風　髙辻　幸子

アルバムの若き日の父は笑いおりモノクロームの光の中で　原澤　吟子

爪切りで傷めし親指いたはりて赤き鼻緒の下駄涼しかり　平尾はるみ

電話にて地震の状況訪ねたり「何事もなし」元気なる声　間野　春美

夜濯ぎの竿越しに仰ぐ鈍色の空に今宵は二等星見えず　丸山　修

B欄　～じっくりと観察して～

止んでいた雨足なのに夜になり雨音激し心を乱す　伊波千賀子

かたばみとはこべ溢るる植木鉢はな苗ううる五月にやっと　大槻　泰子

裏庭の蹲踞に遊ぶ雨蛙友待ちいるか今日は梅雨入り　岡野　恵俊

この家に嫁してわれのみ生き残りあらゆる事が吾を撃ちくる　片岡カヨ子

窓の外木立ちの中にさみどりと深みどりあり自然を楽しむ　金子美智子

大寒にひらり舞いたる雪片は母の逝きたる日を想わせる　神戸　良三

何故に心ひかれる野の花よやがてしおれる命の様まで　熊谷とも子

七歳の男孫と諍いしままなれば心のほころび縫う針の欲し　紺野　紘史

あじさいの今年の色は白多し長雨つづく空を見上げる　酒井　綾子

きみどりの傘で散歩す九歳のわたしになって雨を聴くため　宍戸千佳子

太陽は見つけられまい大楠の下の芝生で寝ころぶわれらを　辻田　聡美

指示通り投票終えて外みれば園の草木に薄日がもれる　西川　正子

独りでもやるべきことを貰けば叶えることの多きことあり　本郷萬次郎

肩呼吸が下顎呼吸にかわりゆき母は海へと行く道さぐる　藤田しん子

採れたてのトマトのへたのあおくさし子供等ラジオ体操へゆく　丸山紀代子

兄二十歳出征ちかき床の間に太刀を飾りぬ昭和二十年春　安田　明子

仕事後の重い心でペチュニアの花がら摘みぬ梅雨明け近きか　柳澤　君子

梅雨空に朝顔の蔓伸びざかり赤児の育つ勢に似て　山之内香代美

夫逝きて早や十年の夏となり残されて生くひと筋の道　山田　英子

しんとして微風さえなく大雨の去りしあしたは真空のごとし　やまもとしず

珊瑚マスターの包み焼き

今月もご投稿をありがとうございました。

お題「孫」へのご投稿

◇高熱で京大病院に入院す悪性腫瘍と　孫の病気は　山田　珠美

ばあちゃんと駆け来る孫はもう青年頑張り生きる闘病中でも

振り返りばあば、と呼ぶ声嬉しかり二人の孫は青少年に

◇松茸という言葉を覚えし孫娘空想のなかで松茸を食べる　独楽

◇すくすくと伸びゆく子供の脚みればわれにも一人の孫がほしき　香川　進『山麓にて』

〝村〟で暮らした時期、作者の周りには村の子供たちの姿があったようだ。喧嘩したり木登りをしたりする子供を見て、大らかに素直な心情を詠っている。脚みれば、に実感がこもる。　(A)

次回のお題は

①「乗り物」を詠う

②「自由題」と致します。乗り物は、地下鉄やタクシーや新幹線でもよろしいですし、山手線、丸の内線、のように特定してもかまいません。今回の山田珠美さんのお歌のように、連作のご投稿も大歓迎です。〆切りは、特に設けておりませんので、いつでもお送り下さいませ。お葉書の方は、木村文子自宅宛お送り下さいませ。ありがとうございました。　【店長　木村文子】

ゆうらんきこう 13

みち・今思うこと

定金　崇恵

私の短歌には道や径を読んだものが多くあります。辿ってきた道、家族や友人とつくりあげた思い出の道、故郷や旅に出会った径など振り返ると私を育ててくれた道が重なり続いています。

なかでも大学時代に歩き始めた山への道は、私の人生を長く左右してきました。東京近郊の高尾山や丹沢から始まり、谷川岳、尾瀬、剣立山、北アルプスへと高度やルートも広がりました。残雪の春山やスキーにも楽しみを見つけました。ゲレンデには忘れられない失敗談があります。子供たちが雪の上に小さなこぶを作りジャンプして遊んでいました。私も仲間に入り小さなこぶに挑戦しました。体のふわと浮く感覚は宇宙にとび出したみたいで気持が大きくなります。調子に乗って飛んでいたら肩から落ち鎖骨を骨折しました。子供たちの前で恥ずかしさと痛さでいたたまれない思いでした。山で出会った花々や樹木を通りぬける風の音、鳥の囀りなど彩り輝く山の幸せにつつまれます。もちろん自然の苛酷な厳しさも学んできました。

社会に出て、教職に就きました。私の心をしめる山の魅力を生徒たちにも伝えたいとワンゲル部をつくりました。創部当初は設営の道具や備品もそろわずハイキングや飯盒炊さんを楽しむ程度でした。山の湧き水でお米を洗えば山椒魚の稚魚が泳いでいたり、定番のカレーづくりに生徒の個性が見られわいわいと食べる味は格別でした。少しずつ部活動も軌道に乗り、合宿や他校との交流を通して山の道は深まっていきました。

今年の夏も年代の異なる卒業部員の二つの集いがありました。女子校なので女ばかりの気のおけない会です。しかしいつも話題は一緒に歩いた山の思い出で盛り上がります。登りの苦しさの後には、頂上の喜びがあり、テント生活での食事やおしゃべりなど、そこには教師も生徒も生のままの姿を晒していました。こんな部活動も学生時代の心の支えの一つになっていたのでしょうか。卒業生たちは職場や家庭で居場所を作り、育児や介護も逞しく乗り越えています。大地に根をはった彼女たちの今をうらやましく感じることもあります。

山で出会った花は、カメラの道につながりました。至仏山のウスユキ草・タカネバラ、白馬の駒草、鏡平の黒ユリなど初めての出会いは息をのむ感激でした。高山植物は穫って帰れないので、園芸種を求め季節の訪れとともにわが庭にカメラの活躍する場を得ました。カメラ仲間との交流は新しい道の始まりです。散歩の途中アオバズクとの感動の出会いもありました。栴檀の木の下に寝ころんでアオバズクの子育てを追いました。敵から子を守る母鳥の強さが望遠レンズの中にありました。こんな一枚に故郷の自然を大切に思います。

また地中海の〈写真・歌合わせ〉のように地元鴨方町の写真部と短歌部のコラボによる展示もあり、二つの道が交わる楽しさを実感しています。

ワンゲル部卒業生の会を終え、彼女たちの晴れやかな笑顔を見るにつけ、私の刻んだ足跡も続いていると嬉しくなります。

これからも新しい輝きを求め私の「みち」を捜したいと思う今日今頃です。

歌壇月旦

類想・自己模倣を越えんと

槍垣美保子

205

ひとつの問いがなげかけられ、複数の文章で構成される「特集」や「特別企画」には、執筆者のそれぞれの切り口をみることができる。それは、自分自身に引き寄せて問い直すきっかけを持つことにもなる。

「歌壇」9月号の〈特別企画◎類想・類歌を避けるために〉は、しばしば直面する悩ましい問題なので、興味深く読んだ。

その中の一篇、磯田ひさ子さんの文章。その結語は次のように結ばれている。

〈独創的な歌を詠める人はいいのだが、多くは同じようなものに感動し、同じような発想をしてしまうのが常である。その時、立ち止って推敲を重ねる努力をすること。それには、時間と体力が要る。特に体調が悪いと、踏ん張る気力が衰え安易な表現で妥協してしまう。まずは体力である。しかし、体力のない人がみごとな作品を次々詠める現実もある。知の体力も必要なのだろう〉

頷きながら読んだ。たしかに、身体的、また、知的な体力まで含めて、作歌はエネルギーを要する。そして、歌はエネルギーをはらむものだと思う。

目の前の風景に、いにしえの歌やだれかの歌がふとよみがえるように浮かび、それを重ね合わせて、ゆたかなものを感じながら、その情景にひたることがある。それは歌のもつおおきな力だとおもうし、そうしたたくさんの歌を自分の中に持つことは、しあわせなことだともおもう。

一方、自分がどこかで感銘をうけ、無意識にその歌の発想の薄紙をかけて、目の前のものを見て、自分が感じたとおもって、一首をつくることもあり得る。同じような場面に遭遇したり、おなじような景色を目の前にして、おなじようなインスピレーションを受けたりおなじような感慨をいだくことはあるだろう。同じようなであって、同じではない。

とすれば、どうするかという答えを執筆者のひとり、山中律雄氏は、〈「類想・類歌」にあっては、心の中にその疑念が生じた時にはすべて捨て去ること。「類想・類歌」を減らす方法である〉と。これほどの、きびしさをもちたいが、類想や類歌は捨てるという意志や覚悟と同時に、言葉は、誰かの所有物ではないから、言葉と言葉の関係性によって表現する、その試行錯誤に苦しみ、表現を深めたいとも願う。

沖ななも氏の「●総論●鹿の角の産毛を見たか」は子供の発想、子供の短歌、子供の言動や感覚を取り上げたのち〈つまりは周りの大人たちによって、知らず知らずのうちに自分本来の感性を見失っていくのではないか。いつのまにか他者の感性がインプットされてしまう、学習をしてしまうのだ。社会に生きるためには必要なのだが、歌を作るにはそれが邪魔になる〉と述べ〈写実といっても、写実的に表現する必要はないが、観察して、ものの本質を知り享受する、そのうえでの表現方法はそれぞれ個人の方法に依るべきだろう〉と。

以下、順にタイトルと執筆者名のみを。

「類歌と読まれぬための表現意識」足立敏彦、「時間と体力」磯田ひさ子、「学ぶ、観る、工夫する」香川哲三、「繰返しということ」上條雅通、「他者とは違う自分を意識する」河野小百合、「〈私の思い〉を〈私の言葉〉で」高尾文子、「独自の発想を！」松尾祥子、「捨て去る」山中律雄。

固定観念を取り払い、「立ち止って推敲を重ねる努力」をし、表現と格闘する以外、そして、作り続ける以外にないようだ。

作品B

（ハ行）

西川正子　信号　・宙

早朝の空気ひきさく特急の警笛さえも秋を告げゆく
会うたびに笑顔少なくなる人に手を添う人の背のうすきこと
信号の所でつまずきおっとっとこういうところ必ず誰か見ている
玄関の壁にびっしり亀虫が台風去ればどこへ消ゆるか
花多き住みよき土地をまたひとり車手放し友の去りゆく

石田明彦　タクシー日誌（四十七）　・岡

美しきイーハトーブの雲を見る気象館通りの沖の遥かに
客の吐瀉物拭うわが辺にシジミチョウ耀きて舞い暫し手を止む
忘れ物の財布に付けられし小仏に心斯くあれと交番目指す
不機嫌なる乗客なれど不意にして会話始まる「おや雨ですか」
田舎道にグーグルの地図拡げても限界集落の嘆きは載らず

丹羽哲也　主義をつらぬく　・森

学食の席にあふれし集会は街頭デモに行動うつしき
道をうめジグザグ走りし抗議デモ大学の不正世に通じしか
穏健な学生会に他学から過激派入りわれ等離れき
アルバイトしつつ学べる友のいし主義をつらぬき故郷へかえりき
われ等より若き顔せし機動隊罵詈雑言に顔色かえず

岩月宏彦　感知器　・宙

実り田のあぜを歩けば懐かしき小学校の稲刈り休み
あわだちそう今が盛りと咲き誇り里の祭りに色どりを添う
吉備の野が褐色になり松茸の声はすれども口にはとどかず
今月にスマホデビューをした我にコメントするは八歳の孫
一本の長く伸びたる毛が作る左手首の風の感知器

阿藤たつる　時限装置　・伊

流木や土砂に埋もれし河川敷秋日に銀の穂波が揺れる
記憶とはつねに忘却とのたたかいだ　ふと目に入るフレコンバッグ
其処此処に携帯電話基地局が　大気に満ちる電磁波の渦
古書店のリストに並ぶ詩歌集は時限装置を備えて眠る
真日落ちて昼の衣装を裏返し虱追いしか辻潤の手は

平尾はるみ　台風　・春

荒れ狂ふ台風の名に「キャサリン」や「ジェーン」と付きし時代のありき
万葉の歌にも詠まれし千曲川氾濫起こし旅情空しく
日本列島流るる川は網の目のメロンの皮の如くと知りぬ
備蓄せるペットボトルの銘水の飲むをためらふ被災地の濁流
天よりの禍を逃がれ来し大和なりて仏の加護と言ふ人多し

藤田しん子　口笛　・大

遥かなる海に向かいて祈りいる子の手術日が近づいてきて
切り花の持ち込み禁ずる病院の瓶のひまわり針金匂う
緩やかに病癒え行くきざしして子はわれに言う「シミを隠せ」と
縦笛の「庭の千草」を聴きながらアイルランドの空を描けり
口笛を低く小さく吹く夕べ「庭の千草」をおのれに聞かす

伏見富美恵　ひぐらし　・風

再会の幼なじみと語らえば小学生の頃よみがえる
いっときの雨に部屋ぬち暗くなりひぐらしの声ひときわ高し
たっぷりの水を含みて重たげに朝の歩道に捨てられし本
たまに来る息子の手みやげ甘納豆心癒さる口に含めば
六脚の揃いのいすがひそまれるくりやに坐るは夫とわれのみ

寶藏八重子　秋　・鳩

アプリとは便利なものよインストール我が手のひらに広がる宇宙
手いっぱいのガラス器に盛る秋桜は野と変わらずの両手広げて
倒るるを阻止せんとする米の出来肥料やりにもひとさじの妙
刈りあとを静かに待つはへりに立つ柿の木いっぽん実の色の映えて
ねこにくま雲を遊ばせねこじやらし日がな一日空くすぐりて

本郷萬次郎　またしても　・羊

またしても元号神話崩れたりレイワレイワに御利益はなし
山々の倒れた樹々に眼をやれば大地のイカリ如何に鎮めん
見わたせばブルーシートが哭いているジョジコセキニンの風は止まずに
またしても風水害に襲われた永田のムラのアベ亭休まず
メチャクチャが大手を振るう日の本に錦の御旗惣法掲げん

松井千明　満月　・地

満月も穏やかなりし地にありて異常気象の被災地思わる
名月やだんご盗みの子らの声遠くになりて夜は静まりぬ
縁側に日差し入りくる秋の日はぬくぬくとしたベッドとなりぬ
名月やススキの野辺をわたりゆく風そよそよと秋の香きざむ
齢重ね未経験なる暴風雨想定外でなくなる怖さ

松井正守　薄紅葉　・洛

真如堂師の催せる茶会の日あさひに輝く薄紅葉山
真如堂の茶会に聞こゆ法楽の太鼓の響き師をたたえたり
御即位に首相揮毫とされし旗風に従い鉾にとまらぬ
雨あしはにわかに行きて光さす未来へ向かい虹かかりたり
御即位の慶事を迎え吾が家も祝いとかこつけ贅沢な膳

松谷公汪　紀伊半島　・鳩

紀伊半島車に巡る三日旅詣でし社寺の十指に余る
わが歌の紹介もして吉野路を熊野を巡る三人の友と
秋日和友ら案内の熊野なり三所詣での佳境近づく
美熊野の沖まで藍に凪ぐ海の果ては浄土か行きし人はや
紀伊半島なくば列島くびれいる女体とおもう右に寝そべる

松野正子　エレベーター　・地

日中は三十度でも栗食べてささやかな秋楽しむ夕餉
年輩のご婦人二人オシャレにて金髪銀髪エレベーター前
歳忘れ運動会の練習も二階の会場エレベーター利用
わが町の運動会は不要かと思えど参加で考え直し
直撃を免れた我等安堵でも被害地避けて次の台風よ

松本久子　ラグビー　・大

日の丸を仰ぎ君が代歌う人武骨な顔に清きたましい
スクラムは若さと活気に満ち満ちて今を生きよとラグビーの神
フィールドは熱気と汗が渦巻いて間近の観戦うらやむばかり
様々な運も実力選手らに番狂わせなど言うもはばかる
祖国より異国で情熱スラッガーマイケルの汗清らかに光る

丸山紀代子　台風　・信

台風の雨音はげし避難せし体育館に話し声ひびく
半日の避難であるが語りたし大きめのクッションあらば尚よし
昼も夜も大雨ふらば千曲川堤防こわし町へ流れる
狸いてダースベーダーもピエロ・魔女ハッピーハロウィンおでんパーティ
外つ国の選手と争いタックルすラグビー選手の強き肉体

三浦美代子　完結する　・銚

熱唱の「落葉松」聴きて涙せる我を見たりき一瞬歌手は
窓を打つ風雨は通奏低音のごとくに鳴りて音読すすむ
完熟の林檎の香りに誘われてリンゴの唄を唄いしと友
火起こしもカレー作りも拙くて付き添いに成るサバイバルキャンプ
一球をグランドゴルフに打つ瞬時「完結する」の言葉たちくる

村上康子　新米　・湾

大壁画は「秋田の行事」を描き切り藤田嗣治の世界迫り来
西馬音内の端縫い衣裳の盆踊り閘をゆらして妖しさただよう
暴風雨にすっぽり包まれいる音か台風十九号の夜を聴きいる
穏やかな川面を消し去り台風の爪痕すさまじ濁流となり
手に広げ今年の出来を見し亡父の姿顕ちくる新米の季

茂木静子　結婚記念日　・埼

結婚して55年の記念日は夫は入院吾もやまいに
病に伏し離れて迎えた記念日は電話で通ずる夫婦の絆
窓越しの温き冬日のありがたし病みて痩せたるわれの体に
昼近くめぐれる庭にさくら草丈低きまま蕾を抱く
命とはだれもひとりのものなれど人の命のいとしき春よ

森田孝子　「にっこり」　・今

触れる日の再びはなき亡夫の背の温もり残るセーターを着る
断捨離と心定めて思い出の文も写真もシュレッダーにかける
シュレッダーに吸わるる刹那若き日の写真の笑顔は泣き顔となる
我と小鳥ときそいて食みしブルーベリーを余さず落として台風去りぬ
卒寿越えし義母の戯き思いつつひとつ一キロの梨「にっこり」を送る

もりやまきょうこ　千恵子姉　・そ

いつまでも待てどくらせど顔見せず店内さがす姉の姿を
店内の呼び出し放送我の名を何が起ったの心拍上がる
青ざめた姉が担架で運ばれてサイレン聞きつつ我祈るのみ
これ以上薬ふやすことないように願う姉には寝返り体操
これで良し明るく楽しき姉戻り家の中にも笑みがこぼれる

諸留能興　同窓会　・洛

還暦の教子達に再会姿こそ変はれどひとつのいのち変はらず
教へ子と瞳合はせたその瞬間　往時の時空へ五感飛び行く
道端の目立たぬ萩のときをりに涼風来りかすかに揺るる
西山の山肌染めて夕映えの空より寄する秋の初風
涼風の吹きくる庭に立つ妻の頭上に輝く七日夜の月

安田明子　有難うリーチマイケル　・大

がつしりと組まるるスクラム足もとにそろり出づるは楕円のボール
花三つ桜の縫ひのジャージーにオールジャパンのタトゥーの念ひ
母願ふラグビー選手に育てたくほほ伝ふ髭に幼なの顔みゆ
ノーサイド深々お辞儀のラガーマン我らは感謝を教へられたり
選ばれし男は戦陣守りたりリーチマイケル日本人と生る

柳澤君子　燕　・信

梅雨あけて胡瓜を数多いただきぬ鈴虫らにもたっぷりあげよう
夏のさなか頭ぼんやり眠りたいさあどっこいしょと腰上げようか
何もせずくつろげる時思いおりグループホームの一人ひとりを
いつからか笹原の燕姿なし色どりさやかに秋桜ゆれる
水害の台風十九号千曲川の折れし鉄橋我が家から見えし

山口真樹子　祖父　・宙

三度目の峠は越えず日の落ちる頃に父から「じいちゃん死んだ」
われのこと「ひだりまきこ」と笑ってた祖父はこんなに痩せてなかった
祖父の死に近づくように斎場に向かう車は渋滞を行く
昔から泣いたら怒った祖父だから斎場までは涙は出さず
一瞬の躊躇いのあとゆっくりと父が火葬のスイッチを押す

山口桃子　事件　・宙

千里山静かな町に警官が刺され拳銃うばわれ倒る
日曜日全国ニュース犯人の逃走するはわが町のなか
拳銃を持つ犯人が逃げている戸締外出控えとメールは
ニュースでは逃走中の犯人をさがすパトカーヘリはバタバタ
詐欺電話鳴り続けたる恐怖から耐えかねついに留守電とする

山田珠美　燈花会　・春

早朝の観光客も居ぬ頃はのびのびあそぶ芝生の子鹿ら
カップルや浴衣姿の家族連れゆるゆる歩く燈火のひかりに
奈良公園今宵燈花会やわらかな夕べの風にきらきらゆらめく
一年の大仏様のお身拭いサッパリされてお盆を迎う
命綱天井からの籠に乗り大仏様の埃を拭き取る

山田英子　清風　・洛

人々と和のゆるされて豊けさは心のままなり悟りて生きん
川の辺に生いし千草にひと雫そのきらめきは心にまぶし
虫しぐれ暑さ残れる夕暮れのそよぎし風にほほなでられて
秋雨にぬれて咲く萩野辺の道語りかけくるゆるる心に
清風のほほなで通る生くる身は風のこぼせし歌をうたいぬ

山野ひかり　子ら　・沖

誕生日あと何日と今日もまた尋ねる長女新一年生
祭り終えなお冷めやらぬ末っ子は動画を見ては部屋駆け回る
姉からの命令きかぬ次女もみじ黙々励む低鉄棒に
ふりむけば山あり谷もあったねと言える時まで共に走ろう
職員の言動一つやきもきす管理職とはこういうものだ

山之内香代美　青き地球　・羊

弧をなして大海原の太平洋青き地球の一点見詰む
長月の蝉の声消え甲高き鳥も仲間に秋のおとずれ
ここち良き風のささやき身にやさしさえずり閑か秋のふけゆく
秋雨をいとわずはしゃぐ孫五歳月ごと熱だす幼児期越えて
姉二人七十四で黄泉へ発つ青き地球に吾その齢

山本榮子　コスモス　・舎

あき半ばそぞろ身にしむ旅ごころミステリーツアーに参加しようか
袖とおす紬の長着ここち良し秋草模様の帯に出でゆく
十七号すぎし朝の吾木香支柱もろとも抱き起しぬ
杳き日のコスモス畑のスナップは花に溺れるような一枚
丈ひくき今年のコスモス愛しみつつもう若くないなと空につぶやく

やまもとしず　睡魔　・鹿

深い森に入り行くようにおそわれし睡魔に負けてまどろみの午後
紅玉が画面を占めて秋実る群青の空高くひろがる
電話にて届いたことば災いも前向きまえむき療養の師は
食卓はめだま・半熟かた茹でと少年ふたり朝のにぎわい
秋空の中天に浮く下弦の月ブランコにして漕いでみよう

吉池ケサヨ　クロマティックハーモニカ　・信

友の息子のハモニカリサイタルの音色澄み安らぎ覚ゆ心地好き宵
ハーモニカ練習を問えば出社前と努力の音色秋空に冴える
梅雨空に品よくほころぶ白菖蒲茎も長くて鶴舞うごとし
梅雨空の様子を見ながら梅漬す赤くなあれと紫蘇をもみたり
夏の日差しようやく照りて夏野菜の茄子トマトの色みずみずしさ増す

よしとみゆうこ　温暖化台風　・そ

伊勢湾の台風生き抜きし夫は言う水の恐さは終生消えない
七十路の我が身に置きかえ災害を思えば立つも出来ぬであろう
ラグビーの世界大会日本でボール取り合う選手に夢中
甥の子はマスコットキッズに選ばれてトンガ選手と入場凛々しき
神無月天皇陛下即位さる民の平和を一身に願い

脇田智子　納屋　・鳩

籾摺りに納屋の羽目板より見付く明治十三年之を建つると
この納屋を昭和よりずっと使いしも達者な筆字令和に知りぬ
納屋の壁に掛かる水車を見上げおり谷川に在りし遠き日浮かぶ
この納屋で縄を綯う祖父の丸き背を思い出したり掃き掃除しつつ
帰る度犬飼うことを勧める息子離れ住む彼なりの優しさ

和田健二　釜石　・湾

捥ぎたての茄子の青さをゆるませるほどの空なれ園の遠足
カメムシのむくろは溝に限りなし人とて例外にはあらざりし事実
彼岸すぎつくづく帰れるここちするつくつくぼうしの鳴きたける里
雨あがる夕べを待てるものどうし先は知らざり鳴く間が一生
よこ縞の紅よ日の本咲かしめよ曼珠沙華揺るる釜石の地に

渡辺英子　小難　・羊

躓きて転べる夫の額より流れる血にぞ救急車よぶ
台風の激しき音を聞きながらぼんやりとして病院につく
二時間を廊下に待ちて呼ばれたり六針の縫合白き包帯
C・Tに脳出血の影はなく歩行会話に帰宅となりぬ
「大難を小難で済ませて貰ひぬ」と言ひたる母の思ひ出さる

渡辺真吾　居酒屋行き　・銚

リハビリを寝網の中で堪える人支える人の腕逞しく
首すくめ一人二人と塾出る子暗い夜道に風強まりぬ
災害の弱者しわ寄せ行政が心身健康守る義務あり
集会は堂々巡り先見えず帰る夜道は居酒屋行きで
骨折で水もやれぬと嘆き節爺さんの為やっと腰あげ

浅川広子　心のうち　・凌

笑うこと人に逢うこと語ること日々調えん心のうちに
眼と耳と五臓六腑の健全を持ちて生きるを人間と云う
信濃ゆく遠く広がり黄の揺れる空と対比の麦秋の畑
水上の能舞台持つ神社訪う水面の光を受けとめて建つ
青春の歌集歌に口ずさみ人を偲ぶをよすがともなす

浅霧美佐子　母　・風

十月の終わりに白きアマリリス二度目の開花まぶしき花よ
血中の酸素を測り深呼吸肺の線維化なかなか難儀
むずかしき病を二つかかえおり多剤服用リスク多くて
わが人生長生きするは楽でなしどう生きるかは自分で決める
この秋に百二歳の母おくりたりほっとひと息われはいつまで

芦田美代子　黒豆　・風

関東へ狩野川級の台風が　離れたわが里広戸風吹く
広戸風で物置の屋根吹きとびて骨組だけが整然とあり
この夏は蜂に盗られし物置よ　屋根ごと飛ばせり広戸風はも
枝豆として摘みしあと抜かれたり説明不足か想定外ぞ
抜かれたる黒豆さやより取り出しぬ紫ピンクこれから熟るるに

綾　央子　痛き肩　・夢

寝はぐれて起きだす夜はん深々と私ひとりの世界にひたる
ひと月も肩の痛みに耐えし夏スマホが友の日にち薬の
首と肩いためし時の頭には上に石でものせたるごとし
肩いため長き休みにジムの友くれし電話に焦る無情さ
断捨離を始めしもののあまりにも物の多さにタオル投げたき

石井徳子　二つの台風　・渚

遠くより二十余人のボランティア瓦やシートで手早くなおす
福島ゆボランティアの馴れもしてトタン屋根をも見事に直す
大き家に一人住まいの我なりき二つの台風思い戦く
一人居の吾は避難所へ早くゆき仲間同志と支えあえたり
真夜の中台風一過に空みれば満月のひかりこうこうと照る

伊東美智子　夕鐘　・春

ほのかなる匂い放ちて金木犀猛暑を越えるおそき秋告ぐ
食い荒らす山のけものに悩まされ早どりみかん友より届く
貯えを全て流さるる映像に被災者の願いかなうを祈る
咲き極む小菊・りんどう供華となし今年も墓参なせるよろこび
ものを燃す匂い刈田を流れきて夕鐘にのせ闇けゆく秋は

糸島美津子　シャガール　・風

シャガールの空飛ぶ人にあこがるるわれと一緒にとんでくれぬか
ばら色に染まる夜明けの空の色しばしながめん息ととのえて
一葉忌しずかに雨降る晩秋のひと日すごせり朗読聞きつつ
ビニールの傘に紅葉が柄となり足どりかるく寺に向かいぬ
すぎた日を思いおこせばおおかたは喜びよりも悲しき多し

伊波千賀子　部屋　・沖

お天気の神は不機嫌早くより雨風つよき袋全開
天候の悪さのために休むかと自問自答し身仕度をする
雨や風吹き荒れるなか出勤の道に野良猫にやりと過ぎぬ
台風の接近ニュース部屋に置く掃除機の泣く体ふるわせ
屋根の上夕ぐれ雲に初心のあの頃の空思い出す

今井マチ子　ふる里　・習

ふと聞こゆつくつく法師にふる里の晩夏の畑の柿の木想う
百歳の叔母を祝わんと夫と行くトンネル越えてめざすふる里
いつの間に蝉の声消えうろこ雲コスモス揺れるやさしく揺れる
けなげなり折れもせずに咲いている台風あとのコスモス愛し
アニメ柄より淡いピンクの傘となり孫は中学二年となりぬ

上原ケイ子　野分　・霧

惨敗の卓球の日はすごろくのさいころをふるつぎへすすめ
台風に耐えし栗の実転がりぬ捨て身の技を教えてほしい
三姉弟どの一角がくずれても脆くなると子等に諭す秋
収穫の列島うかがう十七号こっちの水はにがいぞ
盛り上がる前評判的中のキャスティング映画公開近し

榎田桂子　病院　・霧

骨折の足はギプスにかためられままならぬ身の哀れなるかな
病院のベツドにくくられゐる我の窓辺にスズメなぐさめくるる
松葉杖ついて歩くはむづかしきリハビリかねて歩行訓練
松葉杖使ひもなれてうまくなり病室の中行つたり来たり
病室の窓より見ゆる森の木々色づきはじむ秋の訪れ

遠藤義子　柿　・信

色づいた柿に寄りくる四十雀すぐ飛び立つを居間から眺む
手をのばし柿もぎ食べしあの時は臨月だったよ四十年過ぐ
柿の木は切っても茂り枝のばす今年も嶺に鈴生りの柿
艶やかな色と香りのよきかりん部屋に飾ると心が晴れる
おお株の椿の剪定ちゅうちょなし植木屋さんのセンスが光る

大久保麗子　姫街道　・森

水平に羽根をひらきて赤蜻蛉下仁田戦争回顧の碑のうへ
野あざみの日を浴ぶ針花移りては大羽根の息つぐ黒揚羽蝶
姫街道左右に並ぶもみぢの樹木の末見やればほんのり緋に染み
信州へ脇往還の姫街道ひつそり実る木苺の黄
礫あまた粘土のなかにふかみどり鉾立つごと生ふ殿様葱は

大寺智子　千手ぶな　・新

無花果のへた切りながら並べゆく今年も秋を大鍋で煮る
大鍋のいちじく甘く仕上がりぬ父母の遺影に二つ並べる
根曲がりの林のブナの幹黒く水流れたる跡くっきりと
こぶ付きの枝を四方に広げつつ街道守る千手ブナ等は
「昭和五年十二月妻と馬待つも来ず」大ブナの幹に刻まれし文字

岡野恵俊　月見の会　・洛

黒雲の行く方を追いて予報見る月見茶会を明日にひかえて
川辺りの草花摘みて床に活け月の出を待つ祖母の友たち
待ち合わせ料理屋に行く一団のその一人なる祖母腰まげて
AIは縁なきものと思いつつちょっと触ってみたき老い吾
稲刈りはじいじとばあばと孫二人見護るように秋日とどけり

岡本小由里　糸とんぼ　・洛

石菖の葉先にとまれる糸とんぼ瀬音ききつつ羽根やすめいる
たおやかに水の流るる岩倉の川辺に揺るる数珠玉の群
朝まだき西のかなたに淡白き影みつけたり長月の月
台風の過ぎ去りし後青空に白雲たなびき虫の音しきり
生垣の金木犀の香る朝逝きにし人ぞしのばるるかな

岡本三枝子　彼岸花　・岡

季候異変のゆえか非ずか彼岸花彼岸に咲かず十月に咲く
特権の如く突如と緋に炎えて彼岸花咲きぬ道も田畑も
「ご自由に採って食べて」と友言えど裏の木下に立ちて迷いぬ
秋祭りの幟は高くはためけど祭り客なく馳走作らず
敬老会の誘い届けど我が齢を自ら信じず生返事する

小川美智子　嵐　・橋

吹き荒れて雨戸を叩く台風を恐れつつ夜の明くるを待ちぬ
一夜明けテレビに映る台風の爪痕に千葉の友を案じる
氾濫せる信濃川を流れゆく家屋よりヘリに助けらるる老人
信州に住む息子無事なるや家の近くを犀川流る
電話にて無事なりと子は言へど手伝ひに行けぬもどかしさよ

小野明子　母　・森

幼き日物怖じしなかったという母は皆に好かれて皆のお供に
母の兄弟五人揃うを自慢する母九十三歳末は七十七歳
妹が二十七歳にて逝きしより母はたびたび俳句を詠みぬ
祖父と妹は何度も俳句に詠まれたり父と私は一句ずつのみ
母はもう俳句作れず今までの清書の手伝い尊く思う

小野泰子　始発電車　・今

台風後十日余をへて開通す始発電車の音軽く過ぐ
山頂に着きしと仲間の知らせあれば伯耆大山麓より仰ぐ
地球温暖化にいつまで耐えるや白山の万年雪と花の数数
遊覧を終えて速度を増す船の後引く波を追いゆく我は
雨のたびに浮きいできたる畑の石何年経てもつきることなく

かがわじつお　呵呵大笑　・鹿

呵呵大笑身上話にけりがつく「年をとったらいけませんなあ」
剣舞まう出番の前に反芻す「技の要は細部に宿る」と
顔見ても名前を見ても外国人日本の代表とは言うものの
日本語で言えば吾にも分かるのにコンシェルジュウだのレガシイだのと
草ひけばつつじにあそぶ蟷螂が斧をゆらしてわれを威嚇す

笠井秀子　令和元年　・北

送迎バスに乗りし嫗早速に指の体操頬赤く染む
逸早く姉の体調感じたり電話をとる「もしもし」のトーンに
独り居のわれに友より誘いあり一文字一文字手帳を埋める
日射しさけ道の片側を昨日歩き今日は陽だまりを選びて歩く
「日本の川は滝のよう」と語られしこと現実となる令和元年

片岡カヨ子　虫　・岡

払ひても払ひても張る蜘蛛の巣を払ふことから朝が始まる
鮎二匹泳ぐかに見ゆる西空を仰ぎて今日の草刈り終る
一寸の毛虫コスモス食ひ荒らし吾の好みし色を失ふ
白百合の一千本が日輪へ向かひて吾に背中を見せる
広戸風が落してしまひし渋柿を勿体なやと干柿作る

加藤高明　飯　・凌

日々の飯炊くことさへも稀なれば糒となりぬ仏前の飯
仏飯をいただくことを忘じたり今日もまたまた雀の餌に
海苔くづの食べこぼしたるがシャツに付き素敵な柄と若きが褒むる
賄ひの賞への多きわが身にはさらさらになき増税実感
思はじな年金のみで足れりとは何をいまさら大騒ぎする

金子美智子　小菊　・新

フェンスに夏を残して朝顔は小菊と共に秋空に咲く
緑から茶色の葉へと変りゆく大樹仰げばはらはらと散る
大学の合格通知孫に来て夫の遺影に報告するなり
何するも人より遅れる吾のいて怪我したことを悔いる日々なり
遠き日に住みし水門町も水害に友を思いて心の痛む

かはさきじゅん　引揚げ　・そ

父宅で猫を抱きて指を折る母の引揚げ待つ家なき子
さすらいの旅の終りは黄金なるあぜ道歩む引揚げの父と
めざめれば朝はゆっくりしのび来て明るき光は柱昇り行く
朝ぼらけ白い小車は陽になだれ兎の群の走るが如し
同窓会マドンナも病の床に伏し盛り上がるなく帰宅せしなり

川上悠子　新米　・岡

米作らぬ農家のわれは米二俵購め保冷庫に入れて落ち着く
頼みたる米運び来し若者が汗拭ひつつ作柄を言ふ
保冷庫に三百疋の保有米蓄へし昔を思ふ一人居
西瓜五個三個はけものに遣るとして二個を大事に抱きて帰りぬ
鳥がたべ鳥が食べ残す無花果をわが食べ残す今年豊作

川北操　風　・凌

ざわざわと木の枝ゆれて風吹けりわれを招くや出でゆくスーパー
いくさ時を異国に果てし兄偲び〈ふるさと〉歌ひ空見上げたり
秋の日のすがすが広ごる空の下さ庭に立ちて「ヤッホー」叫ぶ
老いて今世界巡りし街角の写真眺めつつ恋しや青春
老いてゆく人のさだめの悲しさよ夕べはさらに深まりゆかむ

かわひがしかずよ　銀座の街で　・そ

上京の銀座の街で手助けし「銀座の人は優しい」と言わる
この秋もおはら祭りの提灯が夕ぐれの街ゆれて華やぐ
月までも機会があれば行ってみる気持はあれど終活はじむ
通い道「いってらっしゃい」「おかえり」と八百屋魚屋過ぎし佳き日々
通い道三十余年の交わりに今生きる心の軌跡

神戸良三　わが畑は　・信

胡瓜苗に実をつけ初めし畑に出て梅雨の合間に夏草を取る
馬鈴薯の畝に生いたる狗尾草（えのころぐさ）は広く根を張り勢い誇る
隣り合う畑の主親しみて幼き頃の暮らし聞かせたり
粘土質の固き重たき畑の土梅雨に湿りて鍬にまとわる
梅雨明けを待てず馬鈴薯掘り上げる芋も我もが泥にまみれて

木村静子　足取り　・湾

軽やかに追い越して行く足どりに昨日まではとわれを重ねる
忍び寄る重き歩みのこの日頃かよい馴れたる道遠くなる
細やかなすずらんの茎に自己主張オレンジ色のまんまるの実は
すがすがと朝の空気を震わせて野鳥はさえずり秋の澄みゆく
一分先を刻むデジタルと定時の時計ふたつ並べて夜長の安堵

きゅうとくなおみ　父と母　・そ

医者からの手術の説明聞き終えて父は断りその日に退院
父ちゃんの決めた通りで良いと母手術断りし父をみつめる
もう起きた？父ちゃんはどこ？と日に何度我に聞きくる母の優しさ
真夜中に電気が灯りため息が父の部屋からかすかに聞こゆ
夫婦とはどこまでわかり合えるのか子にはわからぬふたりの空気

久保田　歩　登山　・湾

曇り空に太陽現れるたび登山者は全員「おー！」と声盛り上がる
悪天候に一週延期の十月は冬期休業で御朱印おあずけ
曇天下黄色に染まる草なびきナウシカアの世界広がる月山
美しい鳥の鳴き声の響く道帰りの車中に聴く同じ声
箪笥開くれど新しい服はまるでなし買っているのは登山服ばかり

熊谷とも子　秋なのに　・湾

さりげなく秋の色めく街角に歌口ずさみつつ遅きバス待つ
秋日和の神さまが呉れたこの一日を抱きしめながら車窓の人となる
あの人もこの人もみな小さな幸せを背に負いて生きてるのかも
台風の去りたる朝（あした）は太平洋もきらきら見えて一面の青空
わが家もご近所さんも呑み込んで大型台風はあばれん坊将軍か

小塚　幸　ギンナン　・風

茶封筒にギンナン入れてチンすれば割れ目にのぞく緑あざやか
ギンナンをひとつぶ食めばほろ苦く秋を味わう初物なりき
早速にギンナン入れて茶碗蒸し夫の笑顔の顕ちくる夕餉
青さやを枝からもぎて茹でゆけば湯気の向こうに友の顔浮かぶ
貴婦人の如く刈り田に舞いおりておちぼついばむまっ白い鳩

紺野紘史　鐘の音　・湾

あめ色の物差しの裏に母の字かうすれし墨にわれの名前が
年に一度昭和にもどる原爆忌、核廃絶の鐘むなしく響く
真夏日の夕暮れ時がわれは好き短歌（うた）に残れる余韻のようで
梅雨寒の曇天つづくさ庭辺にガス灯のさまに灯る紫陽花
晩夏光おとろえる夕べ主住まぬ家に侘び鳴く蜩の声

齋藤　進　父　・湾

父と子の繋がり拒む蘇生器具呼んでも答えずさまよう魂
焼き鳥で酌み交わしたる夜もありもう帰り来ず無限の世界へ
古稀祝いの羽黒山への参詣の御朱印帳一枚が形見となりぬ
参詣し精進料理は初めてと見せた笑顔は山のかなたへ
父は亡く孫の二人は在校生巣立ちを待つは厳しき日々か

酒井綾子　キスゲ平　・今

日光の山に登りて眺むればかすみの先に遠き山並み
落葉松の林を過ぎて登りたる娘の手を借りてキスゲ平に
この頃は山も野原も色褪せてややに枯れゆく季迎えんか
コーヒーの話をテレビに知りてより私の飲み方良しと思いし
ニコチンサン六十年間取りしゆえ今も元気で居られるのかも

酒井治子　入道雲　・森

海に向きアクアラインを走り行くに入道雲の並びて光る
かつて子と二階より見し入道雲子らの歓声道に響けり
涼風の吹き来る丘の盆踊り月青かりき　四十年を過ぐ
盆踊り子供に配るスナック菓子食みてみたれば美味くありしよ
名も知らぬ白く細き穂なびきをり尖りし心をなだむるごとく

坂本佐和子　讃美歌　・風

聖書よみ讃美歌うたうさわやかさ災なきを朝あさ祈る
「もう少し早く読めればよかったな」病む娘むこ信仰書手に
傷つきし葦を折らない人もいるさらり世捨てず娘むこ憩え
生きてゆくことは食なりと声高に孫に言いつつ秋刀魚焼きおり
金木犀たまいし人に感謝するあまき香りの流るる夕べ

さこだときえ　台風十九号　・鹿

台風で河川決壊多発して被害拡大先が見えざり
報道見て被害の大きさ果てしなく被災者の声我が身にしみる
被災者は変わり果てたる自宅を見て切なさ余り言葉失う
浸水で生活用品すべてぬれ使えぬ品はガレキの山と
今までの生活手段奪われて途方にくれつつ復旧作業

笹崎愛子　友　・湾

これ迄を介護の仕事をせしわれの耳をも疑う友の病は
予期もせずアルツハイマーを患える友の記憶に残るやわれは
いそいそとデイサービスに向かう友己を出せる場にも馴染めり
慰めのいかなる言葉も見つからず病の友の悲しみ思えば
来春に命をつなぐ花の芽を摘みとることは許されるのか

佐藤昌　秋の訪れ　・湾

パチパチと爆ぜる炭火の囲炉裏端に秋の訪れを知らされている
散歩の庭に朝顔とコスモスが同居して季節は進む行き合いの空に
ドライブの路上に止まりて刈りし芒の実りも供え名月愛でる
立待月を海辺の丘にひとり待つ静けさだけが忍び寄り来る
日に日に長くなりゆくわが影は季節に追われるさまのごとくに

宍戸千佳子　パンの匂い　・新

礼拝を告げる鐘の音柔らかくかやぶき屋根に染みわたりけり
神知らぬ身も歌うこと許されて十字架のもと祭壇に立つ
「フクシマ?」と問われ笑顔でうなずきぬ　この日本語のみ聞き取れるらし
朝市にパンの匂いの満ちており神はそこらにいるかもしれぬ
脱原発の証にしてはのんびりと回っていたり畑の風車

篠原節子　コスモス　・渚

野火のごと広ごり咲ける彼岸花その紅の濃きに佇む
台風の被害のがれし柿の実の日日に色づく空青くして
いつになく厳しき残暑続く日日コスモスの花に癒されており
吹く風をゆうらりかわしコスモスは小さき蝶を守るかに見す
咲くことを忘れたるらし木犀のつぼみも見えず香りもたたず

末廣久惠　庭師　・信

十年経ち垣根の樫は大木に剪定かなわず庭師に頼む
炎天に庭師はきりりと身にまとう地下足袋、脚絆気を引き締むか
雨かぜも酷暑もいとわぬ職人の日焼けの顔に自尊心見ゆ
職人のなしたる技の確かさよ垣根は美しき弧を描きおり
応援のコカリナ演奏足止めて聴きゆくもありマラソンランナー

住田ひさ代　台風一過　・風

被災地の屋根のシートを危ぶめり大型台風再度襲えば
足湯組む外壁のシート強風にあおられぬよう柱に巻かるる
台風一過コバルトブルーの夕空にオレンジ色の雲のあざやか
腰伸ばし休み休みに畑を打つ農夫は畝を高く積み上げ
庇うべき教師が仲間をいじめるとは子どもに顔向けできると思うや

高橋迪江　台風　・渚

台風は前回よりも強いという不安の募る夜を一人なり
台風は千葉を逸れると群馬へと共に無事にと祈りていたり
一人居の恐怖の夜を過ごすより早めの避難友は言いたり
恐怖の夜二度目となりて屋根飛ぶも土砂となりても命が大事
台風過ぎ静かな朝を迎えたり停電のなか携帯ひびく

滝口智枝子　秋の音色　・湾

御供えを設え待ちたる十五夜の眩しき光に届けよ祈り
心の影照らしてくれる満月か清らであれと囁くごとく
鰯雲見上げるわれは無重力風に漂う羽のようなり
散りてなお華やぎのこし零れ萩踏み入ることをしばしためらう
古里の稲穂さわさわ風に揺れ秋の音色のやさしさを聞く

立見千代子　神無月　・鳩

真夜中を声騒がしくクツワムシ鳴き続けをり休むことなく
境内の落ち葉掃きつつ清めつつ清めゆく風鎮祭の皆の集ひに
大屋根の鳶職人等いさぎよく足場パイプを組み立てゆきぬ
大屋根に予(かね)ての願ひ巡り来てペンキ塗り替への足場組み立つ
青空にトンビの四羽舞ひし日は大屋根工事終ひとなりぬ

辻田聡美　カープ観戦　・風

秋風にのりて舞い込むカープ観戦初体験とていざ球場へ
となりからいい塩梅にエピソード教えてくれる友は名解説者
応援の一体感に酔いしれるアルコールなければ風ここちよく
テンポよく試合はすすみ九回の表で仕留めるＤｅＮＡを
プロ野球観戦はよきエクササイズからだと声をたっぷり使い

冨岡明子　伝承　・地

よみがえる昔ひさびさ運動会お弁当持って家族みんなで
天皇は高御座より装束の黄櫨染御袍(こうろぜんのごほう)に身を包まれて
皇后は十二単のお姿で御帳台から真直ぐなまなざし
皇室の守り伝える伝統と文化に触れた即位の礼に
国民の幸せを希求する姿勢平成令和と皆い聞く幸

永江幹雄　秋は旅に　・凌

愛犬と共に歩みし散歩道たまさか歩めば売家三軒
四国路のお椀の山々柔らかくバスより眺めまどろむ秋の日
尾道の丘より望む島々は秋の陽を受けきらめき浮かぶ
旧友と三保の松原さまよいて皆におだてられ「羽衣」謡う
秋深く登呂の遺跡に巡りきて古代の人のたつき思ほゆ

中林昭三　夢想　・春

廻り来る想いは何時も喜びの夢よもいちど若き日迎え
人さまはどなたさまでも同じこと希みは無理な出来ぬ事をば
夢持てぬ人可哀想無料だよ実現のないだから夢だよ
夢のくじ購(か)え入ば当りの可能性夢をかうのよ一生かけて
現実が男子(おのこ)の吾に引揚げてよもや令和で卒寿を迎う

中山尚子　東北　・凌

秋祭若きは山車の屋根にいて幼は屋台引くは壮年
白鳥の越後平野に集いきて曇りし空に落穂啄む
日本海落ちる夕日の茜色我らも染めてバスは走りぬ
月見坂そぼ降る雨の杉並木異国の言葉聞きつつ下る
瑞巌寺地震(ない)の八年杉の木の三百失い透ける参道

野田弘美　自然　・天

列島の誇れる里も変りはて自然の脅威抗うすべなく
茸めし新米届きてお裾分け香りも盛りて皿いっぱい
せかせかと歩み来たりしひと世をば踵を返し戻らぬ過去よ
別れぎわ兄は窓辺にいつまでも返す返すに手をふり返す
書き残す手帳にあふるる母の詠む老を楽しみ土と戯れ

◆◇◆第一歌集の頃◆◇◆

萩　葉子　『タゴールに逢いたくて』

二〇一〇年七月六日発行　ながらみ書房

●自選五首

・雪片は頬に冷たくひそかなるわが愛にしばし触れてとけゆく
・母という泉なるかな滾々と内より湧きて絶えることなし
・鉢にそだちグレープフルーツ木になりて揚羽の蝶の里になりたる
・すみきった空にまっすぐ白い雲旅のつづきを追いかけている
・遠い街の誰かが続きを見るだろう　親子の雲に手をふりている

●ミニエッセイ

はやいもので第一歌集を上梓してから十年近くになる。中学時代に授業で若山牧水や島木赤彦の歌に感動して歌を作るようになった。新聞に投稿もした。友人の紹介で地中海に入社。なかい休詠の時期もあったが短歌を作りつづけている。校正で本社に行くようになり、足立三郎先生の一周忌に合わせて上梓することになった。校正している合間に発した「まとめてみようかな」がもとだったか。とんとんと出版する事態に進んだ。前出の「すみきった空に…」の歌は先生に「萩さんらしい歌」とハガキを頂いた。嬉しかった。出版後は多くの方々の励ましに感激した。わけても「足立先生の笑顔が浮かびました」の手紙には泣いてしまった。私のひとことに間髪入れず久我田鶴子さんに伝えた磯田ひさ子さん。お二人の姿は今でも目に焼きついている。歌集を開くとそこに遠い日の私がいる。今や成人した子の子供時代にあえる。久我編集長が選歌編集等出版にかかわるすべてに御配慮して下さった。心より感謝致します。

●地中海叢書◇新刊・近刊案内●

・船田清子歌集『杳く、遥けく』（第926篇）　九曜書林
・船田清子紀行文集『西域紀行』（第927篇）　九曜書林
・近藤栄昭歌集『白い虹』（第928篇）　風心社
・笹島敬子歌集『青青を摘む』（第929篇）　九曜書林

〈近刊〉

・髙橋啓子歌集『自己増殖』（第930篇）　弘報印刷（株）

●十一月号訂正●

・54ページの西川正子作品の1首目から3首目までを次のように訂正します。

かなかなの声に目覚める父母の家朝の空気は杉の香含む
墓参りせんとて花を手にすれば蛭がいるとて止める同胞（はらから）
獣害の主たるは田畑を荒らすことおまけはダニや蛭のいること

B欄5首中、3首に間違い！　なんともお詫びのしようがありません。申し訳ございませんでした。

（どのような間違いであったか気になる方は、十一月号をご覧ください。校正は何人もの目で行っているのですが、ぎゃーっと叫びたくなるようなこのような誤りも……。皆さんを悲しませることのないように、一層注意深くをこころがけます。）

◆まひる野　十月号　第七四巻通巻八七〇号
　編集人　大下　一真　　総頁一〇八頁
＊今年四月に九十歳で死去した橋本喜典の追悼特集が組まれている。「総論」「歌集を読む」「思い出」「年譜」の構成。
〈総論〉
「近代の再獲得」と題し、篠弘が記す。
・歌による表現者われ九十歳の胸にすこしく荒野を残す
　右の歌を挙げ、「『荒野』とは、辛い時代や環境を経た、老いざる感受性にちがいない」と結ぶ。
〈歌集を読む〉
　第一歌集『冬の旅』から最後の歌集『聖木立』までの十二歌集を同人十二人が読む。
・生の終りに死のあるならず死のありて生はあるなり生きざらめやも　『無冠』
「『死のありて生はあるなり』と悟り得た時、歌人橋本喜典は生まれ変わったと言えば言い過ぎだろうか」と中根誠は書く。
・戦時の中学なつかしからねその中に恩師と呼びたきひとを数ふる　『行きて帰る』
　本歌集について柳宣宏は「戦争は、橋本のような少年たち、自国の兵隊、さらには朝鮮民族の、人間としての尊厳を暴力的に奪っていったことを橋本は歌う。しかし、それだけにとどまらず、人間の尊厳とはいかなるものであり、それをいつの時代にも守る人々のいることを、橋本はこの歌集で歌うのである」と述べている。
・死の影に怯えゐるにはあらねどもいつでも来いといふは嘘なり　『聖木立』
・仏壇に置く柚子一顆こちら側は静かなのよとははのこゑする
　生前最後の歌集を島田修三が読む。右のような歌に「最晩年の日々を生きる橋本さんの心の微妙な揺らぎが見て取れる」と。

最近の歌誌より

まひる野
水甕
（藤田）

＊作品Ⅰより
・旅をしても旅人たりしことのなきわたしの身体を濡らす夕立　後藤由紀恵
・あぢさゐを旧かなに書くうれしさとあなたをおもふさみしさの似る　染野　太朗
・背中ぜんぶが耳のようだよびっしりと蟬声が未練がまとわりついて　立花　開

◆水甕　十月号　第一〇六巻　第十号
　編集・発行　春日真木子　総頁一一六頁
＊前田靖子歌集『風待ち草子』評
「難しい言葉は使わず平明だが、端正な調べと韻律が音楽的であり、大きく健やかなものが感じられるのが魅力」として、小松久美江が作者の第一歌集を評している。
・「だから何」みたいな顔して向日葵が一本咲いてる空き家の庭に
「向日葵と作者の不思議な距離感が面白い」
・街路樹を映す斎場の自動ドア森の深みに入りゆくごとし
「〈森の深みに入りゆくごとし〉と、作者の死者への思い、死生観をやわらかな調べの比喩で静かに伝える」
＊自由評論
　竹山広全歌集―日本といふ国
「生涯をかけて核廃絶を訴えた竹山が、更に強大なものとして意識したのは人々の無関心ではなかったか」として、筆者である本渡真木子は次のような歌を挙げる。
・つらなりて物見らのバス登りゆく爆心の坂長くきしみつ
・ソ連領空になにゆゑ迷ひ入りにしかただ思ふつひに第三者にて
・原爆の死を傍観し来しものに死はありふれておそろしく来む
「〈物見〉〈第三者〉〈傍観〉は無関心に通じる。うねりと化す人々の無関心は国を滅ぼすと感じたに違いない」と結んでいる。

作品C（ハ行～）

○　原澤吟子・大

世界より強き男ら集ひきて災害の地で誓ふワンチーム
賀状のみの便りせし友いかに居む酷雨のニュース日々流るるも
雨猛くもろき人の世押し流す　強さとは何ＡＩは泥を掻かぬ

○　江尻リエ子・新

藍染めの印度の綿の手になじみ夏服を縫う十月の午後
虫付きて切り倒したる梅の木はだるま市にて夫と選びき
庭さきの混み入る枝を切り落としひらけて満つる金木犀の香

○　藤岡みゆき・大

ビデオにはにわとりのこえ映りたる機織るおみなの背すじ凛々しく
のびのびと村のおみなは足伸ばし車まわして糸紡ぎたり
柔らかき布をまとえばあたたかしラオスの風が身を包みたり

○　丸山修・大

望みあるごとくひたすら夏の陽に壁登りゆく小さき蜘蛛あり
望んでも戻れぬ日々の後悔を知らず野良猫前を過ぎゆく
じっくりと焼いて焦げ目に醤油さし厚揚げの湯気秋が始まる

○　山野はるか・沖

餅踏みの皆の歓声に手をたたき愛嬌みせる岳弥一歳
手を伸ばしママと泣く声背に残り園走り出る復職の日は
鋳鉄のほのかな香り包まれて夫と見守るストーブ火入れ

○　大越孝子・福

こぼれ落ちし種より生えしや朝顔の今朝を咲きたり十月七日
空澄みて中天高く二羽のとび秋風にのり大き輪を描く
夕暮れをいずこの家にさんま焼く匂いただよい主婦の日思う

○　唐澤美恵子・信

手伝いは足りているかと電話する足でまといの客でなきよう
親族が集いしは法事なり義弟を黄泉へと送り二年が過ぎぬ
僧は説く地縁血縁守りゆくこれからの世を如何に歩まん

○　小南由子・昴

鰯雲あたかも留袖すそ模様初秋の空にはんなりと浮く
明け方の雲は光と闇交じりやがてブルーの空に溶けゆく
澄みわたる空道の辺の彼岸花さやけき秋の気配ただよう

○　柄目けい子　・柴

台風は広がれる田を湖となし畑道に呆然たる農夫一人
積まれいる荷のままトラック水没す運転手らは無事避難せしか
収穫の遅き品種の黒米は冠水に喘ぎつついのちを継がん

○　みなみみちこ　・そ

五十キロ競歩の苛酷さに引きこまれテレビに向かい大声を出す
ふと思う学童疎開のあのお寺障子破りて正座させられ
遠き日に自転車に乗り畦道を師の書を運びし日の暑さかな

○　浜名結衣　・宙

文化祭オープニングは生徒会度肝抜く趣向にやるな！息子よ
劇には出ず裏方に徹した娘の手小道具のあちこちにそれがほの見え
顔と髪長い手足は母さん似性格は父さん遺伝子の不思議

○　平山一子　・銚

台風の最中の真夜に滝のごと天井を裂く泥臭き水
台風のあけた大あな穴のあく程見上げいる猫のメロンは
京土産の惚け除けお守り下げ歩く老婆の我と宣伝するごと

○　間野春美　・漣

虫の声かき消すような雨音にしとしと雨のやさしさ恋し
年増すにクラブチームの面面は一人二人と減りゆく寂しさ
地域より敬老祝いの訪問は嬉しさ半分戸惑うばかり

○　森本ちずる　・沖

木々の葉も鈴田峠に染めはじむ淡きコスモス点々と咲く
諏訪の杜秋空高く龍が舞い子供船頭投網を打つ
子を残し逝く母思い文箱の会葬御礼まだ捨てられず

○　山口美恵子　・銚

「胡乱」とう語につまずきてグッたり直木賞作はなんと難解
疑えど優待券を使いみてカイロの施術を次も予約す
台風の大停電に鈴虫は昨日と変わらず鳴きいたりけり

○　山野みなみ　・沖

川の字に我をはさみて眠る子ら追わるる日々に休息もらう
家族連れ祖母のお墓に祈りたり子らの成長七月お盆
休みには体調戻す夫なりき疲れをいやす子どもらの声

○　吉田明子　・洛

「いつかまた」言い合いてより八とせ過ぐ騙し絵のごと友の面影
なかなかに会えぬ友想い文書けば寂しさ満ちぬ指の先まで
菊枯れて捨つるときむればいじらしく高く薫れる喫きの深し

○　芦田房子　・岡

肩が痛い首が痛いと娘が言えば早寝早起きせよは口癖
意味のなき長電話来て食卓に戻ればスープも冷えて娘が待つ
縁ある人に戴きし紅椿蒔きて大輪の咲く日をぞ待つ

○　安藤清子・北

年ごとに猛威をふるう台風の被害を止めるすべ何もなし
笑わぬ友は嘆きの天使うつむいてわが軽口にかたわらに笑む
振込めの詐欺に合わぬと言いながら電話の声に吾は従う

○　池上久代・雁

ライト浴び揃いの衣装でコーラスをしばし変身公民館まつり
スカーフの結び具合をお互いに直す舞台のそでに集いて
はじめての外語の歌詞に挑戦し唄うアメイジンググレイス

○　伊島優子・漣

流れおちるばかりの汗に一杯の水にほっとしひと息をつく
懐かしき風鈴祭映像に妹と旅せし川越の思い出
風に吹かれチリリンチリリ風鈴に願いをこめし川越祭

○　稲家和子・岡

地球儀のビアクの島の海青し玉砕の兵に赤飯供える
明けやらぬ野にこおろぎの声充ちぬ去りし台風に寛ぐごとく
肩寄せて夫と仰げる名月の平穏をいま倖せと知る

○　遠藤千恵子・銀

定宿にちかき伊豆山神社への朝の散歩におほく息せり
前菜のトマト清らに盛られゐる記憶の青き匂ひにあらず
ししくしろ黄泉に集へるわが縁者この満月を愛でてをるらむ

○　大下陽志江・風

秋になり土手に咲いてる彼岸花父よあなたもながめていますか
わが庭に今年二度咲く金木犀ほのかな香り漂っている
七五三五人の孫がすくすくと育つこの秋ありがたきかな

○　大塚幸子・福

信号をわたる学童一列に蟻の行列黄色の帽子
初雪をかぶり朱燈(とも)すぐみの木が己の役を果たし終うる時
六花(むつか)とは生命あるもの輝ける朝日を受けて小窓の玻璃に

○　小川良子・天

八人の従姉妹集いて旅に出るみなみな後期高齢者なり
温泉に老いが並んでペチャペチャとおしゃべり美人弾ける声よ
次々と美味珍味ありしゃぶしゃぶは近江牛なり大いに食べる

○　鍵田朋美・沖

殴られて動脈切れたような色したランドセルは今日も赤い
誕生日何が欲しいかわからなくなったよ君は大人になった
酷いと指差されたこの顔のこと大事にするよシャネルのチーク

○　風早公恵・漣

岩井滝へ友とドライブ帰路につく鬼雨に襲われ前方おぼろ
かぐや姫になりて集いし観月会雲をはずるる月に歓声
天空の松山城に吹く風は築きし人らの汗と涙よ

○　河西聖子・地

ハナキンの仕事帰りの開放感週末よりも今宵が楽し
来月に旅行を予約それまでは働かねばとエンジンかける
友人と出かけ新たな発見と楽しさ分け合う喜びを知る

○　神田道子・羊

あさがおは昼間の雨に打たれけり夜は藍色に月は光そそぐ
かしのみの隣にセミの抜け殻が蝉はジグザグ木に登りゆく
階段を二段跳びして上がり来る孫の速さに息詰まるよう

○　久保幸子・宙

九時消灯静まり返る病室に行き交うナースの衣擦れの音
寝返りてなお寝返りても明けぬ朝時計の針を進めたきとき
澄み渡る夜空に機影輝きて優雅なるさま白鳥のごと

○　久保洋子・雁

夏くれば落ち種はえて二十年咲きつづけいる朝顔ひらく
じわじわと過疎化のすすむ里山の六百人のうちのひとりに
外出の億却なればエアコンにしばし甘えてお昼寝タイム

○　柴田紀子・新

山鳩の遠くに聞こゆ「ほうほう」と母待つ幼のわれ思い出す
夏と秋網引きのさまの気候にてとんぼ飛び交う行合の空
万歩計付けて早足木犀の匂いただよう朝の道行く

○　首藤悦子・渚

コスモスの揺れる坂道を軽やかに上り来る友は同い年なり
遠くより大きく手を振り走り来る隣家の児らは吾が孫のごと
夕焼けに大き声あげ両手あげ走り来る児も茜に染まる

○　瀬戸キミ子・夢

死ぬまで涙見せぬとひ孫の動画に涙腺ゆるむ八十路の夫
台風に外出止めたる一日長し時かけ夕食に挑戦しており
コツコツと杖つき夜半トイレの夫ベッドに戻りて我深き眠りに

○　髙澤匡子・風

金木犀水に溶きつつ香水とはしゃいだ娘は春母になる
真夜覚めて空撮砂漠の画面を観さがし当てたい星の王子様
朝空に凛とそびえる富士山はいっつもひとり淋しくないか

○　出口和子・雁

まどろみに亡き父そばで無言なり術後の我をながめておりぬ
六〇〇が一〇〇〇歩となりし歩数計リハビリ励む廊下の足跡
水難の相ありと聞き夢に見し光景まさにうつつの画面

○　鉄地川原朱美・新

爪立ちて隠元豆を取りし朝背中を過ぎる風の涼しく
卓上のコスモスかすかに揺れている漬け物を食むリズムに合わせ
収穫の終わりし梨の畑より鳥の擬似音今日も聞こえる

○　土井谷恭子　・風

メロディに歌声のせて解きはなつ心はいまも若き日のまま
中東の魅惑的なる歌声はわが引き出しのいずこにひそむや
習いたるフォークソングの子守唄昔をたどれば悲しき歴史

○　土井敬子　・湾

育ちしはふいごの炎青白く夕闇に浮くまで子等遊ぶ露地
風呂を焚く亜炭のにおい流れたる裸電球ともる露地のなつかし
はじめてに買ってもらいし筆箱は赤きセルロイド。鉛筆の揺れる音の嬉しき

○　飛田久栄　・茨

足病めばテレビにすがりて時間流れ筋肉おちて見る影もなし
両足を三ヶ月ぶりに湯船に入れ至福のここちみなに分けたし
NHKの短歌の時間忘れ居ればさりげなく夫がテレビつけゆく

○　中江京子　・宙

玉鋼神秘の技法伝承し牛車で運ぶ民のありしが
峰かすむ中国山地の奥深くたたら製鉄神業潜め
われと母のふる里繋ぐ細き糸携帯あれば少し安堵す

○　永井秀次郎　・海

精神科十回入院遅れをば取り戻さんと本、ラジオ聴く
母は若き日大牟田の船会社雑貨倉庫で働きてをり
線路跡雑木林の丘の上かつて暮らしし精神科棟

○　古瀬由紀子　・洛

算数の授業とび出しグランドでダンゴ虫たち数える子ども
小さき手に見つけた幼虫にぎりしめ昆虫図鑑で名前をさがす
レゴの町夢中で作る子どもたち先生もやる?と無邪気に誘う

○　本田顕子　・熊

登院のボタン押しつつ身のボタン留めての一歩赤い絨毯
押し出してくれなば来れぬこの一歩誰がため往くか人世のために
私の部屋の窓辺のくまもんが見つめる先に昇る竜雲

●第23回実務委員会・報告●

令和元年11月27日（水）午後1時より本社にて第23回実務委員会が行われました。内容は、会計より今年度の中間報告・総務部報告・編集部報告・第68回全国大会について・創刊70周年にむけての取り組みについて、等々。

実務委員会の前、午前11時からは編集会議。次期オリーブ集の選考についてや企画内容の検討などを行いました。

出席者は、藤森巳行・小野雅子・永塚節子・大浪美雪・茂木斌（以上、総務部）、久我田鶴子・関根和美・磯田ひさ子・奥田陽子・高尾恭子・田土成彦・檜垣美保子・藤田美智子・三好聖三（以上、編集部）、牧雄彦（監査）の15名。

●会記・大久保閲子歌集『風をたずねて』を読む会

前日までの台風の影響の雨も止みまだ初秋といった感じの心地良いひと日。十月二十六日『風をたずねて』を読む会が生駒山中腹にある閲子さんゆかりの地、香川進先生とご母堂の瀬上とね子さんの花霞の歌碑もある生心科学会館で開かれ、三十一名の参加者が集い盛会となりました。

閲子さんはすでに冥界の人となっておられますので会場には、おだやかに笑む写真と秋の草花が楚々と活けられているなか、閲子さんの御夫君、二人の御姉妹、書道関係ゆかりの方々も参加され、他に例を見ない中身の濃い読む会となりました。

まずはじめに、大阪支社の牧雄彦氏が「この歌集に流れている口語調の自由でのびのびとした作風は得がたい特性であり、思いつくままに湧き出る歌は天性の資質であり、またリフレインが多くそれが巧みに生かされて上品なユーモアにあふれる良い歌集になっている。短歌とは何かを考えさせられた。」と述べられた。この感想は参加の皆様の多くの共感を得たのではないでしょうか。

閲子さんは「関西の財界人」であり「書家」でありまた、良き「妻」であり瀬上家の良き「娘」でもありました。そのいずれが本当の彼女であったのか。すべてが彼女であったのでしょう。この歌集全編を通して流れているのは確かな「慈愛」、惜しみない「慈愛」だっと思われます。

・忍び足香りかすかな沈丁花はなの在り処
　の風をたずねて

なかでも歌集の題名ともなったこの一首に跋文で魚住和晃先生も述べておられますように、普通だったら花そのものをたずねると発想するところを、風に置き換えたところが歌をたまらなく麗しくしています。

・えっちゃんとわれの名を呼ぶ声がして河
　内の梅が咲いたのかしら

絶詠となったと思われるこの歌は、闘病中であればこそ、心は幼い頃の望郷の地に帰っていったのでしょう。歌を詠む事が闘病の支えだったかもしれません。この歌にも多くの人が心を打たれました。

会の終わりに御夫君の大久保勇作氏からエピソードを交えた謝辞があり閉会した。

閲子さん、この河内にも、もうすぐ紅葉の美しい季節がやってきます。きっと天国から今日の歌会を見守って下さったことでしょう。

（杉浦詩子記）

【当日参加者】
大久保勇作　瀬上里子　瀬浦豊子
浜田牧山　森田光子　寺井紀美子
大・牧雄彦　今村叶子　高尾恭子、霜・宮本靖彦　養学登志子　黒田守彦、地・浜谷久子　石塚貴美恵　潮田千代、天・坂上直美　柴田登志恵、鳩・藤澤元子、春・國井節子、萬・酒井牧、羊・八田明美　餅井辰視、宙・金尾秀美　杉浦詩子　萩原嘉津子　山口桃子　岩月宏彦　久保幸子　久保見圭子　田土成彦　田土才惠　（敬称略）

■十一月号 A欄批評

猛暑の夏

牧　雄彦

今年の天候は異変の連続だった。「経験したことのない」とか「一か月の雨量をわずか半日で」とか、気象予報士はそうした言葉を繰り返し、こちらはだんだんそれに慣れてしまうような気がする。毎日、「記録的な」暑さが繰り返し、今年もまた猛暑の続いた夏だった。十一月号の歌稿の締め切りは九月上旬だったので、そうした猛暑、熱暑を詠んだ作品が多くみられた。

・八日目の蝉が車道をよたよたと動いておりぬ猛暑のま昼　高津砂千子

蝉にとっても猛暑はさぞ大変だっただろう。木にとまる力もなく、何とか命を保ちつつ「よたよたと」動いているのだが、車にいつ轢かれるか。「動いておりぬ」と完了形にしないで「動きいるなり」などと現在形にしたい。また「動いて」は口語、「おりぬ」は文語というのも気になった。

・体温を越える気温に何をする力の湧かずあぶらぜみ鳴く　永塚　節子

海水温が異常に高かったせいで猛暑日が続いたというが、それもひょっとすると人間のせいで地球温暖化が年ごとに顕著になっているからだろうか。何か恐ろしいことが起こるような気さえする。この作品には誰もが共感するだろう。

・コットンに化粧水たっぷりふくませて暑さをたたいている　萩　葉子

女性らしい作品。口語調が成功している。「暑さをたたいている」がいい。

・眉少しきりりと描きぬ朝鏡今日の暑さをいざ乗り切らん　横田　敏子

これも女性らしい作品。下の句に作者の覚悟がしのばれて私も応援したくなる。以上、猛暑をテーマにした作品の数々。

・すこしずつ母が記号になっていく今日の血圧食欲人格　高尾　恭子

年老いた母を冷静に見つめていて、娘である作者の心の動きが推察される。ストレートに「かなしい」とは言わず、その気持ちが読者に伝わってくる。病院か施設か。そこでの入院（入所？）者の日々の記録がとられているのだろう。それも記号として。

・シャツ掲げ「着るの着ないの」両親に厳しく断捨離迫る娘は　藤森　巳行

この「断捨離」一連、面白い。なかなか捨てられず、むしろモノが増えるばかりの我が家の現状も思った。私にも娘の一人が「捨て上手」で、いよいよとなったらその娘の力を借りなければならないか、と思っている。「断捨離も楽しかりけり写真整理ミニスカートの妻が出てくる」も思わず笑ってしまった。

・獅子唐を噛めば爆発する辛さ家族ともども唸る夕ぐれ　三好　聖三

これも何となく笑いを誘う一首。読んでいてその尋常ならざる辛さが感じられて唾液が出てきた。「爆発する辛さ」が効いていて続く下の句の「唸る」ほどのすごさが伝わってくる。

・年重ねさうだと思ふ生きてゐるこの世はあの世のためにあるのだ　茂木　斌

たしかにこういうことはある程度の年齢にならなければ感じられないだろう。この作品、口語でまとまっていて、言いたいことを素直に述べた。同感できる。

・屋久島の尾根より望む朝焼けの雲に隠れて日は昇りけり　もとむらしげと

いい叙景歌だ。臨場感に引き込まれる。「屋久の海」一連七首描写が行き届いている。

・ミニひまわりされどひまわり「夕暮」の知らぬ令和の日の光浴ぶ　山下　雅子

前田夕暮の有名なひまわりの歌を下敷きにした作品。三句目以下がいい。

■十一月号A欄（ア～シ）批評

想像が広がる歌

岩井久美子

・久びさに訪ひしふるさと住む人なき生家の前に声なく立てり　赤坂たけ子

久しぶりに訪れた生家。今は住む人はいない。家族との暮らしと沢山の思い出があればあるほど「声なく立てり」になるのだと思う。

・兄逝きし知らせを聞きて蚊帳内に号泣したる母を憶ひぬ　赤堀　敦子

・わたしより先に死ぬなと長兄を見送りし母の記憶褪せざり　佐川　久光

母の子への愛情は深く強い。前者は子を失った母の号泣。蚊帳の中で泣くしかない時代。母のたまらない悲しみが伝わる。

後者は「私より先に死ぬな」という言葉に、母の深い愛情が感じられる。生きていてほしいという母の強い願いが感じられる。

・颯爽とハイヒール履き勤めたる四十年あり逆光まぶし　伊東ミイ子

仕事が何かはわからなくても、ハイヒールを履いて一生懸命勤めた作者が見えるようだ。結句の「逆光まぶし」に時の流れと作者の思いが表れている。

・修理終へチップあげむに固辞されて握手する手のゴツく強かり　宇井　秀雄

人との関係の大切さを思わされる歌。チップをあげることより、握手の方が感謝の思いが伝わることに読者も気づかされる。下の句「握手する手のゴツく強かり」に相手の風貌、人柄までも想像してしまう。

・聞かれたらこう言う自分でありたき「今の自分が一番好き」と　尾形　悦子

「自分も本当にそう思う。そう言える生き方がしたい。」と思わされる歌。人生にはさまざまなことがあり、人それぞれに生き方は違うけれども。

・時おりを小枝ゆらして熊蟬の争うごとき騒めきを見つ　蒲原　清美

桜の木などの枝や幹にびっしりと熊蟬がいることがある。その情景を「時おりを小枝をゆらし」という事実と、「争うごとき騒めき」という作者の感じた思いとで表現している。読む者によく伝わる。

・棕梠を切れば年輪もたぬ切り株の白々とあり日に曝されて　木村　恵子

棕梠の切り株をよく見て歌ってある。「年輪もたぬ」とも棕梠は生きていた。その棕梠を切ってしまったことの痛みが、下の句「白々とあり日に曝されて」によって伝わってくる。

・炎天下を送られて来し水道水食器洗うにいつまでも温く　小泉　澄子

生活は便利になったが、人間は自然の中で生きていることを思わされる歌。また、「いつまでも温く」という表現によって、夏の一日の暑さと長さを感じさせられる。

・まごら去り朝顔で作ったむらさきの水に晩夏の雨ふりそそぐ　小原　香里

・お隣の庭に幼の声高く真夏の樹陰ビニールプール　定金　崇恵

後者は「お隣りの」幼子のプール遊びの様子が、「声高く」「真夏の木陰」と表現されて楽しげに伝わってくる。

前者は、孫らはすでに去り、残された「朝顔で作ったむらさきの水」に「晩夏の雨がふりそそぐ」という事実が歌われている。にぎやかさの後の静けさは一段と深い。

・靴底が溶けそうですと猛暑日を配達の人さらりと話す　島根美智子

猛暑日の暑さを「靴底が溶けそうです」と言う「配達の人」。しかし、それは愚痴ではない。「さらりと話す」に仕事への誇り、責任感などを作者は感じたのだと思う。読者もまたそう感じる歌だと思う。

■十一月号A欄（ス～ノ）批評

思いの先に

近藤　芳仙

・ずぶぬれの森なお暗く昏れてゆき烏の鳴く声四日聞かざり　中村はるみ

今年は今頃になっての台風続き。関東から東北にかけて川の氾濫や土砂崩れにより被災したというニュースが盛んに流れている。そんなところへ十一月号が到着した。だからというのではないがこの歌はさっそく読み始めた私の心に寄り添って離れない。度重なる被災で泥をかぶった家電を運び出し、堆積して固くなった泥にシャベルを突き立てている映像が流れた。烏はどこへ行ってしまったのか。森に日差しが戻り烏が来て鳴く日まで耐えて待つ。二か月前に詠まれた歌が今の事象にも重なり共感するのは「ずぶ濡れの森なお暗く昏れてゆき」の引き込むような力によるものか。作者の思いの先にあるものを共に待とうと思うのは私だけではないだろう。

・鳴いているのか笑っているのか私の抱く貯水池なぜか見えない　西堤　啓子

私の貯水池は小鳥のように鳴いているのかそれとも笑っているのか。自分が持っているであろう人間力とも呼べるようなものを自分で推し量ることはできない。経験や知識がいざというとき役立つものであることを作者は知っている。そして一生懸命生きている人なのだろう。

・ブラウスの肩台はずしてラフに着る肩肘張るのもつらくなりたる　新田とし子

この人の七首を何度も読んだ。熱くならずに一歩引いての表現が読む者の胸にすとんと落ちてくる。巧みだと思う。

・稲田より俄かに群なし湧き出づるとんぼの羽根に夕日光りぬ　塚田　禮子

八十代になってから大きな病を克服した作者が短歌に一層身を入れるようになった。出かけることがかなわなくなって身巡りへ目を向けた。とんぼを詠いながら見ている自分に重ねている。短歌の勉強に年齢はない。

・梅雨明けをしめすせみの音羽化の朝地上に放つうすみどり羽　中西　淳子

なんと美しい光景を見ていることだろう。地中での長い年月を経て今まさに薄く透き通った翅を地上に広げている。読む者も引き込まれて感動するのは下の句の写生のなせる技。

・たっぷりとへちまの味噌煮は沖縄の夏を食べたと帰省子は笑む　仲西　正子

生活にどっぷりと根を下ろしている人の歌には重みがあって安心して読める。へちまは食べたことがないがゴーヤやズッキーニを思い出す。子供さんも満足して職場へと帰ってゆかれたのでしょう。おふくろの味が食文化を守っていることを思わせる。

・休むこと慣れぬ母なり杖つきて草ひきにゆく日に五十本　田中　富子

農に携わってきたお母さんの姿。土壌というもののすばらしさを味わってきた人はものみな目覚める春が来れば種を蒔く。作物を自分の手で育てることのすばらしさは、ハイテクが進んでいる現代においても人間の忘れてはいけないことなのだろう。

・庭隅の梅の白い花の咲きはじめをしみじみ見しはつい春のこと　中津川洋二

家にいることが多くなり庭の隅に咲き始めた梅の花にも目がゆくようになったのだろう。実の大きくなった梅の木を見て、作者の上に流れてゆく時間の早いことをしみじみと感じている。

・あの角を過ぎゆく迄と友を送りそれで何かが終つたやうな　寺尾　妙子

友を送るという日常の些細なことながら、この瞬間に虚脱感を味わうことがある。

■十一月号A欄（八～ワ）批評

夏祭りの季節に

千葉　む津

八月の東北は夏祭りで賑わう季節。折しも戦争に関わる歌が詠まれ、焦点を当ててみる事にしました。

・『黒い雨』奈良岡朋子の声さえて闇にひろがる今日原爆忌　藤澤　元子

戦争による唯一の被爆国である日本、「闇にひろがる」で死者の嘆き、悲しみが聞こえて来そうです。広島を訪れた時の記憶が蘇る一首。結句が核心を詠み胸に迫って来ます。

・茫々と巡る歳月鎮魂の八月を想う燃ゆる凌霄花に　藤野喜美子

・八月の惨たる現実のありし事の心の叫びを如何に伝えん　藤野喜美子

真夏日に咲く凌霄花に重ねる作者の心象風景が表現されています。下句を「八月に燃ゆる凌霄花」とし、リズムを整えては？当時を経験された一人として次世代へ繋ぐ事を負っているかのような真摯な心の叫びとも受け取れました。現代を生きる者へのメッセージとして、強く伝わります。

・平和への祈りをこめて目を閉ずる町の放送黙祷告げて　牧野　君代

・終戦の重き知らせは折も折帰国途上の平壌（ピョンヤン）なりき　牧野　君代

・百日紅炎と燃ゆる時引き揚げの無蓋車に逢ひし傷痍兵憶ふ　丸尾　悦子

・もんぺ穿く女高生われ無蓋車に逢ひたる復員兵士忘れず　丸尾　悦子

終戦時の臨場感あふれる歌が並び、リアルに伝わります。三首目の二句目は同意語が並ぶので「燃ゆる季節に」とすればリズムが整います。いずれも三十一文字の言葉の力を感ぜずにはいられない。

・平和とう言葉に願う八月よ守り続ける世の永かれと　村石けさ子

誰もが願う「平和」、炎天の続く八月は当然の様に往時をしのぶ思いが切なく伝わって来ます。

・戦へる敵も味方も心身は病みをり重き銃器に指掛く　山本　孟

・戦争の痛み知らざる日本人人口図の裾野ひろがり続く　山本　孟

一首目、ずばり言い当てており、現場の厳しさを実感する思いです。結句の具体が暗示しています。帰還しても心を病み家庭崩壊した家族を沢山みて来ました。二首目、日本の未来図を危惧する心が警鐘を鳴らしているかのようです。いずれも戦争に対するイデオロギーの見える歌。作者の深い眼差しが向けられています。

・震災にひびの入りたる壁紙も古りてゆくのか小花もちぎれ　山崎三千代

八年もすぎようとしている東日本大震災、未だに続く復興工事に戦車と見紛う程に、工事の車が行き交っています。自然災害の多い日日のなか思いも一入です。

今月は、戦争をテーマに書きましたが、遠く忘れ去られてゆく記憶の中で、当時を体験された貴重な声が伝わり、改めて平和である事の大切さを学びました。短歌は「言霊」、世界平和へと繋がる事を願いつつ、これからも詠み続けて欲しいと感謝の念を抱きました。過去があって現在があることを忘れずにいたいものです。ありがとうございました。

■十一月号B欄（ア～ス）批評

何を詠む

八田　暁美

・夏のしづくを集めて白き天の川に混ざる
一滴吾はさがしをり　安田佐紀子

夏の夜、空に大きく横たわる天の川。その壮大な天の川の星を夏の滴と詠い、その一滴を探しているという。偲ぶ人を星に見る例はよくあるが、このように表現したのは作者の工夫か。巧みな詩情ある挽歌である。ただ「混ざる」は少し気になる。

・朱の蕊に二ミリ程の蜂が付き河骨の花なか時かけめぐりぬ　大久保麗子

初夏に咲く水中花。なかなか気づきにくい花底の小さな空間の仔細な営みに心動かされた作。小さな蜂が蜜を吸っているのだろう。二句の「二ミリ程の蜂」の具体が効いている。だからこそ、花の狭い空間でも結句の「時かけめぐりぬ」の言葉を導いたのだろう。字たらず、字余りは工夫を。

・男より千円札二枚を受け取りて運賃払えど目線合わさず　石田　明彦

タクシードライバーの自分の仕事を通して見えてくる社会を詠い続ける作者。タクシーの中では周りの目から隔絶された空間と気が緩み、さまざまな人間模様が窺えるのだろう。連作なのでこの一首からは分からないが、デリヘルを詠んだ作品。大人の闇の世界である。目は口ほどに物を言う。結句の「目線合わさず」が効いている。デリヘルの微妙な心理を描写している。

・スイカ一切れ塩味強きに涼を得て肩にくい込むリュックを背負う　森田　孝子

前首に合戦小屋とあるから北アルプス燕岳までの途中にある休憩所での作だろう。ここに西瓜のあることは登山仲間には知られているようだ。作者もそれを楽しみにこの小屋までたどり着いたのでしょう。大量の汗をかきつつたどり着き塩の効いた西瓜はどんなにおいしかったでしょう。そして、元気を出してこれから目指す頂上か、今夜の宿の山小屋に向かう意気込みは下句の動作に表現されている。大自然の中、きっと多くの感動があったことと思う。出来れば五首の連作にしてほしかった。

・炎天に浮く入道雲の夏なれや目鼻つけたしこの堂々に　浅川　広子

壮大な夏の景を作者独自の感覚で捉えユーモラスに詠われている。視野がひろく勢いがある。しかも、その堂々に目鼻をつけたいと。作者は一点の大な絵を仕上げているようだ。

・バチカンに厳重検査で入りたり出国おざなりひとまたぎして　綾　央子

四方海に囲まれた日本にはない地続きの国境を超えての入国の厳しさ。バチカンはカトリック教会の総本山がある。名高い貴重な美術品や建築物の宝庫でもあり、国そのものが世界遺産である。世界一小さい国であっても入国は特に厳しいのだろう。その緊張感と出国との差を下句で上手くまとめられている。

・手や足の爪の伸びさえ愛おしく元気な証をいたわりて切る　今井マチ子

身体小さな一部分である爪に注目し、すぐ伸びてきて切る煩わしさを元気な生きの証といたわる優しさ、健康への感謝の気持ちが伺える作品である。

・「藤椅に浅黄斑が来ているよ」夕げの仕度の手を止め飛び出す　末廣　久恵

渡り蝶であるが、ちょうど秋の七草の藤袴の咲くころは身近で見られる。その蝶がきているとの呼びかけに飛び出す様子が目にみえる。浅黄斑が来るのを作者も呼びかけた人もおそらく期待して待っていたのだろう。その瞬間が来た。作者の思いが読み取れる。

■十一月号B欄（セ～ワ）批評

作品と話し合いたい

根岸　亮

・片付けの苦手になった母の為やり過ぎてしまうわれを悔やみぬ　滝口智枝子

老いてしまった母を労る、面倒をみる。解っていてもついそれが過剰に。優しさは軽く理性を超える。気持の表れた良い歌だ。「悔やみぬ」がやり過ぎてしまった結果なのでしょう。

・真夜中に吾が背を擦る看護師の柔らかき手に祖母を語りき　中山　尚子

不明の病と入院と、色々御苦労があったのですね。この歌の良い所は、看護師さんの掌に語りかけたというところ。ここが読者をぐっと捉え歌を非凡にしました。

・洗車するシャワーに虹のかかるなり夫の車も虹をかけよう　西久保佐和子

手作業の洗車と是非捉えたい。しぶきが散って私にも虹が立つ。手作業厭わず長靴穿いて虹が立つ。その虹が嬉しくて、ついでに夫の車も。そんな広がってゆく心が心地よい。「虹をかけよう」が多くを語る。

・応援を授業にカウントするという優勝校はわが町にあり　藤田しん子

その試合がある時は全校授業をストップ。生徒はテレビの前に又直接応援をする。破格ですね。そしてその優勝校は私の町にある、とあっけらかんに述べている。あの学校のことですね。さすがと言おうか大阪。

・病む人との話とぎれて病室に聞こえてくるはひぐらしの声　伏見富美恵

・友の手の冷たかりけりそれのみを思いて歩く病院を出で　伏見富美恵

一首め、病む友を病室に見舞う情景を捉えている。気遣う遠慮からか言葉がスムースに繋がらないでいる。そこへ蜩の音が紛れ込んでその空間を埋めていてくれる。それは恩寵なのだ。二首め、その時はさほど気に留めずいたのに別れの途次あの時交わした友の掌の冷たさに今はっとして頭から離れないでいる。微妙な感情の揺らぎをよく捉えている優れた作品だ。

ひとつ一首め、上句の言葉の詰まりが気掛り、「病む友と会話とぎれて」ではどうか。リズムの平板を避けるため、蜩の声を強調するため、切れを入れるのはどうか。「聞こえてくるは」は説明の導入になっていないか。色々気掛りを言ってしまったが、過去の歌を含めその着眼点、情景の切り取り、韻律に非凡を見る。

・来ぬ人も故人も話の輪に入りて同窓会は未来話さず　三浦美代子

ともすれば同窓会の歌は類型の山。作者はそこから遠く離れて冷静な視線の先にそれを捉える。特に否定の結句に思いがゆく。かといって事情で欠席の人、すでに故人になられた人も「どうぞお入り」と温かいのだ。

・夏のしづくを集めて白き天の川に混ざる一滴吾はさがしをり　安田佐紀子

出出し七音の重量を「に」で受け止めているとも思うも、上句のうるわしい一行に読者は溜息をつきたい。故ここで「に」を省き一度切れを入れ一息つきたい。それでリズムも整いそうだ。混ざるはどうか。かの「五月雨を集めて早し最上川」の俳句が意識下にあるのならまた別の話に。

・駅前で風吹くたびに手ぐしをし携帯を見る浴衣の少女　山口真樹子

他の歌も含め音韻のなめらかさを身につけている様だ。おそらく韻律を意識下において作者であろうか。或る大歌人は「歌は韻律が全て、と言っても言いすぎていない。意味は後のほうから仕方無く追ってくるから」と言う。これからの歌に意識がゆきそうだ。

■十一月号C欄批評

心を引く

田口紀久子

・夏まつりの太鼓花火は地に響きリズムにゆらり稲穂の実り　柄目けい子

太鼓の音とリズム、花火の音が地に響くのを全身に受け止めながら実りの秋を予感している様子を詠われた。

・惜しみつつ蕎麦焼酎を酌み交わす師との一献あと幾度かと　丸山　修

・五月雨の降る側溝にぽつぽつと露草の青雨粒受ける　丸山　修

一首目、老師との再会はいつまで続くかと思いながら杯を交わす。誰しも思いは同じ。二首目、露草の小さな青の花びらに雨粒が当たる様に目を留めるところがよい。

・甲板を走る子を追うスマホには煌めく海と雲仙の山　山野はるか

お子さんだろうか、甲板をたのしそうに走る姿をスマホに写そうとしたら海と雲仙の山が背景に入って来て、歌を読むものにとってもなじみのある景色を思い浮かべることができてたのしい。

・この池に鯉が居るよと友言えばオレは鯉だよと黒い顔の鯉　大越　孝子

思わず笑ってしまった。色のきれいな緋鯉ばっかりを人は注目しているが黒い鯉もいるんだよと主張している。

・知覧にも二千数百人の遺影掲ぐ幾人の思い世に伝われる　唐澤美恵子

鹿児島出身の友人から時々若くして散って行った人の話を聞いていた。改めて歌にされたことは貴重なことだと思う。

・ペルセウス流星群あおぐ蒼き闇過去から現在へ閃光はしる　出口　和子

私も時々マンションのテラスから夜空を見上げるが、こんな風に星座を見つめギリシャ神話にも思いを馳せ何光年も昔に発せられた光が今閃光となって私たちの目に映るという表現に驚かされた。

・飴紙の赤きセロファン灯に透かす幼なの遊びのつつましきかな　土井　敬子

可愛いらしさが目に浮かびます。子どもは何にでも遊びを見つけるものですね。

・盆の来て迎え団子を供えんと米寿の母の生きて今日あり　中江　京子

子から親の長寿をこんな風に喜ばれ、大事にされているお母さまはお幸せです。

・夜店にて釣りしアヒルの育ち居て西瓜の皮をむさぼりて喰む　原澤　吟子

夜店で釣って来たあひる、これから育てるのが大へん気がかりな一首です。

・グラマンの飛ばぬ夏空薬師寺の甍の反りてまばゆきばかり　平尾はるみ

三首とも戦後間もない頃を思い出されての歌。私も小学六年で終戦の世代、実感が湧きます。

・あざみ咲きヒョウモンチョウ舞ふ頂きにザックおろして人は憩へり　藤岡みゆき

三首とも登山の歌、登山がきっとお好きなのでしょう。私は先日、田中澄江著『花の百名山』を読みました。この歌では蝶も歌っておられます。なるほど蝶にも注目すると、もっと登山がたのしくなりそうです。

・台湾の義父の友らが好きだった「ふるさと」の歌を墓前で奏でる　古瀬由紀子

ハーモニカだったでしょうか。感動的な歌です。

・鉢植えの鈴蘭を地に移さんと水害の名残の石掘り起こす　芦田　房子

結句の水害の名残の石掘り起こすにはっと目が行きました。こうして少しずつ少しずつ復興への営みをなさっておられるのです。

■十一月号オリーブ集批評

彼岸・此岸・夏の景

関根　和美

今号には夏の花や虫、そこから導かれる記憶などが多く詠われている。特に八月は夏休みの楽しかった思い出もあるが、お盆や終戦など、死者を偲ぶ作品も目立つ。

・談話室に止めどなき言葉戦世の空襲空爆
　空腹苦難　　松瀬トヨ子

戦時を知る人の多いホームの談話室だろうか。「くう」音の重なりが途切れることなく響き、最後の「くなん」に集約される。作者もその苦難を味わった一人なのだ。

・むかう岸の木立の中の百日紅終戦の日の
　日射しよみがへる　　中島　彰代

向こう岸という語句が遠い記憶であることを示唆する。だが強い赤色と日射しに、それが忘れ得ぬ鮮やかな一コマであることも知る。記憶の最初の一歩と語る作者の、空間と時間を見事に織り込んだ一首。

・百日紅の花房揺るる樹の下に遠いわたし
　がジャンプする見ゆ　　本田　昌子

少女の頃の記憶だろうか。それは時間の遠さでもあるが、不自由な生活を送る身には憧れにも似た遠さだろう。百日紅が一瞬、夏の眩しい記憶を蘇らせてくれたのだ。

・静かなる公園の午後日を避けて蝉の声聞
　く此岸にありて　　庄野ひろ子

「此岸」と敢えて言う作者。「彼岸」を意識しているのである。それはもちろん母のこと。彼岸の母も聞いているのだろうか。蝉声には「幽明」「幽冥」の隔てを超える力があるのかも知れない。

・路地裏に落ちて転がる蝉あまた存分に鳴
　きしかいのちを喜び　　安部　律

「終の住処」の一連にある一首。沢山転がっている蝉をあわれと思うより、存分に生きたかと肯定に傾く姿がいい。作者もそうありたいとの願いのこもる作品である。

・四日目に果つる運命（さだめ）の白蓮のめしべ露（あらは）
　に花崩れゆく　　高原　桐

上句の観念を下句の具体で展開させる。秘されて美しかったものが露わにされる。「崩れゆく」の結句に、散る儚さではない命終の酷さを突きつけられるようだ。

・それぞれの家に戻りし子どもらよにらの
　花咲き終わりゆく夏　　中須賀美佐子

休暇で来ていた子ども達も、夏が終わり帰って行った。初句の静かな詠い出しと下句が優しく響き合う。楚々とした白いニラの花は、モノクロの世界で描く「夏」一連の最後尾の一首。真白きページ、死の覚悟カラスの漆黒、闇から光へ、ささやかで少し寂しげな、だが清らかな揺らぎの花だ。

・まだ進路決めかねをりし夏の日に見てゐ
　し海を今日も見てゐる　　柴田登志恵

・「悲しみはいつか消えるよ」墓所より見
　下ろす海が小波をたつ　　西田江美子

「海」は人に何か決断を促すのだろうか。進路決定も夏が一つのラインであったことなど思い起こす。柴田さんはその頃の自分に重ねつつ、今も何かを迷っているのか、一歩踏み出そうとしているのか。西田作品、「悲しいと思えることは生きているから」と墓所から見下ろす海の景に癒やされる。キラキラと光る小波の囁きかも知れない。

そして夏の空もまた、生きる喜びと勇気を与えてくれるようだ。雨続きだった我が子の命日という悲しみを乗り越えて、夏空の美しさに出会う石塚作品と、長閑な里の風景を楽しく明るく歌い上げる「夏空」一連の巻頭を飾る岩井作品である。

・長雨のあがった空はどこまでも続いてゆ
　くよ永遠の青　　石塚貴美恵

・さわやかな笑顔の人とすれちがう雲一つ
　なき夏空高し　　岩井久美子

作品A

（カ行続き）

関西正子　知らぬが仏　・洛

昨夜かかる電話怪しき尋ねきて亡き娘の事を元気ですかと
梅雨空に雨靴はきて出かける日足元悪し気持の重き
しとしととゆっくり降る雨梅雨の雨嵐の雨は神のいかりか
亡き友より譲り受けたる着物・帯思いめぐらせ手をとおす吾
突然の着物の解れ気付かずに知らせる人に感謝に感謝
ことわざに「知らぬが仏」と言うけれど「地獄で仏」もありがたいもの
人前に恥をかかずに済みました他人の忠告を頷ける吾

神田鈴子　回転椅子　・大

行間に優しさ滲むメールあり揺るる心を包むひととき
イヤリング、指輪、時計を外しつつ今日のひと日の枷ほどきゆく
息子より誕生祝の回転椅子クルックルッと回してゐたり
宅急便のサインをスマホに求められ戯くわれに青年笑ふ
昨夜の雨にしとど濡れたる庭木々のみどり艶めく朝のひかりに
完熟の無花果は手に冷んやりと秋のしづくの白したたらす
こじらせし風邪癒えぬまま二十日過ぐ空に浮きたる羊雲やさし

上林節江　台風19号（一）　・湾

紅葉の見ごろ前線おしつぶし台風きたり泥一色に
高齢者は避難をせよとスマホ鳴りわれのことだと気づくに間のあり
濁流にもがきながらもその妻はメールをしたのか「危ないから、来ないで」
「長いあいだ世話になった」と呑まれしとか高齢社会の防災かなし
つかみたる安堵はまさかの暗転に救助ヘリとて安心ならぬか
来る来ると台風の進路とらえつつダム放流の時期のいぶかし
泥沼となりし人の世照らしつつ泣いているのか望月うつろ

菊池みどり　ざくろ　・渚

葉をまとい赤き口中見せながら柘榴は秋の夕陽に笑まう
病むほどに人さまざまな老境を待合室に見つつ身に沁む
空襲を逃れし十代まなうらに百歳の世へ今朝も目覚むる
夕暮れを目覚むる虫の音ゆるやかにわが胸うらの間間をわたる
穏やかな夕風のなか坂下の芒穂遠く淡き影ひく
ようやくの開通を見し線路沿い台風一過に芒穂も照る
朝日さす窓を越えきし蝉しぐれわずかな命を部屋にひびかす

木谷英一　秋雑詠　・大

色なべて暑に倦む庭に白一点秋明菊が秋を告げたり
時来たりと栗山沿ひの道往けばわづかとは云へ拾ひもののあり
梢なるを得むとの苦心に稔りなく熟柿地に落ち土にまみるる
刈り終へし稲田ひろびろ人も無く風に乾きて切株の並む
畝ごとに芽生え未だしさびしき野に彩りあでやかにコスモス笑まふ
つつましさが集ひて咲ける山萩を万葉びとに倣ひて愛でむか
奏でばや月下の「月光」恨まくはピアノ無縁の軍国の児なりし

北浜玲子　至福の時　・夢

心地よく眠りてしまえり人の手に髪洗われる至福の時を
季長く咲き継ぎくれしポーチュラカ抜きたる茎に蕾の数多
食細くなりたる夫に好物の茶碗蒸し作る銀杏入れて
体調の良き日はエアロバイク踏む夫は体力保たんとして
たんぱく質制限食の夫のため三枚おろしの秋刀魚を求む
つきつきと日本を襲う台風の一過の後の青空遠し
見る影もなく雑草に覆われし畑の作り手病院で見る

北山雪男　残日抄　・伊

焼け跡に生れし世代の身がひとつ受付よぎる無言館展
満州の雪の野に佇つ歩哨図の父に重なる白の保護色
二拍子は「抑圧された統一」と佐渡裕言ふ軍艦マーチに
煽られし群れのあはひに鳥がある和解拒絶の瘡蓋がある
統合の夢打ち砕き戦後史の頭上煌く黒花火かな
消費税、命の維持に課する税　米買ふレジに須叟もややもと
小遣ひの多寡しよぼしよぼと嘆きゐし酒席次第に憂国となる

黍嶋金平　鬼六　・羊

冬晴れの昼のもの音の　遠ければよしとおもむろに　近づく悪し
人の架けし橋を闇夜に渡りゐる　鬼六なれば　左手を歩く
沓を履く鬼六なれば人恋し。山の上の月、里照らす月
山の上に里の灯りを眺めては　今宵花祭りと　思ふ鬼なり
鬼六はひとでなしとか　かにかくにおに六と言ふ鬼　子らに言問ふ
鬼六と言ふ鬼の名前知りぬべし。あはのごとくに、消ゆるものゆゑ
里近く　春待つ鬼のおはします　花の祭りに　人を救ひます

木村恵子　夏の日に　・茨

身はみどり一寸ほどのかまきりの華奢なと見るに鎌を振り上ぐ
ゴーヤーの花に匂ひのあると知る花虻と吹かれつつ朝風のなか
水を撒く夕べの庭にやや風の起こりて土の匂ひたちくる
白き蝶の二つ舞ひつつ音もなし夏逝く庭か日差し昔し
炎天下の稲田の広がり渡りゆく風は光の波とし走る
〈何か文句あるか〉と我を一瞥し野良猫悠々と庭を横切る
復員の叔父心病みて籠りゐる座敷に祖母は飯を運びき

許田邦子　栗　・沖

天の水ありつたけ降り鬼怒川の流れ逆巻くカフェオレの色
踏む土は羽毛のフワフワいく年も積れる落葉の山の腐葉土
太陽光パネルの隣拾ひても拾ひ尽くせぬ栗の木の下
手を伸ばし一つ拾へば五個見つけ夢中で拾ふ疲れ忘れて
安眠を貪りをらむ栗の虫にはか出で来ぬ鎧ふ毬より
特大の栗落つるところ倒木の栗の朽木を目印に行く
二十日間通ひ詰めたる最終日栗の朽木をハグして帰る

くずはらりつ　令和の秋　・そ

台風の爪跡見るも耐え難し災害弱者報道の声
破壊した実りの秋を台風は被災者どこに向けるや怒り
もらい受くる保護猫二匹名をつけて我が家の一員ポポとチャチャ
二ヶ月を経て尚距離を保つチャチャ虐待の傷癒える日はいつ
吾が首に黒猫ポポは胴体をだらりと垂らし襟巻き猫に
老犬を引く老人と足並みを揃えて散歩夕の路地裏
松の木は松の形に竹林は竹の形に絡め取る葛

楠元のぶ子　記念旅行　・葦

金婚の記念旅行のヨーロッパ歴史の深みに圧倒されたり
王冠は戦禍と共に流れゆき十字架ゆがみて祖国に戻れる
戦争の戒めとして王冠のゆがみし十字架あえて直さずに
車窓より見渡すかぎりのモロコシ畑農業と畜産立国スロバキアを行く
舗道にはダイダイ色のカボチャの並ぶ素朴さあふれるハロウィーン近し
音楽の都ウィーンの最後の夜クアハウスにヨハンシュトラウスを聴く
すれ違う老いも若きも大男さもありなんと大盛りの皿見る

久土目　薫　後期劇場（十五）　・桃

祝砲に震う外の木の葉先をも祭りの朝を迎えいるなり
祭り日の稚児の鼻筋くっきりと白塗りされたりいと愛らしき
労いを敢えて飲みおり御社に柏手のひときわひびきていたり
町内を清め回れる神輿連のどを潤さん子供の声の
おもむきの違う法被の粋のよさ背に掲げいるおらが地域の
黒髪を乱し舞いいる獅子頭うけ継ぐ世代の最たる事の
故郷の祭り囃をかさねいん「それ！」コンコンチキチコンチキチ

窪嶋義文　福助菊　・相

童謡の野菊を歌い遅咲きの福助菊に花台を添える
蕾でも福助菊を持参せよ同好会の緊急メール
秋の日の鋭き日差し背に受けて福助菊の支柱の補強
朝夕に福助菊の脇芽摘み芯の蕾は日ごと膨らむ
一年も土作りから丹精の福助菊は花盛り上げる
幾重にも重ねる花弁盛り上がり厚物菊は玄関飾る
お早うに小学生らは声そろえ流行り言葉のオッハー返す

倉島とよ子　展覧会　・信

「墨と樹の三人展」の案内状二ヶ月前に友より届く
北斎の鳳凰の絵の木彫り見る展覧会出で汗ばみてをり
まだ夏日展覧会に会ひし男性（ひと）「母さんに似てきたね」と近づいてくる
今夜も聴く「ストレス解消」のCDを波の音が心しづめる
夫とゐてわづかのことに苛立つもいつしか忘れ一緒に笑ふ
空よりも青く咲きたる朝顔の誰が名づけし「天上の青」
わが家へとこの坂幾たび上りたるいつか我が里と馴染んできたり

久保伸子　白内障　・漣

百日紅散り敷く庭にしじみ蝶色にひかれて戯れており
ホトトギス秋海棠も花もちて夏から秋への移ろい見する
形変え雲の千切るる秋の空見渡しにつつゆく夏惜しむ
暑さ耐えむらさきしきぶ実りたり枝を垂らして秋を迎うる
目覚むればルーペ放せぬこの暮らし白内障の手術待ちわぶ
手触るれば俄かにバッタ飛び立ちぬ早や褐色に変わるもありて

来栖万佐子　名古屋場所　・う

名古屋場所横綱同士の大一番鶴竜優勝わが胸なでる
むこ養子迎えて何と四十年夫の思いこうべの下がる
なごやかに大波小波たつるなく過ぎきし日々を夫に感謝す
もう一度夫を交えて談笑を思いかなわぬかなわぬ運命
農業も資本のかかるこの時代米の乾燥機故障し思案す
海に散り尾翼のかけら納めらる墓石を洗う令和八月
おねんねといえば飼猫ついてくる孫なきわが家我が子のように

黒瀬紀子　水引草　・岡

芒野は風をふくみぬこの道を年月長く通ひ来しかな
傾きて花穂を伸ばす水引が山路よぎる足を脅しぬ
今年また空家増えたる集落の角を曲れば得意先あり
栗を拾ひ木通を仰ぎ辿りゆく行商の径売れずとも良し
「ぼろ着て奉公」と梟しき鳴く邑の道時世移りし行商の道
バックミラーに止まりて吾を見る蜻蛉「今年も会へたね」行商売れず
遊具錆びし廃校にしばし荷を置きて揺るるコスモスに愚痴をこぼしぬ

小泉澄子　百日紅　・茨

待ちおればオーイオーイと友を呼ぶその夫のこえ受話器に聞こゆ
堀川の浅き流れに逃げ惑う蛇一すじにくねくねと速し
最前列なれば熱唱は吾を包む近所の奥さん今日オペラ歌手
墓へ行く道に今年の花なくて彼岸の中日いつまでも暑く
祭典の彩りのはずれ二度三度轟音のしてスクランブル飛行見ゆ
百日紅は隣家の庭にこぼれ散るそを掃きにゆく留守を狙いて
穏やかな青空清しき朝なれどスーパー台風来るという予報

小阪政子　白芙蓉　・森

大災害もたらし台風過ぎゆきぬ明くればいよよ秋に入りゆく
列島を襲ふ嵐は年毎に強烈になるとテレビは告げぬ
セザンヌの静物画まねて籠に盛る秋の果物　やはり場違ひ
ひと気無き空地の隅の白芙蓉日射し昏れゆき花びら畳む
裏通り町の小さな時計屋さん秋のはじめに閉店の貼紙
預かりし時計修理のきびしき眼と店先掃きゐる背中のなつかし
朝寒く漸く夏物蔵ひけり何時も後手後手老の暮しは

後藤元子　ワールドカップ　・葦

美しく年を重ねる女性(ひと)もいて人生それぞれ生き方次第
夏野菜色遊ばせて刻みゆくレモン絞りて今日「野菜の日」
マラソンの選考レースの青空にピンクのシューズで42・195キロ
天高く皇帝ダリア秋に立ち思わず我が身の背すじをのばす
ふるさとの（ラグビー）ワールドカップ開催に外人あふれ町はさまがわり
熱狂するワールドカップファン達経済効果アップ別府の町
ひと知れずひっそり咲いた月下美人しおれた花にざんげする私

こなかよしと　消費税　・鹿

消費税増税と軽く言うなれど中小企業民には重し
アベノミクス経済成長誇示しつつ増税するとは思わざりけり
魂は自分自身と思いつつ時に浮気を疑ってみる
足早やに夏は去りけり彼岸花咲く畔道を父母の墓参へ
仕事にも全力かけた若き日の無我の境地のなつかしきかな
夕暮のビルの窓に映ゆる陽は塒(ねぐら)に帰れと烏にうながす
蓮畑のどろの中より取り出だす魔法の如き蓮根白し

小林さゆみ　めだか　・福

ふる里の小川のめだかは今どこに絶滅危惧種となりて久しき
ペットショップの水槽に光るラメメダカ楊貴妃メダカも人気ありとう
幼日の吾子と夜祭りに掬いたる二匹の金魚を飼いし日のあり
金魚よりめだかが人気か今どきは飽かず眺めるスモールワールド
ラグビーのワールドカップの面白さたちまち俄かファンとなりぬ
押し寄せる壁ものかはスクラムで押し返したり桜の勇者よ
壁あれば押し返しまた超え行かん我も俄かの桜の勇者

小林翠　藤袴　・宙

東北の災害日日に数を増し戦後の治安の悪さよみがえる
安穏な生活に慣れた人間を自然の脅威はひとのみにする
世は移り時代変われど良きこともつらきも耐えるを我らは知れり
香り立つはずの金木犀の花開き届かぬままに窓より眺むる
大菊を庭に育てて四十年そろそろ鉢の整理をせんと
野を行けば秋の草花猫じゃらし風になびきておいでおいです
楚楚として目立たぬ花の藤袴つぼみ恋しや赤紫の

小原香里　渓谷　・昴

雨がやみ渓谷をゆく水かさの増した宮川のコバルトブルー
この山を越えれば奈良へ続く道下り坂にイワギキョウ咲く
水道管の破裂したように落下する水のはげしさ千尋の滝の
音立てて流れる滝の下にいて私の声はかき消されている
二日間あるきとおしたこの膝を帰りの汽車にゆっくり伸ばす
解散しやっと一人になれたのにひとり立つ駅ふいに寂しく
道の駅に買った青菜についている芋虫とふんをていねいに洗う

小原静子　戦く　・渚

十月の高き気温に惑いしか庭木の間に蝉の鳴き出す
季節はずれの梅干しひろげる庭先に季節たがえて蝉の鳴くなり
すくすくと育つ野菜を案じおり風と雨足強くなりきて
台風の二次災害を怖れつつブルーシートのはためくをみる
温暖化の自然の猛威の映像に身を固くして目をそらしたり
避難所は四キロ先の公民館わが家にこもりひたすら祈る
巨大台風の予報に人びと戦くも猪は得たりといも畑をほる

駒﨑五恵　大き虹　・葦

炎天に梅干し返し夜つゆあて仕上げた瓶に令和元年
しましまの太きいも虫草むらに美しきアゲハになれと放ちぬ
どしゃぶりに遠雷一つ身構えば東の空に大き虹見ゆ
久に見る虹に思わず背筋伸ぶ偉大なりたる自然現象
虹の色学生時代の覚えなりあかだいきみどりあおあいむらさき
強風にコスモス倒れ乱れしも色冴え冴えと咲き盛りたり
台風の雨繁きなか号ぶ鳥色づく柿をついばみており

近内静子　細き月　・新

つつがなく今日も過ぎたり庭に見る山頂に細き月が出ている
朝つゆを光らせ畑の野菜らはみな生き生きと光りてみえる
彼岸花こんもり咲ける野の道に亡き人うかぶ次々うかぶ
気ままなる一人暮らしと思いつつ遅き朝食ゆっくり食べる
老いてなお畑の仕事できることアイコトマトすずなり赤く
明朝は人足なると鎌を研ぐ指で切れ味たしかめながら
にわか雨やみて木の間に見えてくる遠き山頂金に輝く

今野勝江　スロベニアの旅　・朱

天高しトリグラフ山の頂きは我が目交にひときわ尖る
雲海の晴れて現るボーヒン湖深き藍色まざまざと見せる
九十九の石段の先見上げたりどこまでも青きスロベニアの空
乗り合わすイタリアの女(ひと)らの先導に「オオソレミオ」の大合唱と
息あげて登る足元群生の香るシクラメンに深呼吸する
ブレツド湖の小さな島の教会の鐘の音さやかに胸にしみいる
ブレツド湖の深き藍色透きとおる群れる魚の近づきにけり

今野勝子　がまずみ　・湾

其処此処に生えてる芒は当たり前と暮らしし七十五年に今瞞うとは
「隠れないで」の願いを込めて一本のがまずみ活ける中秋の名月
ふる里の復元されしハリストス正教会訪えば安らぐ信者にはあらねど
白い障子といぐさの香りはふる里と重なるハリストス正教会
台風の去りて皎皎と照る月は如何に見つめ居んこの水害を
「満面の笑み」とは吉野彰氏のためにある言葉かノーベル化学賞
こころ込め仕上げし書に落款をされど落ち着かず表具成るまで

斉藤順子　同じ齢　・信

夫のもつ草刈機(ビーバー)の音響くなか吾はたんねんに野沢菜を蒔く
車から降りて靴をばはきかへる山の畑はわたしの職場
白髪染めをやめて半年山んばのごとき姿が鏡にちらり
心配をかけし義弟墓前にと供へものなど送りてよこす
最優秀となりたる人は同じ齢われも少しはがんばりてみむ
体調が悪くも稲刈る田に立てば自づと手足快調に動く
稲刈りを終へし我らをいたはるや鳶が見おろしピーヒョロと鳴く

斉藤信子　避難記　・森

あめかぜの烈しき中を男の孫に手をひかれつつ小学校へ避難す
三階の音楽室には四家族すでにそれぞれ寛ぎいたり
ビニール敷物、毛布貸与され五人の臥す位置娘思案す
クッキーと飲料水も配られて持参のおむすび車座で食む
幼らが広き廊下をかけくらべパパに叱られベソをかきつつ
消灯の九時後も避難の人絶えず風雨ますます強くなりたり
眠られぬ一夜の明けて陽のまぶし無事を感謝し校舎後にす

酒井牧　雀蜂　・萬

もぞもぞと何かが動く髪の中払えばちくり転げ落つ蜂
刺されたる痛みを堪え時間外の救急外来へ車走らす
剣山に叩かるるようなこの痛み皆目効かぬ鎮痛剤は
医師宣らす「今夜は何もせぬように」箸をのみ持ち夫が待つのに
渡されしアレルギー薬に半日を眠りこけたり皿も洗わず
激痛のやや治まれば腫れ上がる頭は痒し気の狂うほど
何もせぬに蜂の奴めは十日もの苦しみを課し何処を飛ぶや

坂口正子　十九号台風　・信

今夜には台風十九号が来るといふ物干し竿を地面にねかす
ゴーゴーと吹き荒ぶ風に目覚めたりま暗き部屋に吾はをののく
ザーザーと屋根をこするは何なのか早く止まぬか夜の明けを待つ
ま近なる人取り川が溢れたら　詮無きことが頭を過る
夜明け待ち巡る庭の辺柿の葉の色付かぬまま数多散りをり
何事もなかりしごとく日が昇り倒れしままにコスモス咲けり
うからより引きも切らずの電話あり送られてきしカップラーメン旨し

酒田鈴子　白内障手術　・霧

いにしえの妙なる儀式代々に継ぎ平和なればこそ拝する我ら
歳重ね心身おぼろに濁りしか白内障の手術待つ日
満天の星空見ゆる明日になれ願いを込めて夜空を仰ぐ
朝夕に見守る菜園プランター去年(こぞ)よりの苗ピーマン実る
年を越え今夏に栄るピーマンの艶めく緑こころ養う
触るるたび清けき薫りのトマト苗花のみ点しはや霜月に
抗いて一刷け二刷け隠しゆく白銀の髪女の性は

坂本禮子　出来ごと　・茨

身辺の生活雑貨ふる里へ心身ともに帰省なるかな
夕暮に戻る寸前　事故に遭う不意の出来ごとわが生命縮む
廃車せし故に生活のスタイルを自ずとかえて健脚に進まん
さばさばと免許を返納し自力にて競うことなく八十路へ向かう
わが命亡き父母のもとへ帰らなんエンディング想えば郷愁の湧く
明日あればまたわが命あらたまらん向かう歳月大切に生きむ
大観の水墨の世界観賞す自然のなかに見出す命

佐川久光　ユリの木の並木　・福

ユリの木は年毎強く刈り込まれ花はと見ればいと少なかり
ユリの木の根は逞しくコンクリートの舗道のおちこち割りて盛り上ぐ
読み終えて窓より西の空見ればユリの並木に日の沈みゆく
夏来れば高く繁りしユリの木の病葉(わくらば)あまたわが庭に散る
二階より見ればユリの木に花ひとつわたしは一人笑顔を向けぬ
成長が早いと言わるるユリの木よあなたの生命はいつの日までか
またの名をハンテンボクとうユリの木は北アメリカが原産地なり

佐久間ミツ子　秋深む　・渚

秋の星座こんな処に零れたり金木犀の小花ささめく
こおろぎの声を探りて庭にたつわが足音にはたと止みたり
風化され目鼻わかたぬ野地蔵に石の積まれて秋の風吹く
秋の雲ふわりふわりと流れゆく思いだせない事のいくつか
台風の二度の直撃うけし畑冬野菜みな成育あしき
鋤き終えし畑一面をさすごとく白き雨降る音をたてつつ
台風過の虚空を仰ぐ屋根の上瓦職人いっぷくしおり

さこさちこ　若鷲の歌　・そ

若鷲の歌打ちならす大太鼓逝きし人々遺族をおもう
眞紅なる衣裳をまとい五つなる太鼓のひびき迫力凄し
大太鼓破れぬばかりの音たててホール渦巻く赤き反戦
大平の地に米寿まで生きし我が命捧げし若き人々
戦中派の忘れられない軍歌なりボランティアの人と唄いき
大太鼓鳴りひびきたり戦後なり平和を生きて死者を忘るな
我も又平和を願う一人なり逝きし人々まぶたの裏に

佐々木美枝子　宣明　・湾

二千年の歴史の重みを感じつつ天皇の宣明を誇らかに聴く
内外の二千余人の賓客を前に即位の礼正殿の儀は厳かに進む
高御座より天王の宣明発せらる平和のお言葉重々しくも
天皇の宣明に雨も降り止みて虹立ち奇跡と外つ国の人ら
平安の絵巻さながら繰り広げ即位の礼正殿の儀は厳かに進む
天皇の宣明は世界を駆け巡り平和の尊さに心籠められ
天皇の平和を尊ぶ宣明に日本の行き方示され尊し

定金崇恵　青色の夢　・羊

朝の庭朝顔の種手のひらに来年も咲け青色の夢
稲田道御輿練り行く男らの白装束は秋日を反す
赤・青の鬼の先達幼日の風情顕ちくる秋祭りの宵
秋祭り注連をめぐらす町内に子供みこしの掛け声高く
お隣より炊きたて栗飯手渡され秋の香りと温みにほっこり
寒き風あおられコスモス花萎れ秋から冬へ空気は動く
浜名湖のうなぎの池はソーラーのパネルに換えられうすれる旅情

佐藤絹子　「あかつき」　・葦

金星を追う「あかつき」を探査せる集う学者の部屋の神棚
「あかつき」が迷子になりて五年間無事に戻れた金星軌道
「ワッショイ」の子供の声と太鼓の音令和元年秋の祭典
「ねずみ捕り」粘着シートに四十雀思いも寄らぬ夏の出来ごと
冷房の部屋で新聞手にとれば「おせち」予約のカラー広告
南下した戻り鰹が食卓に上れば秋のいよよ深まり
糠漬けの秋茄子の色つややかな紫映える白き器に

さとうちえこ　秋語り　・そ

おはぎ載る真白き皿は遠き日の悲しさ甘く光る餡色
嵐去り秋の日差しさんさんとそそぐ墓碑に手を合わす幼
千葉昏く悩む停電思いたり月あかりにてしたたむる葉書
望月の月あかりにて書き上ぐる見舞いの葉書同じ気持で
山裾に三本の畝飾る彼岸花赫く横たう緑の中に
立ち暗み吐き気伴うわが前に救急車寄る不穏な秋風
萩の花こぼれ散る秋脳内にかくれんぼした鬼の霍乱

佐藤光正　初秋　・湾

秋の夜に心を静め佇めばただ草むらの虫の音愛し
秋晴れは八パーセントと言う最後の日にソフトを食べに妻を伴い
細くとも秋刀魚を焼けば絵になりて米粒光る久方ぶりに
庭先に据えたコンロに焼く秋刀魚不漁と聞けば頭も骨も
雨上がりに傘を失くしてしょげいる三日三晩の妻の小言きくわれ
霧雨と思いし今朝の散歩道肩に沁み入る傘の雨垂れ
田の水も涸れて稲穂はうねりおり刈取り急げと祈る姿に

篠原日出子　やまい神　・洛

病神に見初められるるが運のつきつぎ次ぎ送り来ラブコールのあらし
したしげにすぅーと入り来る病神進入禁止の札のよめぬか
何をなす気にもなれずにごろごろと病の神の言うままとなる
だめ駄目だ入れるな断れ排除せよ脳の指令もうわ言にきく
どっしりと居座る病魔に困惑し退去願うもむなし日の暮れ
隣り家の工事の音に驚くやたたき出さるる病の神は
秋晴れの空にひと筋飛行機雲　両の掌あげて青空を吸う

篠原まり子　天気図　・羊

十三夜おぼろ月夜を窓越しにテレビは刻刻台風速報
天気図の流れるさまは確実にあした天気になぁれ　遠い日
災いのニュースおどろし人人を思い術なく夜明けの痛み
ラグビーW杯決め手松島ゴールインあの髪の毛に触れたく震う
針子という生れたばかりのメダカの子針よりもっともっと小さい
透明な泡とも知れず目を重ねぴりぴり動く針子のいのち
三日分ヨークサックに栄養を携え孵るメダカの針子

島根美智子　たいらかな日々　・茨

スマホなる小さき機器がたわやすくきょうも知識を授けてくるる
たいらかな日々の証と備蓄水賞味期限の五年が過ぎぬ
白濁の大浴場に足のべてゆったりゆったり疲れをほぐす
ふるさとの土手に群れ咲く彼岸花の茎あおあおと直ぐに伸びおり
治療食始めて三月の過ぎたれば減塩ゆるびわが味となる
県道をつつつつつつと鵠鴿が渡るを待ち合う対向車とともに
ゆるキャラと野菜の描かるる高速バス客と産物を都会へ運ぶ

下村とり子　流しさうめん　・信

卓上に流しさうめん孫子らと小二のをなご上手になが
さ庭辺にキャッチボールのリズム良くぃいちとけんちゃん日暮るるまでを
綿百の野良着に着替へサポーターつけて草ひく二時間ばかり
猛暑日の後に決つて脈みだれ備への頓服のみて時まつ
切れ間なく花火パチパチ四世代盆も終りの風に当たりて
やはらかき菜類にたつぷり水欲しや九月も尽のつよき日差しに
急性の淋巴腫といふ恐ろしき病に友は返らぬ人に

庄司菊枝　秋便り　・渚

染まりつつ水平線は陽を迎え海面しずかに光を散らす
うっすらと夕茜ひく巻雲の入江に映し岬へのびる
友よりの小荷物来たる秋便り天皇即位の切手も嬉し
台風後の今年も枝豆送られし真心変らぬ長きを思う
虫の音もぱたりと消えし台風後秋の裏庭深まるばかり
抱えたる花の名も今ほぼ忘れ米寿の晴れ着の両手に重し
デイサービスの仲間と撮られしこの一年誕生日の朝手渡されたり

新明彰子　貝殻　・葦

かっこ好い生き来し心のこせるに記憶のあまたうすれゆく師は
生き来しの心そのまま過去わすれ恩師いずこに秋をむかえる
真夏日の腕(かいな)なでゆく夕風にホッと息つく八月の尽
この秋も真っ赤に鶏頭ならびたち人を招きて自慢顔なり
恐竜を好みし少年なによりも蚊がきらいだと顔をしかめる
貝殻の三つ入りし缶ゆすりしばしたぐりぬ遠き夏の日
古びたるサクマドロップの缶に鳴るグアムにひろいし貝殻三つ

菅野み江　手荷物　・北

五十代と思い生きいるわが喜寿も運動会は敬老の席
地を蹴りて体はバネの小学生　徒競走の力を浴びる
日に一度かけ合う電話妹のもしもしの声に体調察す
一年の余命の癌の妹は夏を踏み越えひかりの秋へ
ごほうびのごとくに拾う五十円重い手荷物地に置きし時
たちまちに移転決まりて五十年の家具もろともに鋸で切る
春ビオラ夏は鉄線秋の菊植えこし五十年の彩り宿る

須川千恵香　家の遠近　・眉

十五号東日本へ進路指し稀なコースに予測も立たず
台風に電柱は折れ水途絶え瓦礫と向きあふ真剛なる人
異変なる天災人災吾が事と穏しき生活護り合ふべし
海岸の入り陽を見せむと孫娘思案の暮れか今日敬老の日
河と海の境は知れず先方の島は淡路と孫のスマホに
阿波土柱は世界三か所波濤嶽自然の脅威に身の縮みゆく
遠足に友と見上げし柱上に松掲げをり程よき配置

杉浦詩子　ロッキーの山　・宙

雪渓の割れ目から滲む水を口にふくみて真夏のロッキーに立つ
ロッキーの山々せまるハイウエイただひた走る広い広いカナダ
ロッキーの山懐に湧きいずるホットスプリングスに同級生集う
じじばばが大声はりあげフロイデと第九歌えばこみあがる歓喜
おばあちゃんお胸に羽がはえてるの？飛んで行くというわれに孫問う
星奈ちゃんはわが孫四歳なんでもできるもしかして天才ねえおじいさん
さっそうと闊歩のつもりわれの背に若き隣人気をつけてと言う

杉本博子　耳底に　・眉

南蛮ぎせる咲きしとふ師の電話の声しかと封印わが耳底に
根の無きをかなしむなかれ思ひ草淡き紅身の内深し
麺つゆを心ならずも買ひ求め手作りの味またひとつ消ゆ
美しく老いるを標に生き来しに現実ひややかあざ笑ひゐる
雨上がりアマリリスふいに返り咲きここはどこかと戸惑ひをりぬ
黄の蝶の松葉にしばし止まりゐて不意にひらりと緑縫ひゆく
女郎花夫より届く便りなり黄に染まりし庭立ち難し

杉山睦子　黄の色さえて　・朱

庭先に咲ける小ひまわり手折りきて墓に供えん黄の色さえて
針のなす芽ぶきの玉葱細かりしひっそり影を落とす夕暮
秋雨は白菜畑に降りしきるみどり増しゆき広がりてゆく
草をひく父の野良着は汗まみれはるかを思いつつ我も草ひく
ふき出でし汗をすいこむ野良着のままスイカ食みたり冷えし西瓜を
花桃の熟す実あまた木下闇香りを残し夏は終わりぬ
明日より上がりしという増税にささやかなれど地下足袋を買う

鈴木武子　英霊　・朱

英霊の子等も老いゆき彼岸会の供花わずかに荒草茂る
それぞれの戦地に散りし英霊の墓碑群苔むし蜩の声
炎天に自転車引きゆく人ありて杖のかわりと笑顔かわせり
実りなきも枝をひろげて柿青葉つくる日影に猛暑しのげり
熟女会話題はきまりの健康と痴呆そしてまたねの挨拶で
たおやかに紫式部秋陽ため小さき玉花艶めかせゆく
ラグビーのトライの気迫に魅せられて思わず一人拳あげたり

鈴木剛之　日々忙々　・福

安達太良の麓は広き金の海小島に見ゆる大玉の屋敷森は
怖怖と赤児の頭を腕に乗せ稽古の吟詠を子守り唄とす
夏掛けのケットを蹴って首を振る孫よ頼むよどうか寝てくれ
朝と午後子守りに通いてはやふた月長女は嫁女が幼稚園まで
ラグビー杯一丸となりて押す日本連続パスから突進トライ
携帯に台風警報鳴り止まず点滴のみの妻を見守る
わが町の従弟の家にも雨水が来て畳は道路に回収進まず

鈴木三津子　雷光　・習

幾重にも重なる雲の間よりもれくる光暗き赤なり
一瞬に街全体を赤くそめたちまち消える赤不気味なり
細き道家へと辿るその間雷はさまざまな光見せたり
絶え間なく音を響かせ雷は我が住む団地に近づくらしき
人影のとだえし道を辿りたり雷光の色はかくも多彩か
雷光の屈折具合と思いたり珍しき光を見つつ歩めり
江戸の絵師ら現代人にわらいかけ「夏の小さなもののけ展」終る

高取尚子　雨蛙　・岡

新聞受に住みて動かぬ雨蛙まだ眠たげに朝日受けゐる
畑つくり体に合はぬと止めし友の噂しつこく伝はりて来る
帰化植物が畑の肥料吸ひあげて畑作よりも茂る腹立ち
雉子鳩がでつぽでつぽ鳴き合へる畑にゆけば畑もの無惨
宮の森に祭り太鼓の聞けばあの道この道晴れ着が揃ふ
大正の世より茂りし真榊を切りて捧ぐる今日秋祭り
氏神の石段登る足力ふと揺るぐとき支へを思ふ

鷹野長子　瞑想　・朱

診察を待つ間の長く三時間我の修行と瞑想に入る
足腰の弱りし母の台所娘等は黙して立ち働きぬ
在宅の老々介護友の日日に仕上がる梅を尊くいただく
寄りくるは県外ナンバーのマニア達迫る列車の一瞬ねらう
速度増す通過列車にシャッターをと線路際まで人等ひしめく
風吹けば黄金波打つ田の見張り案山子の眼つりあがっている
ガクランに髪逆ちて立つ案山子ひたすら願う今年の実り

髙橋啓子　畑　・昴

大根の種がつぎつぎ発芽する快晴つづく秋の一週間
去年の父の言葉も思い出し秋の畑に植えるたまねぎ
一日を話す人なく玉ねぎの苗百本を畑に植える
半年間ほったらかしの畑中に草が育ち茂る笹の葉
草刈り機操り前進ワイヤーに削られ飛び散る草が薫る
ガソリンが無くなるまでを区切りとし草刈りをするバッタよ逃げろ
起きあがることなく午前三時半筋肉痛に目覚めて耐える

高橋光代　里の秋　・渚

人間の環境汚染の報復か地球の怒り台風襲来
大雨を降らせ汚染を洗浄す人間相手に自然の挑戦
台風の通り過ぎたる朝の庭金木犀の香漂い来るなり
里の秋口ずさみつつ栗拾う台風去りし秋空の下に
栗ご飯お節の甘露煮思いつつ秋の夜一人栗の皮むき
十月と言えど暑き日続くなか頬触る風は秋の気配す
毎朝の散歩に出会う青鷺の傾げし首にひょいと会釈す

田口紀久子　この秋　・鳩

引つ越しで庭の木犀伐り倒す年ごと呉れし香り「ありがと」
木犀の香り恋ひしと歩めどもその気配なく十月を過ぐ
スーパーの横に匂へる木犀に足を止めつつ見上げてゐたり
嗅覚の衰へすすむ吾なれど小さき花見て記憶をたどる
台風に守るすべなき胡瓜の花卓に飾りてその黄を見つむ
大楠の巨大な幹に鷲きぬ樹齢いかほど湊川神社に
明日は父の命日せめてもと菊とりんだう大束求む

辰巳洋子　プール　・葦

まだいける老化に勝る好奇心プールの水は久々なじむ
その昔コーチと呼ばれ戯れたプールサイドをそろりそろりと
三姉妹とりどりの色に染まりたりされど遜わぬDNAぞ
腰や膝いたみを戸棚に鍵かけて今日はプールへ明日はダンスへ
辛いのと訴える人との六十分笑みのこぼれて溶け始む氷
ポイントを外したるらし発言の羞恥と後悔ゆきかう夜中
探し物一日中を支配されようやく叶いてサンマのうまし

田中純子　銀の穂　・桜

「雨雲が来るからこれで帰ります」外壁工事は雲行き次第
住まいごとシートで覆い外壁の工事は空の青さえ覆う
気に入りの靴下片方見つからず言いようのなき秋の喪失
一群れのすすきを残し刈られたる休耕田に銀の穂ゆれる
二度咲きの金木犀の香り来て言いそびれしこと今伝えよと
瀬戸内の芸術祭の伊吹島アサギマダラの飛来を告げる
ふじばかま咲かせ飛来を待ちわびるアサギマダラは瀬戸の島舞う

田中富子　遊水池　・鳩

千年の湖のごとくに水たたえ遊水池には水鳥うかぶ
方舟はいずくにやあるノアのあと継がむ者とて神見いだせず
二日経ち泥濘の原と変わりたる遊水池夢の跡のごとしも
残されし水たまりに魚の影見えて逃げおくれしは汝のみにあらず
地下宮殿と呼ばるる貯水池口切りに水ためて天に一矢むくいる
台風に吹き荒らされし朝の庭秋明菊の白いまだ咲く
年ごとに勢力を増す台風に負けるな日本沈むなニッポン

谷川節子　曼珠沙華　・朱

しろじろと花ひろげゆく曼珠沙華このひとところ優しさに満つ
下校時の声ひびきくる道にきて咲きそめたる曼珠沙華見ゆ
葛の蔓フェンスへよじり葉の間へ赤紫の大き房花
葛の花強き日差しを浴びながら色あせつつも花房立てて
ひと夏の埃をかぶり道沿いへ葛は大葉をひるがえしおり
電線に等間隔に休みつつとんぼらは飛ぶ秋暑き空へ
ゆきあいの空のもとにてさるすべり色褪せぬまま揺れつづきおり

田村利子　季節　・洛

蒸しむしと蟬騒がしくなく季節地蔵のまわりにつゆ草の花
今年より地蔵まつりは一日となりて大人が手品たのしむ
今し方降り過ぎし雨においたつ夏のおわりのみちの上ゆく
いく筋も風に日矢さす若葉みちひかりとかげの幾何学もよう
九月十日過ぎてようやく暑さよわり朝の散歩は気持ちほぐるる
阪神や広島ファンの集まりて朝の体操複雑となる
九月には終盤となるプロ野球ファンがそれぞれ思い言い合う

千葉範子　前足の鎌　・朱

落ち蟬に触れし瞬間飛び出す羽の力に命のありて
落ち蟬を拾えばもがくこそばゆさ触れたる命弱くなりたり
干からびて蟻に引かれる螳螂の振り上ぐ様の前足の鎌
神無月台風余波の流れ雲東へ向かい西へは行かず
吹く風の上に流れるちぎれ雲解けてゆくなり日に照らされて
秋空の下に燃え立つ鶏頭の際立つ庭に薄出揃う
紫蘇の穂は無駄なく実り塩漬けの薬味となりて保存されたり

千葉む津　秋田へ　・湾

熊注意の立て札目立つ秋田道は色づき初めし山並み連なる
黄金なす稲田芒野山間に広がる豊かさ白鷺が舞う
コンコンと湧き出す清水にハリザッコ古代の生物命をつなぐ
かがり火に仄かに浮かぶ踊り子の妖しきまでの姿にうっとり
盆踊りの端縫い衣裳のあでやかさ逝きし人らの蘇る宵
編み笠に面をひそめてそろり舞う細き指先浮かぶ宵やみ
雪国の暮し広がる絵に見惚れ藤田嗣治の世界は広がる

塚田禮子　台風　・信

停電も二日続きぬ真夜の空をベッドで眺む台風一過の
剪定し姿整ふ松の大樹夜空にうつるシルエットのごとし
媼らのあつさ凌ぎし枡形は紅葉の進み静もり返る
ナンバーの異なる車の駐車場紅葉の下スノーボードに沸く
新そばの食券を買ふ長き列一時間余を待つ連休快晴
真田氏の縁に結ばる九度山の名物の柿列なし購ふ
ふえつづく木賊に寄りくる蝶とんぼとまれば撓むを飽かずに眺む

寺尾妙子　桜貝　・岡

砂浜に残しし二人の足跡も消えしか秋の夕日が落ちる
杳きあの日の物語覚ゆるや没ちゆく夕陽の芯に残るを
初旅の二人を乗せて走りたる白兎の浜の蒼さ忘れず
食卓のひとり居の食器の触るる音秋の朝は秋の音立つ
夕焼を伏せたコップはそのままに青きコップに牛乳注ぐ
買ひて来し惣菜を大き皿に盛り病癒えし日の独りのディナー
一人のみ暮らす厨の戸棚には亡き夫の箸そのまま残す

照井美枝子　若者　・湾

温暖化を危惧する若者の心意気台風一過の空よ清けし
十月十日は晴れの特異日なれど異常気象増しどうなるこの地球は
戴きし「もってのほか」は菊の花匂いやさしき秋ならではの
今もなお店には蝗の佃煮が思わず手に取る懐かしき味に
八年前のあの時を超えし映像はそれより深き水害の傷
供養とは亡くしし人を偲ぶ事と妹と語る母の命日に
稲刈りを終えてはすぐに拾う落穂に米を愛しみし父の思わる

戸板和子　私の秋　・湾

雨の日は休みし散歩坂登りゆき余光に暮れる山脈仰ぐ
軽々とニセアカシアは黄葉になり遠きラッシュの騒音に揺れ
秋雨にひときわ伸びる菊の群れ折りし二本の香にむせび居り
月の道をスキップしつつ行く少年よ遠い日のわれの姿も鮮やかに
彼岸花の冴えたる赤も秋を告げ私の秋を盛り上げて居り
ひと群れのエノコロ草は薄茶色いつもこの季は入院してた亡夫
夢に会う亡夫の声さえ聴けずして早起きをして少なき家事を

冨田鈴子　賞味期限　・大

朝露にきらりと光る蜘蛛の巣にじっと動かぬ小さきいのち
膝まじえ火鉢にあかぎれの手を温むドラマに遠き日を思い出す
炊飯をタイマーつけて炊ぎつつ母の背うかぶかまどふきいし
ひとり暮らしに余る食材いくたびも賞味期限を確かめている
捨てがたきバラの写真のカレンダーで封筒作ればこころなごめり
手折りては仏に供うる白菊の残り少なき今朝の庭なり
玄関に亡き夫の靴そのままに手を携えし日は遠そきぬ

朝長美代子　悲しき秋陽　・沖

乳がんの手術(すべ)終えし吾をさりげなく労りくるる短歌(うた)の友らは
畔道に彼岸花の朱燃えさかり藍深まりし空に挑めり
吾病めり夫も病いのみつかりぬ令和元年悲しき秋陽
健やかな日々愚痴多く過ごしたり病みて知るなり幸せなりしを
秋深み道路彩る柿紅葉病む身につらき時の移ろい
手術終えし吾を訪ねるとの電話あり友待ちおれば急死の知らせ
夫の病い再び立つこと難しとベッドに残る杖片付ける

長岡知子　台風十九号　・湾

豪雨への警戒レベルは五となりて穏やかならず「冠水せぬかや」
雨風の激しさは夜半に極まれり屋根打つ音に一夜眠れず
易々と容量を超え放流のダムが幾つも。どうなる下流域
氾濫を知らせる着音のけたたましその都度怯え胸はざわめく
川に沿う人家全てが泥まみれああ濁流の為すがままとなり
ひと日過ぎそして二日後知らされる被害は甚大。何ということか
被災者の泥に侵され呆然と途方にくれる姿かなしも

中澤みさ江　旧市内大星　・信

蚕糞さんの角大櫟切られたり　大き空洞たくまし命
三かかえもある程太き櫟かな　何故に切られる土用暑き日
昭和の中頃までの大星は一軒家なのりんご畑よ
大櫟の角を曲るとすぐ側の木立の中の一軒家なの
果樹切り家建ちはじめ自由ヶ丘石ころ道を舗装されたし
家の道市の道路にと取りあげて舗装などする市長の考え
草刈の若者一人利鎌持ちあじさい夏菊みんな刈りしよ

中島阿津子　約束　・湾

六歳の少女は口をきつく結びおすまし顔に近付いてくる
わたしには二年前はつい昨日幼い者には記憶の彼方か
ようやくに思い出したか走り来る少女は秋の日差しのように
ママの手を放して走る六歳児の髪に揺れてる日向の匂い
ランドセルは祖父母の役目わたくしは色鉛筆をと小さな約束
結ぶ実のあらぬ桜を見上げいる終には孫無きわたしの一生も
実は無くも春に華やぐ桜木よ人に待たるる又となき一生の

永田多恵子　ハス祭り　・湾

はじめての夏の伊豆沼目新し見渡す沼面は蓮に覆われ
小舟にて蓮の林を分け行けば茎の靱さにおどろく今更
白鳥の好物の蓮根太らせて人間にはピンクの花の楽園
手を合わせ祈る形か蓮花の蒼気高くつと天に向く
ふっくらとえもいえぬピンクの蓮花の貴き一華にまみえる法悦
直立の太き蓮茎の戴ける花のすがたに浄土を想う
蓮の葉にふんばり漁る白鷺の白きアクセント緑にまぶし

中津川洋二　庭木　・湾

スチールの梯子に乗りて庭木切る職人の姿を尊く見つむ
キリギリスはわが庭隅で鳴いているその一途さを羨しみて聞く
庭の木に蝉が止まりて鳴いていしこの夏のこと思い出しおり
この頃は蝗を捕る人も居なくなり何かさみしい田圃の風景
紫陽花の花の青と白とが太陽に当たりてきらりと光って見ゆる
わが庭に雉子が飛び来て何かしら餌を啄む姿いじらし
庭の木を一途に剪定する人たちの健気な姿の何か尊し

中西淳子　保護子ねこ　・天

ケージより放すや跳ね駆けとっ組みて三匹子猫天地味わう
遊び果て薄夕暮れにこねこ鳴く母ふところを恋うる幼さ
きょうだいに玩具とられてすぐ別に興ずる子ねこの優しき気質
楽しくてならぬよ毎日子ねこたち叱らるるとてでんぐり返し
エネルギー溢れるままに取っ組みてみじかき幼年全速駆ける
悩みよそに日々に懐きてはしゃぐねこ孫を見守る祖母の心地へ
子ねこ去り小さき玩具の三つ四つねこの手届かぬ隅に残さる

仲西正子　光　・沖

日にひとつ感動をして笑うこと朝の鏑が光にまろぶ
家中の鏡に映し七十歳の本当の顔を探しておりぬ
ガジュマルの気根にあそぶは殻にあらず空蝉にして朝の陽の透く
台風の動き刻刻かわれどもオクラの花は鮮やかに咲く
外飼いの目高はときおり浮草の影より窺うしずかな水面
近よればすぐに浮上し尾鰭ふり群れるグッピィーやや太りぎみ
朝毎に餌待つ目高とグッピィーの小さきものらは遅れ浮上す

長野美佐子　燃ゆる　・茨

甲子園暑さにめげず球児等の輝く眼ボールをつかむ
八月の燃えて燃えたる球児等の照りつける陽を撥ね除けながら
汗光る球児の肌の茶褐色延長戦に互いに譲らず
ホームラン空をアーチす熱戦に涙す勝敗夏空の下
打ち水は楽しき模様を作り出す地図かとも見ゆ小さく日本
台風の予報は伝う不要なる外出控え身の安全を
防災の予想もできぬ昨日今日必要とせる薬を加う

長畑美津子　昭和は遠く　・風

透きとおるような満月西空に残りて今朝の冷気ふるわす
幼な日の母待つ畦に親しみし野菊見つけぬ秋のひかりに
青春の挽歌詠むのは止めようか昭和は遠くなりたることぞ
省みてわれは昭和の人なりきバブル・大戦・父母の農耕
九階の屋上より見るふるさとの変わらぬ稜線いま陽が沈む
またひとつビルの増えゆき遠かすむ山脈消したり視野の中より
癒えたると言えぬ口惜しさ裡に持ち令和暮るるや冬近き雨

中原陽　解約　・森

思ひ立ち遠き銀行に出向きたり使はぬ通帳の解約せむと
久々に訪ひし銀行慣れずして小さき声に「解約」と告ぐ
通帳の解約の印は亡き姑に貰ひし「中原」初めて捺しぬ
通帳の解約すみて駅前のコーヒー店にカフェラテ飲みぬ
働き者の農家の隣人病まず逝く穏しき声を皆に残して
八十五歳化粧の面の若々し農家の主婦は柩に眠る
デイ・ケアの運動の一つ鶴を折る指先に血のめぐりてゆかむ

中村志津　弟逝きぬ　・漣

神頼み終えて戻れば留守電に弟の死を報せくる声
たまさかに歳の差四つの弟が先に逝きたり啼く明け烏
なんのかの世話になりたる弟が長患いもなく世を去りぬ
火葬場に遺骨とならん弟を待つは長かり身の置き場なく
火葬され骨となりたる弟は弟ならぬ骨の弟
たわいなき幼き頃の口喧嘩かけめぐりたり弟の葬儀
父母に続きて姉が、兄が逝き弟までも黄泉へ旅立つ

中村はるみ　秋　・昴

団栗を踏みゆく足裏ここちよきひとりの秋をこころに伝う
冷蔵庫に忘れられしこの夏の飲みかけのサイダー　白き沈黙
吊鏡に映る灯り拭いてもひとつの思い消えぬ秋の夜
団栗をころがす道の静寂に熊出没の放送流るる
秋の日につるす喪の服愛するひと送りし日のまま型の古びて
喪のなき年月を幸と思いつつ月光にかざす黒き真珠玉
ひとりなれば流しに顔をつきだし熟柿ほおばる秋の日の昼餉

中村百合子　ホークス優勝　・筑

ホークスの優勝祝ふ王会長過去を偲びて歓喜一入
日本一決まつた瞬時歓声は日本国中歓声の渦
宙を舞ひ工藤監督最高の喜びに沸く姿ほのぼの
日本一ビールかけ合ふ選手らの喜ぶ姿に拍手送りぬ
新聞を拡げて今年のホークス戦夕餉の支度早めて観戦
草の中うごめく甲の幼虫に来年までと土にうめおく
自衛隊ボランティアと探せども行方わからず一月(ひと)を過ごす

中山真弓　オニヤンマ　・信

オニヤンマに子供ばかりか大人までひきよせられて今をよろこぶ
よそ見してオニヤンマだと一人の子男児らかけより授業どころか
注目がオニヤンマにむく児童らを先生のスマホがぜんぶをうつす
籠に入れお墓のあけびをおかざりに先祖まつりの場にふさわしく
しつらえて庭のざくろを持ちし友田舎の自然をめでる素敵さ
甚大な台風被害の千葉県のモリケン知事がやるせない顔を
危機管理千葉県被害で明るみにモリケン知事への不安的中

西佐恵子　雨　・湾

天高し揺らぐ香りは銀木犀さ庭にちいさな秋の訪れ
ふる里の芋煮会の懐かしき青空の下煙たなびき
台風十九号の降り止まぬ雨に胸騒ぎ川の近くに住む子ら居れば
子らの無事きいてともかく安心す温暖化というは地球を荒らす
被災地を打ちのめすごとまたも雨、恵みの秋を根こそぎ奪い
天災のかぎりを尽くすかこの年は即位の礼の資客にも雨
日常の営みのあるありがたさ方便(たつき)断たれし人ら傷まし

西堤啓子　ひらりひらりと　・天

炎熱を歩みし指をなぐさめてひらりひらりとペディキュアを塗る
若き友と手を伸べ葡萄摘みし日と月の光は変わらぬものを
姪の住む異邦の町を地図に追う見知らぬスペル鍔(はがね)のごとく
遠雷のもたらすものを占いて背中で怒る人にささやく
そよ吹く風に頬寄せ目を閉じてひとり見る夢タヌキがこけた
しらじらと骨になる日は珊瑚樹の海に洗われ泡と消えなん
火山島の海に住むとうタイマイの泳ぐ速度で息を吐きだす

西畑睦子　ポーチュラカ　・大

一夜にて季節かわりぬ鰯雲ここち良き風虫の音はこぶ
ひとまずは悪しき細胞消えゆきて夫解放さるビールで乾杯
人生の酸いも甘きも携えて点滴押す人病院の廊下
盲目の夫を支える妻に会い足らぬを言うはと反省しきり
病院のロビーにて聞くコンサート音色はやさしクラリネットの
新芽ふき青葉で揃う公孫樹並木黄葉まえに刈取られたり
毎朝にベランダに来るシジミ蝶ポーチュラカ鉢の蜜を好むか

新田とし子　祈り　・沖

この秋を思い出だすは辛きかな河川大氾濫は何れの怒り
繰り返す大災害に逝きし人われは冥福祈る外なく
あり得ざることのあり得る現代よ永久凍土のなぜに解けゆく
本日は水俣忌なり世の諸悪濾過沈澱し青の海原
九州の隅また隅に住むなれど水旨きことのありがたきかな
髪洗い髪少し切るふっきれぬ思い沈めつつ今を生きいる
即位ありて令和元年始まりぬ称号に添い前途やすかれ

野玉　幸　　花にうずもれ　　・洛

草ひきて汗にまみれしその先に萩の赤しろ風にゆれおり
枕辺に夕べおきたる歌のメモＦＡＸせんと探せどなくて
乳癌で夫と息子に見守られ四十八歳ひとりの旅に
亡き母の好みし花を子手ずから三鉢も活けて棺の前に
アートフラワーきれいを作る魔法の手もつサッ子さん花にうずもれ
電話帳歩数もわかるケータイの二日不明に右往左往す
ケータイが宅急便で戻りたりもう離さない抱きしばかり

■A欄推薦について

次の年度にA欄に推薦する会員のいる支社・グループ長は、四月十日までに小野雅子宛に資料をお送りください。B欄で三年以上経過していることが必要条件です。

・記入事項…①氏名　②生年月日　③職業
④入社年月　⑤歌歴（B欄になった年月）
⑥短歌に関わる業績など

五月に行われる全国大会の運営連絡会で承認されれば、十月号からA欄会員となります。

◆◇◆第一歌集の頃◆◇◆

藤森　巳行　『無冠集』

二〇一〇年十一月十八日発行　明正社

●自選五首

・脱殻機のエンジン止めてマスクとる父の笑顔よ麦藁を負ふ
・人を恋ふ想ひを胸に今日も立つ夜間工事のライトの中に
・天空に月あり星あり宇宙あり晩秋の空に深呼吸する
・物事の黒白正邪にこだはれる我が生き方もいささか古いか
・出会ひ後の返事の手紙に逢ひ見ての和歌書きし人我が妻となる

●ミニエッセイ

歌集を出す気は全くなかった。高校入学と同時に文芸部に所属した。顧問の目崎先生は歌人で地中海の同人であった。したがって部員達は先生の指導のもとに短歌を作った。その発表の場が地中海であった。しかし地中海に在籍したのは三年間で卒業後は退会してしまった。その後四十年を経て五十八歳の時、再び短歌に向き合う決意をし、地中海に再入会した。残念なことに香川先生も、憧れであった小野茂樹さんも既に亡くなっておられた。しかし素晴らしい先輩や仲間と出合うことができた。その中の一人である関根和美さんに歌集を出すよう強く勧められた。その気になってしまい、久我編集長に選歌をお願いした。多忙にもかかわらず快く引き受けて下さった。跋は市原志郎先生にお願いした。市原先生の奥様のやよひさんは目崎先生に教えを受けた私の姉弟子に当たり、不思議なご縁でもあった。身に余る跋をいただき感謝している。そんな訳で地中海の皆様のお力添えをいただき『無冠集』は出版できたのである。

クリップ

■入会届・退会届について

葉書に、①氏名（ふりがな）②住所　③電話番号　④生年月日　⑤性別　⑥送本開始（停止）月を記入の上、本社に提出してください。退会届の場合は、①②⑥の記入をお願いします。急な送本停止には対応しきれませんので、ご了承ください。

■会費納入について

会費は、半年分、または一年分を前納することになっています。各欄の月額は次の通りです。

・A欄　二〇〇〇円
・B欄　一五〇〇円
・C欄　一〇〇〇円
・購読　一〇〇〇円

二十歳未満の学生は五〇〇円です。（若い人たちも是非ご勧誘ください）

00160・4・179569　地中海社

振替用紙の連絡欄に内訳をお書きください。支社・グループでまとめて納入していただけると幸いです。

■原稿用紙の申し込みについて

一冊一五〇円。それに送料がかかりますので、まとめてのお申し込みがお勧めです。本社、または担当の茂木斌までご連絡ください。

■本誌の追加注文について

本社に葉書にてご連絡ください。代金は一冊一〇〇〇円。会費と同じ「地中海社」の口座にお願いします。

■見本誌について

勧誘用に見本誌をお求めになる場合は、送料のみご負担いただきます。二冊までなら二〇〇円分の切手を同封してお申し込みください。

■叢書を出版する際には

地中海叢書番号をご請求ください。葉書に住所氏名の他に、①歌集名（未定の場合には仮題でも）②発行時期　③版元を記入して本社宛に。折り返し、登録した叢書番号と事務手続きの文書をお送りいたします。出版後には本社保管用に一冊お送りください。

■九曜書林は、比較的安価な歌集出版を考えていて、自分ではどうしていいか分からず困っている方のために立ち上げました。印刷・製本は、本誌の印刷をしている京成社にお願いしています。二、三〇万円くらいでも予算に応じた出版が可能です。まずは、編集部にご相談ください。

■桃原邑子歌集

『沖縄〈新装版〉』注文受付

ご注文を受け付けています。一冊**2000円**（税と送料は桃原氏負担）です。六花書林からの出版ですが、代金の振り替えは**九曜書林の口座**を使わせていただきます。口座への代金納入をもってご注文とさせていただきます。冊数・氏名を明記の上、左の口座へお願いします。

00180・2・790055　九曜書林

本社よりスマートレターにてお送りいたします。

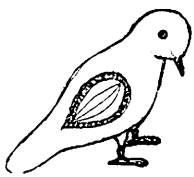
■本社への連絡について

葉書か封書でお願いします。電話はありますが、常駐する者がおりませんので、誰かが本社で作業している時にしか通じません。急を要する場合には、

・藤森…TEL　090-8301-6423
・久我…TEL&FAX　043-241-7925

までご連絡ください。

■本社の窓口は、いつでも開いています。どんなことでも遠慮なくご相談ください。歌集の出版につきましても、予算やご希望に応じてできる限りの対応をさせていただきます。ご意見その他もどうぞお寄せください。



神田通信

◆二〇二〇年の始まり。今年もよろしくお願いいたします。名簿の発行は年度切り替えの後に少し先送りします。しばらくお待ちください。

◆今年の全国大会は浜松大会。5月31日・6月1日の一泊二日です。詳しいご案内は二月号から。二月号に参加申込の振替用紙を添付します。（藤森）

◆旧年は度々、なつかしい地へ立ち寄る機会があった。以前から知っている地というのは、また新しい眼でみる発見があり、心動かされるものだ。（奥田）

◆船田清子さんの『西域紀行』一気に拝読。同じような場所を旅しているにもかかわらず、私は一行も書けなかった。ボーッと生きていると痛感。（磯田）

◆干支の最初「子」の歳ですね。天皇の代がわり、わが家も代がわりでスタートラインに立つ気分です。災害の少ない年となりますように。（和美）

◆はじめから二時間かかると分かっているときと、予期せず二時間待ったとき、疲れは倍ほどちがう。病院での話です。（小野）

◆千家照子・昭和五年『朱桜（ははか）』という歌集を出して注目されたという。「おほらかにつくれる山よ海よ野よ、うまし出雲の国人われも」三十五歳で病死。「朱桜」は上溝桜の異名と辞書で知った。（茂木）

◆ドラマ「時効警察」が再び始まった。時効となった事件を趣味で捜査するこのドラマの良さは「無意味」。課長役の岩松了の面白さは格別。（三好）

◆子供の学芸会の演目は「西遊記」。小三全員百人で演じるので孫悟空役の子は幕ごとにいて五人。金角・銀角なども複数人。うちの子は牛魔王の家来。（玉井）

◆首里城が炎上した。沖縄戦で消失後、復元が完了したばかりだったのに。「必ず再建、全身全霊で取り組む」とデニー知事の決意が心にひびく。（高尾）

◆日曜日の朝、時折聞くNHKラジオの「音楽の泉」。音楽と溶け合う皆川達夫さんの解説。「さあ一緒に聞いて参りましょう」に誘われる。（浜谷）

◆近所の和菓子屋で丹波産の黒豆と、駿河湾の桜エビを使った餅が売られていた。仕方ないので家内は両方を買って帰ったという。（成彦）

◆「文藝」冬号の特別寄稿「二〇一一年からの『踏み絵』そして『盆踊り』」という大友良英の文章にぐっときた。（藤田）

◆CMプランナーだった男性が自身の妻の表現として「怒るときはベスビオ火山のように」と書いていた。この固有名詞の比喩が妙に頭に浮かぶ。（檜垣）

◆十一月十五日（金）、今号の編集作業。玉井綾子さんの助っ人ぶりは、もはや助っ人の域を超えています。それより前の五日には十二月号の校正作業。ここでも玉井さんと福島から駆けつけてくれる藤田美智子さんに助けられること〝大〟。感謝！

◆毎月滞りなく「地中海」が発行できるのも皆さんの支えがあってこそです。二〇二〇年もよろしくお願いいたします。

◆十一月号に掲載した「宮柊二と香川進」の続きを今号に。戦後に初めて出した歌集『氷原』。素稿段階で宮柊二に目を通してもらっていたことに改めて二人の信頼関係をみる思いです。佐佐木幸綱氏が初めての歌集『群黎』を出す時に小野茂樹に原稿を預けていたことも重なってくるように思われます。

◆「地中海」創刊七十周年も視野に入れつつ、変わらぬご支援をお願いいたします。（久我）

●1月・2月の本社予定●

1月7日（火）…校正
1月17日（金）…編集
1月25日（土）…歌会
2月4日（火）…校正
2月14日（金）…編集
2月22日（土）…歌会

作品募集〈写真・歌合わせ〉

＊写真A・写真Bのいずれかを素材に短歌を一首、自在に遊びのつもりで作って送ってください。

A

B

【写真：木村　文子】

《要　項》

- 締切：令和2年1月末日
- 掲載：4月号
- 官製はがきに選んだ写真AかBかを明記の上、一首を書いて左記にお送りください。（一人一首のみに限ります。）

〒535-0005　大阪市旭区赤川4－23－17　田土　成彦

令和二年一月一日発行（毎月一回一日発行）第六十八巻第一号

「地中海」1月号・通巻740号・編集人 久我田鶴子・発行所「地中海社」
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-5-9 神田カトランビル402号・振替 00160-4-179569
電話・FAX 03-5280-8877 http://www.tityukai.com/ 1000円 印刷・京成社